GAP-JAPAN NEWSLETTER
UFOと宇宙哲学の専門誌

UFO contactee
コンタクティー

SPRING
1985
88

驚異の
高松市円盤降下事件！

人工衛星による写真と地球上の異様な発見物

米政府はUFO問題の真相を公開せよ

太田市上空に頻出するUFO

テレパシー開発基礎トレーニング

UFO contactee　第88号目次

〈巻頭言〉高松事件の意味するもの ―― 1

驚異の高松市円盤降下事件！ ―― 伊藤達夫・2

大盛況のＵＦＯ写真展 ―― 13

「ムーンゲート」第９章　人工衛星による写真と地球上の異様な発見物　ウィリアム L. ブライアン 14

米政府はＵＦＯ問題の真相を公開せよ ―― ダニエル・ロス 19

ＵＦＯは私たちを注目している！ ―― 22

神戸港にＵＦＯ出現？ ―― 23

太田市上空に頻出するＵＦＯ ―― 久保寺信一 24

不思議な予知夢の実現 ―― 内藤重雄 26

ファンタジー＝開発基礎トレーニング ―― 久保田八郎 28

イスラエル＝スイスの旅の思い出（２） ―― 参加者有志 31

〈投稿欄〉ユーコン広場 ―― 34

〈報告〉福岡支部大会／第１回神奈川支部大会 ―― 36

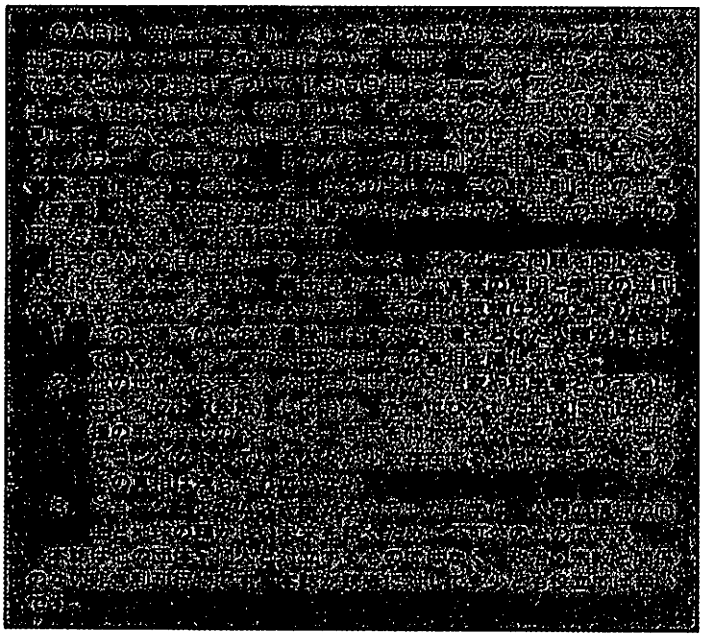
〈予告〉60年度地方支部大会 ―― 37

〈広告〉エジプト・エルサレム宇宙考古学の旅／ＵＦＯ写真展 ―― 38

〈広告〉アダムスキー全集／ルールドの奇跡・アトランティス大陸の謎 ―― 39

日本ＧＡＰ全国月例研究会案内 ―― 40

GAPとは

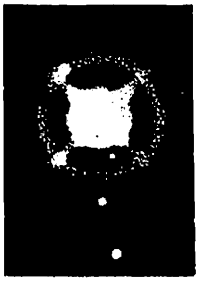


表紙写真は西本京生ちゃん。本号記事「驚異の高松市円盤降下事件！」参照。（撮影　伊藤達夫）

★本誌掲載記事の内、海外関係のものは翻訳転載権取得済。
全記事・写真共他の印刷物への無断転載を禁じます。

〈巻頭言〉

高松事件の意味するもの



高松市で大事件が発生した。超低空に降下したアダムスキー型円盤の丸窓から異惑星人と思われる金髪の美少年が地球人の六歳の少女に微笑して手を振るとはロマンティシズムの極致だが、これは厳然たる事実であって、事は重大である。

この驚異的な出来事には、まず日本GAP関係者間で発生したこと、出現した円盤がアダムスキー型といわれる小型宇宙機であること、目撃者が幼女であることなどに深い意味が含まれていると思われる。

・単純な断定は避けねばならないが、推測するに、世界でも珍しいこの事件は明らかに日本GAPにたいするスペース・ピープルの積極的な援助活動の一端であるとしか考えられない。目撃者・奈生ちゃんの母親である西本有水子さんはGAP会員としては真剣な有力メンバーの一人であり、GAP活動を行うためにこの世に出てきたような人であることは、松山支部代表・伊藤達夫氏その他の支部会員の方々が充分に承知していることである。また幼い奈生ちゃんもお母さんに手を引かれて同支部の月例会によく出席していた。支部大会でも会員たちと楽しそうにはしゃいでいたのを思い出す。

なぜ母親の有水子さんが目撃者にならずに奈生ちゃんが選ばれたのか。

これはスペース・ピープル側に重大な配慮があることを示唆している。アダムスキー問題を熟知している大人の目撃体験はGAP外部から疑惑を招きやすいという点を考慮して計算しつくした結果、幼い奈生ちゃんに白羽の矢を立てたのであろう。もちろん有水子さんも誠実な立派な婦人であり、宇宙的な思想の持主である。

しかしこの場合は奈生ちゃんの過去世からのカルマと密接な関係があるようにも思われる。それは事件の際中に去り行く円盤を見つめながら、自分の過去世二代の記憶を呼び起こしたという本人の告白から判断できるのである。つまり円盤の美少年は奈生ちゃんの過去世で密接な関係にあった人の異惑星に転生した姿ではないかとも推測できるのだ。しかも奈生ちゃんが過去世の記憶を思い出しやすい特異な能力の持主であることもスペース・ピープルから見抜かれていたのかもしれない。

いったいにUFO目撃事件やコンタクト事件の主役となる人は超能力や異常な能力を持つ人が多い。これは目撃やコンタクトに際して普通人以上に敏感であることが主要な条件になるのだろう。この能力を総称すればテレパシーの一語に尽きる。だから日本GAPもテレパシックな感知力の開発を促進しているのである。最初に屋島の方向からオレンジ色の光体が飛来するのを、七人の子供たちの内で奈生ちゃんだけが気づいたという点に感知力の明確な差があるように思われる。そして過去世からのカルマという面でも他の子供たちとは異なる〝何か〟が本人にあったにちがいない。要約すればこの事件に奈生ちゃんが遭遇したのはけっして偶然ではなく、そうなるべき要素がひそんでいたと言えるのである。

次に重要なのは、飛来したUFOがアダムスキー撮影の金星のスカウト・シップ（小型宇宙機。いわゆる空飛ぶ円盤といわれるもの）に酷似していたという点である。アダムスキー撮影の金星円盤には丸窓の上部の周囲をコイル状のリングが取り巻いているが、高松円盤ではこのリングだけを除いて他はすべて同じだったという。丸窓は四個あった。アダムスキー円盤でも角度により三個しか写っていないが、実際は四個あったといわれている。したがって高松円盤はどの点から見てもアダムスキー型円盤なのである。

このアダムスキー撮影の円盤をいまだにインチキ呼ばわりする人々がいる。むかし発表された当時、電気掃除機を写したのだとか、ニワトリの卵の孵化器を撮影しただの、低次な批判の集中砲火を撮影者は浴びたが、しかしアダムスキー型円盤はその後も世界各地に出現し続けているし、日本でも広島県や北海道の高校生が撮影した。ところが「UFOの存在は信じるがアダムスキー型円盤の目撃に限ってみなデッチアゲなのだ」というわけのわからぬ説をとなえるUFO研究家が日本や外国にいる実状には、人間の感知力やカルマという問題について深く考えさせるものがある。

どうやらUFO問題の探究には地球的な学識を超えた特殊な能力を必要とするようであり、普通の知力では詮索しきれない要素が含まれているらしい。高度な知識を持つ人が必ずしもUFO問題にすんなりと入りきれるとは限らない。むしろ逆な場合が多いのである。これは地球の教育の誤りもさることながら、人間個々が持ち運んでいる宇宙的カルマの差なのかもしれない。

ともかく高松の大事件により日本GAPは重大な段階に突入した。多年の努力が報われたとも言えるだろうが、これに欣喜雀躍するばかりで進歩が停滞してはならない。むしろ我々にたいするスペース・ピープルからの激励と受けとめて、いっそうの前進を図るべきであろう。

昨夏の海外研修旅行中、スイスにおける強烈なUFO出現事件といい、その他まだ公表はされないが会員間の驚くべき目撃体験（特に静岡支部の富士山麓におけるUFO目撃事件）が増加しつつある現状をみると、いずれ日本GAPに何らかの宇宙的な大事件が発生すると予測されるのである。

これを機会に日本GAPは団結を一段と強固にし、慎重に、しかも何物をも恐れることなく、胸を張って堂々と活動を続けようと呼びかけたい。勝利は我々の手中にあると確信する。忍耐強く頑張る者のみが目標に到達するのである。これには信念が中心をなすけれども、テレパシックな感知力や予知力の開発も重要なので、この面でも研鑽を積まれたい。その意味でアダムスキーの三大哲学書は我々の最高のガイドであり宝物である。

驚異の高松市円盤降下事件！

●丸窓の少年は微笑んで手を振った――

伊藤達夫

香川県高松市の田園地帯に突如アダムスキー型円盤が屋島方面から飛来し、田んぼの稲穂が揺れるほど超低空に降下、停止し、しかも円盤の丸窓から金髪の美少年が微笑して手を振るという世界でも珍しい驚異的大事件が発生した！

目撃者は、日本ＧＡＰの熱心な会員・西本有水子さん（三十四歳）の長女・奈生ちゃん（小一、六歳）で、オーラの見える特異な能力の持主で純真な少女。お母さんにつれられて日本ＧＡＰ松山支部大会や松山支部月例会などによく出席していた。コンタクティーとして幼い奈生ちゃんが選ばれたことにこの事件の重大な意義があるようだ。以下は日本ＧＡＰ松山支部代表・伊藤達夫氏の詳細な現地取材報告である。

▲西本奈生ちゃん

一九八四年（昭和五十九年）九月一日。宇高連絡船航路の四国側発着地で港町の高松市はまだきびしい残暑に見舞われていたが、澄みきった青空は秋の訪れを告げていた。

市の東方には昔の源平の合戦で名高い屋島の台地が独特な山容を見せている。事件現場は市の一角木太町六区で、ここは屋島を間近に仰ぐ風光明媚の地に開けた新興住宅街である。まだいたる所に緑豊かな田園が残り、その中にマンションや住宅が点在している。どこの町の郊外にも見受けられる平凡な風景だ。

だがここで夕刻六時頃、想像もつかない驚異的大事件が発生しようとは、だれも夢想もしなかった。

この時刻に自分の住居のあるマンションの広場で自転車に乗って遊んでいた西本奈生ちゃんが、屋島の方角からジグザグ運動をしながら接近してくるアダムスキー型円盤を目撃したのである！

円盤は奈生ちゃんから約二十五メートルという至近距離まで近づいたが、そのとき円盤の丸窓の所に金髪を両肩まで垂らした童顔の美しい〝人間〟が姿を現して、彼女にむかってニッコリと微笑した。口元から白い歯がこぼれる。

驚いて見つめる奈生ちゃんの眼前で、やがて円盤はゆっくりと飛び去ったけれども、その前に丸窓の美少年はふたたび微笑を浮かべて、別れのしるしか左手を軽く上げた。そして屋島の方向へ飛んで行ったのである。

以下の対談は十月二十五日に高松市の西本家を訪れた筆者が、母親の有水子さん同席のもとに目撃者とインタビューを行った際の記録である。奈生ちゃんは事件当時のことを鮮明に記憶しており、筆者の多くの質問にたいしてこころよく答えてくれた。実際はお父さん（西本憲生氏・三十七歳・会社員）の前任地であった今治の方言で話しているけれども、読者の便宜を考慮して標準語に直してある。

広場の端で光体を見る

――奈生ちゃん、こんにちは。

「こんにちは」

――今日は奈生ちゃんがこのあいだ見たＵＦＯについて、いろいろ話してもらいたいと思ってやって来たの。気楽に話して下さいね。思い出すままでいいからね。

「うん、いいよ」

彼女は人見知りをしない、素直ないい娘だ。

――ＵＦＯを見たのはいつだった？

「あのね、九月の一日だった」

――時間はいつ頃だったか覚えているかい？

「うん、覚えているよ。夕方の六時頃だったと思う」

——時間がどうしてそんなに正しくわかるの？

「あのね、家の前の広場に停めてあった自動車の中を見たら、時計がちょうど六時だったから」

——そのとき奈生ちゃんは何をしていたの？

「家の前の広場で友達といっしょに自転車に乗って遊んでいたの」

——お友達は何人いたの？

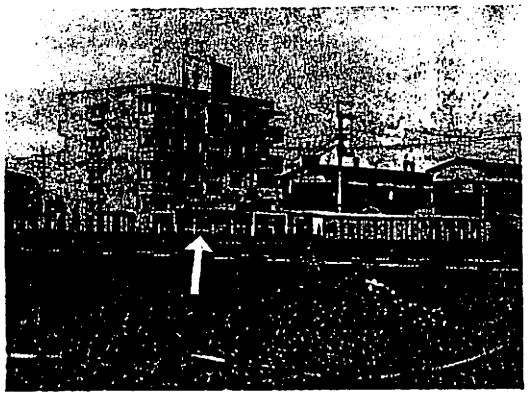
「六人ぐらい」

——そのときにUFOを見たわけね。

「うん、そう」

お母さんが熱心なGAP会員でUFO問題にくわしいから、事件以来奈生ちゃんもお母さんから話を聞いて、UFOという言葉の意味は大体に知っているようだ。

——そのときの様子をもう少しくわしく話してくれないかなあ。



▲奈生ちゃんの住むマンション。矢印の所が第1目撃地点。

「あのね、自転車に乗ってみんなと広場で遊んでいたらね、田んぼが見える広場の端の方へ走っていたら、むこうに丸くて大きな光ったものが見えたの」

——いっしょにいたほかの友達も、その光るものに気がついていたの？

「いや、気がつかなかったみたい」

——そのとき奈生ちゃんは友達にそのことを話したの？

「いや、だれにも話さなかった」

——そのあと、どうしたの？

「広場の端にある柵の所まで来て、じっとその大きな光るものを見ていた」

一瞬奈生ちゃんはほかの友達に話したくないという衝動にかられたのだろうか。

光の輪とオレンジ色の物体

——もう少しくわしく話してくれる？ 柵の所から見た物体はどんな形をしていたんだろうね？

「そこに立って屋島の方を見たら、光の輪のようなものと、その横に大きなオレンジ色をした光るものが見えた」

——じゃ、それらの光るものは屋島の上にいたんだね。

「いや、ちがう。屋島の山のまん中に大きく見えたよ」

——えっ、山のまん中に見えたんだって？ だって、ここから見える屋島はすごく近くに大きくそびえているんだよ。こんなに間近に見える山のまん中に見えたなんて、どういう意味なのかなあ。

「でも、たしかに山のまん中にはっきり二つの光が見えたんだもの」

その意味を理解しかねていると、横から母親の有水子さんが助け舟を出した。

「私もね、ふつうUFOといえば山のずっと上のあたりに小さくポツンと見えるものなんだという先入観があったんです。まさか家のすぐ近くにそんな大きな物体が来るなんて夢にも思っていないですよ。

ですから『奈生が最初に見たときの絵を描いてごらん』と言って描かしますと、『見たとおりに描くのよ』と何度言っても、屋島の山のまん中にデーンと大きくて丸い物を描くんです。初めは何のことか意味をはかりかねていたんです。

でもよくよく聞いてみますと、その物体は屋島よりもずっとこちらに近づいて浮かんでいたんだということがわかったんです。それで、なるほど、そんなに近くに浮かんでいたのなら、ここから肉眼で見たら山の中に大きく重なって見えたのも無理はないと納得したわけです」

——なるほど、それでよくわかりました。ここから見る屋島はかなり大きく見えますが、その物体はそうするとかなり手前にいたことになりますね。

空中の美しい〝ネックレス〟

——それでは奈生ちゃん、まず光の輪のようなものから話をしようね。それはどんな形をしていたの？

「あのね、小さな石をたくさんつなぎ合わせたように見えた」

——じゃあ、小さい石のようなものをつないで作った首飾りがあるでしょう。あんな感じの輪だったの？

「うん、あれによく似ていた。その輪がいろんな形に変わりながらクルクルと回っているみたいだった」

——どんな形に変わっていったか覚えているかい？

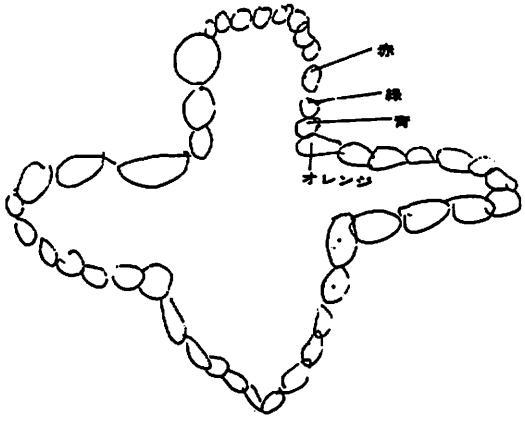
「うん、覚えているよ。最初はね、ヒコーキのような形でね。次にお札か財布のように横に長い角ばった形になった。そのあと、こんどはおまんじゅうのように丸い形に変わっていった」

——すまないけど光の輪の絵を奈生ちゃんが見たように描いてみてくれない？

「うん、いいよ」と言って彼女はザラ紙の上にさらさらと描き始めた。さざれ石がつながったネックレスのような輪が出来上がってゆく。全体にずんぐりした十字形が現れる。これを「飛行機みたい」と表現したのかもしれない（図1）。

——どうもありがとう。きれいに描けたねえ。それでね、この輪はどんな色をし

図1



▲接近するオレンジ色の光体と光の輪。図はお母さんが描き込んだもの。左端の人物は現場で前方を見る奈生ちゃん。向こうの山は屋島。

ていたか覚えている？

「あのね、この石ころのように見える一つ一つが赤や青や黄やオレンジや緑に光っていたみたい」

——いろいろな光の玉がキラキラと輝いていたんだねえ。とても美しかったんだねえ。

「うん、すごくきれいだった。夜のネオンみたいだった」

——光の輪はそこにいて動かなかった？

「クルクル回りながら、少し右や左や上や下にゆっくり動いていたみたい。そのときにね、横にいたオレンジ色のものもやっぱり右や左や上や下に少しだけどゆっくり動いていたみたいだった」

——そのいろんな光の出る輪はそのあとどうなった？

「すぐ横にいたオレンジ色の大きなもの（円盤）がこっちに近づいて来ると、その輪はどこかへ消えてしまったように見えなくなっていた」

目撃者が幼女だというので、まず空中に美しい〝装飾品〟を見せて安心させたのだろうか。

物体の頂上に金色の球が……

——そう、それでは話を光の輪からオレンジ色の物体（円盤）へ移そうね。その物体はどんな形をしていたの？

「初めはね、こんなにまあるく見えたの」と言って紙にその図を描く。おダンゴのような楕円型になる。

——この物体の大きさは最初どのくらいに見えたのかなあ。奈生ちゃんの目で見てどのくらいに見えた？

「一階建ての家を近くに見たくらいの大きさだった。」

部屋の窓から外を見ると、田んぼの中の五十メートルほど先に平屋建ての家が見える。それを指さして彼女は「あれよりもう少し大きめに見えた」と話す。それでも相当な大きさである。どうも初めから想像以上に間近に来ていたらしい。

——さっきはその物体の形を描いてもらったけど、今度は目で見た大きさを描いてくれる？

「いいよ」と言って紙に大きく描く。とてつもなく大きい。

「ああ、それとね、さっきの光の輪の端と、オレンジ色の物体の端が少し重なり合っているみたいだったよ」とつけ加える。

——オレンジ色といってもいろいろあるんだよ。明るいとか暗いとか。どうだった？

「みかんのように明るい色をしていた」

——そう、みかんのように明い色なのね。それで物体はオレンジ色だけだった？

「あのね、オレンジ色のてっぺんの所に金色に光るまばゆいものが見えた」

——それはどんな形をしていた？

「まん丸い形をしていた」と言って自分の頭に手をやって丸い形をつくりながら、「こんな丸いものがてっぺんに乗っかってキラキラと金色に光るので、目がとてもまばゆかった」と言う。

どうやらアダムスキー撮影の円盤の頂上部に見られる丸い球と同じものらしい。

ジグザグ運動で接近

——そのとき奈生ちゃんはどんな気持がしたの？

「ただ、何だろうなあと思っただけ」

——その地点にUFOはどのくらいの時間いたか覚えている？

「よく覚えていないけど、わりとゆっくりそこにいたみたいだった」

——そのあと物体はどうなった？

「それからだんだんこっちへ近づいて来たの」

——どんなふうに動いたの？

「初めはちょっと上の方にむかってググーッと上がって、それから左へ動いて、またそれから右の方へ動いていた。それからまた左へ動いて、また右へ動いた。それからこっちへ近づいて来た」

どうもジグザグに左右へ移動しながら近づいて来たらしい。六歳の少女にしては相当な記憶力である。

——そのときの動いた様子を描いてみてくれる？

「うん」

物体が左に右にまた左へとジグザグ運動をしながら下降する状況が描かれてゆく。

——降りてくるのは早かったの？

「左とか右とかへ動くたびに、なんかガタン、ガタンと動いたような感じだった」

▼ジグザグ運動で近づく円盤と光の輪。まだ明瞭な円盤の形をなしていない。

——音がしたの？

「音は全然しなかった」

——この絵で見ると一番下までジグザグで降りてきたのは右側へ寄ったときだねえ。

「うん、そうみたい」

稲穂が揺れる

——そのときこの物体は田んぼのすぐ上まで来たんじゃないの？

「うん、田んぼのすぐ上まで降りて来た」

——そのとき田んぼの稲穂は動かなかったかね？　どうだった？

「あのね、それがね、田の上に降りて来たとき、まわりの稲がザワザワと揺れたのが見えた」

——どのくらい揺れたの？　その範囲は？

「倒れるほどは揺れなかったみたい。ザワザワするぐらい。わりと広く揺れた」

——そのあいだずっと柵の所から自転車に乗ってながめていたのね。

「うん」

——田んぼの上まで来たUFOは、そのあとどうなったの？

「あのね、田んぼの横の幼稚園の上あたりにフワフワと飛んで来た」

幼稚園というのは高松市立木太北部幼稚園のことで、田んぼの中にあり、稲穂が揺れた場所からわずか五十メートルぐらいの所に位置する。

——そのUFOがいちばん奈生ちゃんに近づいたのはどのあたりなの？

「幼稚園の上に来たとき」

その距離は奈生ちゃんがいた柵の所からわずか二十五メートルぐらいしかない。ここでお母さんがつけ加える。

「幼稚園の右側に田んぼが見えるでしょう。UFOは田んぼと幼稚園とのあいだをジグザグに動いたらしいんです。四回動いたあと、最後に幼稚園の真上に来たらしいんです。ですから奈生が首を左右にかなり大きく動かしたといいますから、UFOも左右に移動したことがうかがわれます」

至近距離に大接近した！

——奈生ちゃんね、UFOがね、幼稚園のすぐ上に来たときは建物のすぐ上だったの？　それとも少し手前だった？

「上は上だけど、少し建物より手前だったような気がする」

ちなみに幼稚園の建物は地上約七メートルの高さがある。

——最初に見てから幼稚園の上に来るまでのあいだに、UFOはずっとオレンジ色をしていたの？

「いいや、最初はオレンジだったの。それがね、ジグザグで降りて来る途中で、だんだんUFOらしい形に見えてきた」

——どのあたりからUFOの形にはっきり見えだしたの？

「降りて来るときに、左へ行って次に右へ行ったときから形がはっきり見えてきたみたい」

——UFOの窓はどのあたりから見え始めたの？

「窓はUFOの形がはっきりし始めた頃から見え始めていたよ」

——てっぺんの金色に輝く球はどうなの？

「金色の球は最初から最後までずっと見えていたし光っていた」

——UFOの色はどんなふうに変わったの？

「色はね、オレンジからだんだん銀色に変わってね。たんぼの上に来たときは、オレンジ色と銀色がまざったような色をしていた。幼稚園のすぐ上に来たときは全体が銀色に輝いていた」

——そのときUFOはじっとしていたの？

「うん、ちょっとのあいだじっと止まったみたいだった」

——大きさはどのくらい？

「これくらい」と両手をいっぱい広げて丸い輪をつくろうとするのだが、それでも充分な大きさではないらしい。

——何かくらべてみる物はないの？

「あのね、六畳か八畳の部屋に立ったときの部屋の大きさに見えたよ」

——えーっ、そんなにでっかく見えたの？　とてつもなく大きいのね！

どうやら円盤は目撃者のすぐ眼前へ大接近したらしい。

「うん、とっても大きく見えたから」

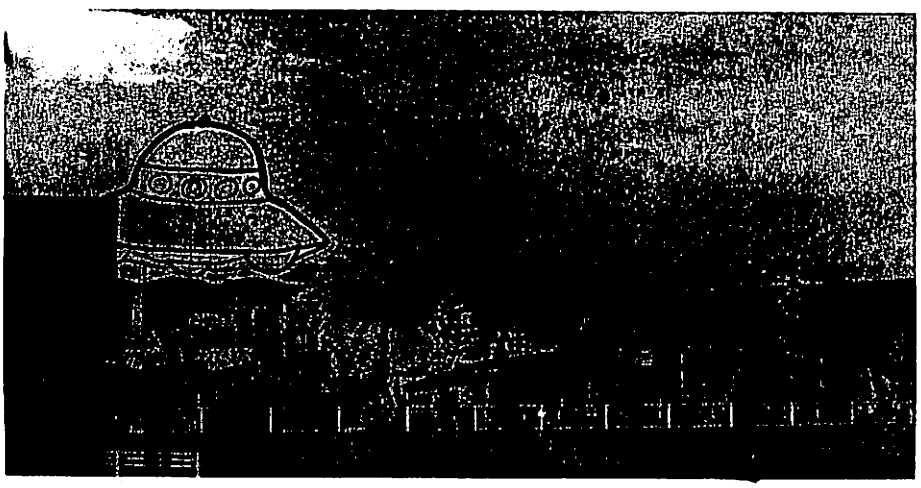
信じられないほどの大きさに見えたということは、円盤自体の直径が数十メートルもあるという意味ではなく、手の届くほどの距離にまで近づいたということである。

典型的なアダムスキー型円盤

——UFOの形をもう少しくわしく描いてくれたらありがたいんだけどなあ。

「うん、描くよ」と言ってさらさらと描き始める。頂上部の丸い球、それをのせている半円型のドーム、四つ並んだ丸窓

▼幼稚園の建物の付近に来た円盤。実際は建物よりも手前に来ている。



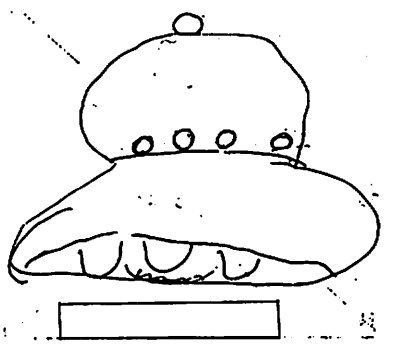


図2　奈生ちゃんが描いた円盤。

を描き、底部には丸い球を三つつけ加える。全体的に典型的なアダムスキー型円盤の外形が浮かび上がってくる（図2）。

「はい、できました」

——どうもありがとう。これでよくわかるようになったよ。下の所に丸い球が見えたんだね。

「うん、球があった」

——いくつあった？

「三つあった。その球はね、UFOが田んぼの上にいる頃から見えていた」

——窓はいくつあったの？　形はどうだった？

「窓は四つでね、丸い形だった。それと下にある球は少し金色がかって輝いていたよ」

——球が金色に光っていたの？

「うん、そう」

——さっき大きさが六畳か八畳の部屋の広さぐらいだと奈生ちゃん言ってたでしょう。あれはUFO全体の大きさなの？

「いいや違う。窓の所の大きさがそれくらいの大きさに見えたの」

——それじゃ窓の下の部分はもっと大きかったの？

「うん、もっと大きかった」

これでこのUFOがきわめて至近距離に来たことが推測できる。彼女が六～八畳の大きさだと言ったのはUFO全体ではなく、キャビンの部分を指していることが判明した。

丸窓から金髪の美少年が！

——へー、すごく大きく見えたんだね。驚いてしまったねえ。そんなに近づいて来たのなら、ほかに気のついたことはなかったの？

「あのね、窓の中にね、人がいてね、こっちを見ていたの」

——なんだって!?　人がいたんだって！本当に？　どんな人がいたの？　どこに？

「あのね、窓が四つあってね、左から二つ目の窓の中に人が立っていた」

——その人は奈生ちゃんの方を見ていたの？

「そう、それでね、その人と奈生ちゃんが目と目が合ったら、その人がニコッと笑ったの。そうしたらね、その人の口が開いて白い歯が見えたよ」

驚くべき出来事をあどけない少女は楽しそうに淡々と語る。

——じゃあ、白い歯が見えるくらいだから、すごく近かったんだねえ。

「うん」

私は息をつぐ間もなく急いで尋ねた。

——どんな人だったのか、もう少しくわしく話してよ。髪はどんな形をしていたの？

「髪はね、額からうしろへなでつけていたみたい」

オールバックのことを意味するらしい。

——長かった？

「うん、耳の横から長い髪がね、肩の所まで垂れ下がっていた」

——髪は編んでいなかった？

「ふつうのままの型だった」

——髪はどんな色をしていた？

「金色だった」

——顔の形は？

「丸顔をしていた」

——皮膚の色は？

「奈生ちゃんの顔の色と同じくらい」

——目はどんな感じだった？

「目はね、丸くて大きかった」

——鼻はあったの？

「あったよ。ちょっと小さい感じ」

——口は？

「口も小さくて可愛い」

——耳は？

「耳はわりと小さかった」

なんということだ！　この幼い少女の口をついて出る言葉は、地球以外の惑星から来た美しい〝人間〟の姿を克明に描写しているのだ！　早まる動悸を静めきれずに矢つぎばやに質問をくり出す。

——服装はどうだったの？

「服はね、ズボンまでは見えなかったけど、ここから上が見えた」と言って自分のお腹から上を示す。

——色は？

「灰色みたいだった。少し光っていた」

——一色だったの？　何か模様などは見えなかったの？

「灰色だけだった。模様は見えなかった」

——首の所はどんな格好をしていたの？

「首のところはね、丸くなくてとんがっていた」

これはV字型という意味である。ここで『宇宙からの訪問者』（アダムスキー全集第1巻）に出てくる金星人オーソンの肖像写真を出して彼女に見せる。

——奈生ちゃん、この人に似ているかね？

「いや、似ていない。もっと子供っぽい感じがした」

——背は高かった？

「背は低かったみたい」

——男の人？　それとも女の人？

「目の感じで男の人だと思う」

——それじゃあね、この紙にその円盤に乗っていた人の顔かたちを描いてみてくれる？

「うん」と答えて、奈生ちゃんはまず丸い窓を描き、その中に人の顔を描いてゆく。全体にとても若々しい少年のような雰囲気だ。小さい耳の両脇から肩にかけてオールバックの長い髪が垂れ下がっており、可愛い口元から歯がこぼれている。目はパッチリとして大きい（図3）。

小学校一年生とは思えぬほどしっかりしている奈生ちゃんも、さすがにまだ子供だ。ここでお母さんにおやつを要求したので休憩する。お母さんの有水子さんがお茶とお菓子を出して下さった。開放した窓から田園の新鮮な空気が流れ込ん

でくる。

円盤の美少年、手を振る

——UFOの話にもどるんだけど、そのあとUFOはどうなったのかしらね？

「幼稚園のむこうにかくれてね、ピカッピカッと光った。そのあとどこかへ行って見えなくなってしまった」

——奈生ちゃんはそれからどうしたの？

「UFOが見えなくなったから、柵の所から離れてね、自転車で田んぼの中の幼稚園の所まで行ってみたの」

——幼稚園の前まで行ってみたらUFOは見えたの？

「いいや、UFOは見えなかった」

——それでどうしたの？

「それでね、幼稚園の前のあぜ道を通ってね、右はしの田んぼの所まで行ってみたらね、屋島が見える田んぼの上にさっきのUFOがいた」

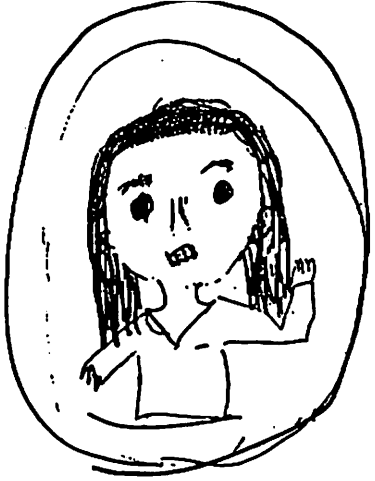


図3　奈生ちゃんが描いた円盤の少年。

——そのときの大きさはどのくらい？

「これよりもっと大きかった」と、目の前にある台つきの大型テレビを指さす。

「このテレビを台ごと含めたよりもまだ大きかったの？」

「そう」

——色や形も同じだった？

「うん、同じ形をしていた」

——UFOの中にいた人はやっぱり丸窓の中にいたの？

「うん、いたよ。UFOはちょっとのあいだ、じっと止まっていた。その人は中からじっとこっちを見ていた。そしてね、奈生ちゃんとその人は、このときも目と目が合ってね、また白い歯を見せてニコッと笑ってくれた。そのときにね、その人が手を上げて、こたえてくれたよ」

——えっ、手を振ってくれたの？

「いや、手をこう上げてね、てのひらをこちらに向けた。そのてのひらを下にゆっくり向けて、にぎるようにして、それからまたてのひらをこっちに向けた」

——その様子を手でやってみて？

「うん」と気軽に答えた奈生ちゃんは、椅子に座ったまま片手を上げて動作を示す。オイデオイデをするようなゆっくりした素振りは、どことなく「未知との遭遇」の異星人の手ぶりに似ている感じだ。円盤の美少年は左手を動かしたというが、このとき奈生ちゃんは右手を用いた。この動作を連続四枚撮影する（表紙写真）。

——その人はゆっくり動かしたんだね？

「うん、ゆっくりと動かした」

このあと奈生ちゃんと二人で現場検証に出かけた。家の前の広場の柵を出発点に、あぜ道を通って幼稚園の前まで行く。彼女は自転車のペダルをこいで案内してくれる。

幼稚園の右端まで来ると自転車を止めて、「ここからUFOを見たの」と言う。この地点で、円盤の内部から人が手を上げて微笑するのを目撃したと話す。田んぼのむこうに赤い屋根の平屋建ての家があり、その家をバックにした低空にUFOが浮かんでいたという。現場をカメラに収めてから二人は自宅へもどった。

円盤は回転した

質問を再開する。

——手を上げたとき、手首まで袖があったの？

「うん、手首まで袖があった」

——先の所はしぼってあったの？

「いや、少しだぶだぶだった」

——手を振っている人の姿を描いてみてよ。これが最後の絵だから我慢して描いてね。

「うん、いいよ」

あくまでも奈生ちゃんは素直である。取材にたいしてたいへん協力的なので、胸がジーンと熱くなってくる。

——その人が手を振ってからUFOはどうしたの？

「クルクルと田んぼの上をまあるく回り始めてね、そしてね、UFOもグルグル自分で回っていた」

お母さんがつけ加える。

「UFO自体もグルグル自転しながら同時に丸い軌道を描いて、屋島の上空へ上がって行ったそうです」

——それからは？

「あのね、屋島の頂上のあたりでね、ピカーッピカーッと二回光ったあとで、パッと消えた」と奈生ちゃんが答える。

——最初にマンションの前でUFOを見てからパッと消えるまでの時間はどれぐらいだったか覚えている？

「よくはわからないけどね、大体十五分ぐらいだった」

——へーっ、ずいぶん長いあいだ見ていたんだね！

「あのね、UFOが幼稚園の上に来るまでのあいだに、山の所や田んぼの上にいる時間が長かったから」

◀あぜ道を通って、二度目にUFOが見えた場所に立つ奈生ちゃん。

自分の過去世を思い出す

——UFOが消えたとき奈生ちゃんはどんな気持だった？

「あのね、UFOが消えたときに何かを思い出したの」

——何を思い出した？

「女の人の顔を思い出した」

口の中におせんべいがまだ残っているせいか、口をもぐもぐさせるので聞きとりにくい。「ここは大切なところなんだから、まじめにやりなさい」とお母さんが注意する。

「今から三回前の生まれ変わりのことを思い出した。世界中をまわって歩いたときのことみたい」

——なんだって？　UFOが去って行くときに昔のことを思い出したの？　すごいね！　その〝世界〟というのは地球のこと？

「うん、そう。いろんな国をまわった。仕事のことでね」

それまでの子供っぽい表情が消えて、人が変わったような確信に満ちた言葉づかいになってくる。

——世界中をどういう目的でまわったのだろうね。わかる？

「それはわからない」

——その女の人は背は高いの？

「うん、背の高い人だった」

——それはだいぶ昔のことかなあ？

「そう、昔、だいぶ」

——だいぶといってもいろいろあるよ。二百年前とか、それ以上とか。

「今からね、二つ前の時代みたい」

——前世のそのまた前の時代という意味なの？

「うん」

——すぐ前の時代はどこにいたか覚えているかい？

「うん、覚えている。アメリカだった」

——三代前の女の人はどこの人？

「やっぱりアメリカ人みたいだった」

前生では平和運動家だった？

ここでお母さんがつけ加える。

「前生で死ぬるときに五人の孫がいましてね。すぐ近所に自分の娘が住んでいたんだそうです。その娘さんの子供をすごく可愛がっていたんだそうです。二人は女の子で三人は男の子だったらしいんですが、これがどうも孫らしいんです。一番下の孫がエミリーという名でね。そのエミリーともう一人の女の子の二人が、奈生ちゃんが死ぬるときにきれいな花輪を作ってくれて、首にかけてくれたそうなんです。そのことを今でもすごくよく覚えているようです。

奈生はその当時は男性でしたが、奥さんの名前になにか〝エ〟という字が頭につくんだそうです。エンディーか、あるいはそれに近い名前だったらしいんです。その奥さんは髪が長かったそうです」

ここでふたたび奈生ちゃんが口をはさむ。

「ママ、その奥さんの名はね、ウェンディーというのよ」

「この奥さんというのが、奈生が大学時

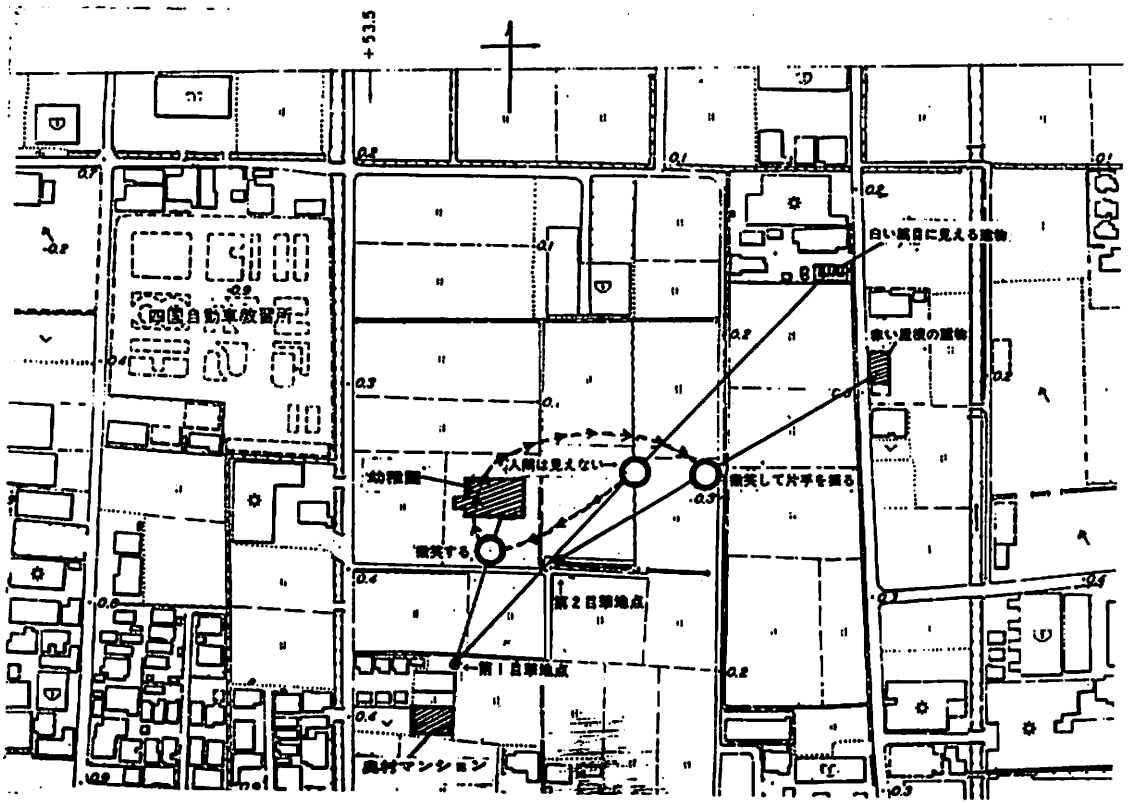


図4　円盤飛来現場の地図と航跡。

代に野球をしていたときに、観戦に来ていたのがきっかけで知り合ったのだそうです。

奈生が住んでいた家はすごく広くて大きな美しい家だったようです。そして犬とか猫とかたくさんの動物を飼って可愛がっています。家の様子はすごくよく覚えていますね」

――奈生ちゃん、その家はどんな場所にあったの？

「大きな木がたくさんある森の中にあったみたいよ。白い家でね」

お母さんがつけ加える。

「それとね、本人は前生で〝戦争反対〟という運動をしていたというんです」

――平和運動みたいな？

「ええ、そういう感じの運動をしていたみたいです。でね、その運動には反対する人もいたけれど、応援してくれる人が多かったそうです。すごく立派な服装をして、何かの仕事に選出されたと言っていました」

約六年前にアメリカで死んだ平和運動家というのは、だれのことだろう？

――何に選ばれたのですか？

「さあ、よくはわからないですけど、白いタスキのようなものを肩から斜めにかけていたそうです。それで、自分はアメリカ以外の場所に生まれ変わりたいと思ったことがあるそうなんです。それとすごく面白いのは、奈生が言うには、自分の前生で男であったとき、頭のてっぺんがツルツルにはげていたそうです」

――奈生ちゃん、それ本当？　頭がはげていたんだって？

「うん、そう、ウフフフ」と奈生ちゃんが笑う。「頭がはげていた記憶がある」

オーラも見えるようになった

ここで話題を変えた。奈生ちゃんは今年の夏頃からオーラが見えるようになったとお母さんから聞いていたのである。

――奈生ちゃん、オーラが見えるんだって？

「うん、見えるよ」

――じゃあ、おじさんのオーラの色を見てくれる？　どんな色に見えるの？

「〇〇〇色に見える」

その色は私のオーラの色とぴったり一致していた。

――よく当たったね、すごいね！　ではお母さんの色は何色かな？

「×××色に見える。おじさんとママの色はよく似ているよ。とても明るい色をしている」

――奈生ちゃんのお父さんの色はわかるの？

「うん、パパの色は△△△色に見える」

お母さんがつけ足した。

「主人が最近、病気で入院していたんですが、体の悪い部分を奈生が見ると赤っぽく見えたそうです。

久保田先生が講演しておられる写真を二枚見せてみたんです。一枚はずっと以前に静岡支部大会で写したときのものですが、これは金色に見えたそうです。あとの一枚はどこの大会だったか覚えていませんが、紫と銀が入りまじったように見えたと言っていました」

ここでアダムスキーのオーラの色が知りたくなって、『生命の科学』（アダムスキー全集第6巻）に掲載されているアダムスキーの写真を見せた。

――奈生ちゃん、この人は何色に見えるの？

「金色に見える」

――やっぱりね、すごく正確だね。

「奈生は、アダムスキー氏のオーラは金色に見えると言っています。それと、私などがときどきものすごく宇宙的に高揚した気分になることがあるのですが、そういうときに奈生がそばで見ていて、『あれ、ママ、いま金色になったよ』なんて言ってくれます」と有水子さんが語る。奈生ちゃんはかなりのオーラ透視能力者であるらしい。

アダムスキー撮影の円盤とほぼ同じ型

ここで話題をまたUFO問題にもどす。『宇宙からの訪問者』に収録されている。アダムスキー撮影の金星の円盤写真類を見せながら尋ねてみた。

――ここのUFOの写真の中で奈生ちゃんが見たUFOといちばんよく似ているのはどれだろうね？

「これがいちばんよく似ているみたい」と言って彼女は『宇宙からの訪問者』の冒頭に折り込みで掲げてある名高い円盤写真を指さした（**右下の写真**）。

――これに似ているんだね。どこか違っているところはないかね？

「これがなかったみたい」と、頂上の球の下にある受け皿のような部分を指さす。

――ドームは同じだった？

「同じだった。けどね、丸窓の上の所にある輪のようなものがなかった」

写真の丸窓の上部の機体からはみ出たコイル状のリングはなかったらしい。

今度は金星の円盤を斜め下から写した球型着陸装置の見える写真を見せた。

――底の所はこの写真と同じだった？

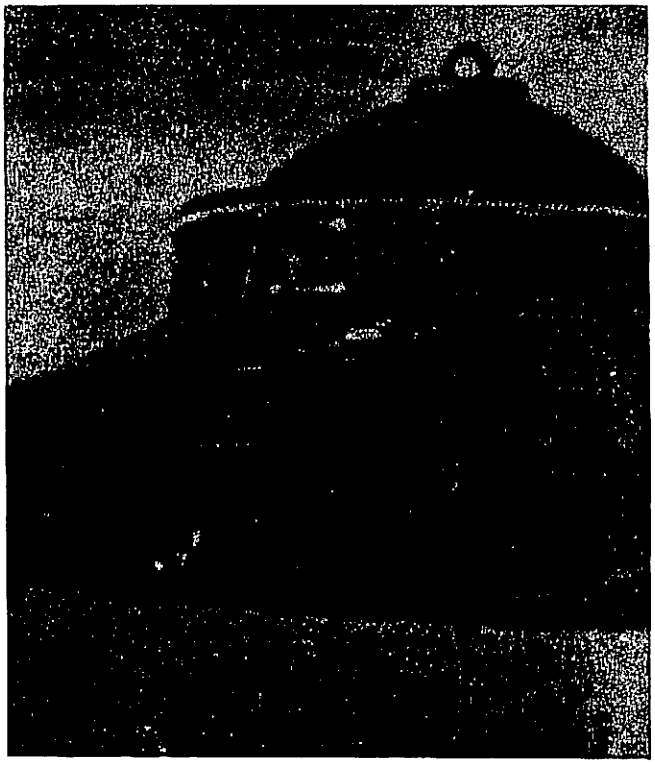
「ほとんどこの写真と同じ」

――そうすると、こまかい部分は多少違っているけれど、全体としてはアダムスキーが写した円盤とほとんど同じだね？

再度写真を見て奈生ちゃんは、

「ほとんどこの写真と同じ型をしていた」と確証する。

▼ジョージ・アダムスキーが1952年12月13日に米カリフォルニア州で撮影した金星の円盤。



――やっぱりアダムスキー型とほとんど同じ物体だということだね。

これで長いインタビューはやっと終わって、奈生ちゃんは外へ遊びに出た。

すぐには打ち明けなかった

続いて母親の有水子さんとの対談に移る。

――奈生ちゃんの目撃事件をあなたが知ったのは、どんないきさつだったのですか。

「九月三日頃だったと思うんです（事件の発生は九月一日）。たぶん夕方の六時五十分頃、車で買いものをして帰ってきたときに、ふと屋島の方向を見ると、右の方に赤く点滅する光体がコロコロと転がるように動くのが見えたんです。最初は飛行機の点滅灯じゃないかと思ったんです。

以前に今治に住んでいた頃、家のすぐそばで、信号機の少し向こう側の上空を赤いピカピカと光る丸い赤色の物体がビューッと飛んで行ったことがありました。そういう経験があったので、あれと同じような物体が飛んでいるのかなあと思って見ていたんです。

それで奈生に『ああ、奈生ちゃん、あそこに変なものが飛んでる飛んでる！』と叫びかけたんですね。そうしたら奈生がうしろで見ていて、『ああ、ほんとだ』となにげなく言っておいて、そのあとで、『そう言えば、ママ、何か変なものが飛んでいたのを見たよ』と言うんです。それで『えーっ？』という話になったんです。それからいろいろとくわしく聞いてみると、このようなものすごい事件が発生していることがわかったんです。

だけど、まさかそんな至近距離で目撃したなんて思いもよらないことでしたから、私もおそらく遠いところを飛んでいる赤い光体ぐらいを目撃したのだろうと勝手にきめ込んでいました。そういう先入観があったものですから、奈生に目撃した物体の絵を描かせても、最初はその意味が何であるのか理解できませんでした。丸い大きなおダンゴのような物体を描くので、意味が通じなかったんです。UFOは遠方に見えるもんだという先入観にとらわれていましたから――。

奈生が、変なものを見たよと話してく

れた翌日、それは九月四日のことですが、もう少しくわしく話してよと頼みますと、家の外で自転車に乗っていたときにどうのこうのと話し始めたんです。『どのくらいの大きさだったの?』と聞くと、家の前のガレージの横に物置があるんですが、その物置を紙に描いて、そのまわりをさらに円で囲んで、『このくらいだった』と言うんです。あまりに大きく描くので驚いてしまいました。

『じゃ、その物体の絵をくわしく描いてみてよ』と言って描かせたんです。そうしたらまさにアダムスキー型円盤そのものの姿が浮かび上がってきたんです。それればかりでなく、ものすごい内容がわかってきたというわけです」

――それを耳にしたときの母親としてのお気持はいかがでしたか。

「えーっ、ウソォ!?という信じられないような気持でした」

ウソをつかない性格の奈生ちゃん

――全く信じられなかったんですね。

「ええ、最初は全然信じなかったんです。子供のことだから小さな出来事をことさら大げさに感じて、オーバーに表現していると思っていました。

でもともとわざとウソをついて話をするような子でないことは母親としてわかっていました。けっしてウソをつくような子ではないんです。でも三週間のあいだはさすがに信じられませんでした」

――まさかこの家のすぐ近くでキャビンの大きさだけで六畳の部屋ほどもある物体が出現するとは思いませんからね。円盤の大きさは具体的にはどのくらいですか。

「幼稚園の建物は右端からまん中の時計まで約七メートルあります。UFOが建物のすぐ真上に来たとき、人が乗っている部分の大きさがほぼ直径七メートルぐらいだったそうですから、全体ではおそらく十メートル以上あったのではないでしょうか」

総会の案内状が届いた日に事件が発生

――目撃した人は奈生ちゃん以外にいないのでしょうか? 近所の人とか――。

「近所でどなたか目撃しているかもしれませんが、あいにく私たちは今治から一カ月前に引越して来たばかりで、ほとんど近所の人とはなじみがないんです。もっと親しくなっていれば、何か見ませんでしたかと気楽にお尋ねできるのですが」

――九月一日といえば八月一日に引越されたのですから、ちょうど一カ月目にあたっていたわけですね。

「そうです。あの日は朝から学校の始業式などでバタバタしていました。午後は市内に所用があって出かけて、帰ってから少し疲れが出たので、自宅で横になってウトウトしていました。

奈生も始業式で少し緊張したらしいので、眠らせたほうがよいと思って、一緒に横に寝させようとしたんですが、子供は元気ですからすぐに起きて外へ出て行こうとするんです。三時から三時四十分頃までは奈生も家にいたんですが、そのうちに私がウトウトしかけた頃、ママ、外へ遊びに行ってくるよと言って飛び出ました。

その後、夕方五時頃になって奈生が、「ママ、郵便が来ているよ」と言って持ってきてくれたのが九月二十三日に東京で行われる日本GAP総会の案内状だったんです。

ああ、ついに来たと思って読みながら、行きたいなあ!と強烈に思いました」

――今度の総会は画期的な内容でしたからね。西本さんも行きたかったでしょう。

「そうなんです。どうしても行きたいと思いました。でもいろいろと家庭の事情や取り込みなどがありまして、結局行けそうもないんです。ただなにか半分は自分がすでに総会に行って久保田先生のお話を聴いているようなフィーリングを強烈に起こしたのは事実です」

――GAPの今年度総会の案内状があなたの手元に届いたその日に、娘さんの奈生ちゃんがあのような大事件に遭遇したのは、なにか意味深長なものを感じますね。

「そうですね、そういえば不思議な気がしますね」

テレパシー能力を持つ

――ところで奈生ちゃんは以前にUFOの目撃体験があるのですか?

「いいえ、奈生はこれが初めての体験だと思います。事件以前はUFOについては全く話しませんでしたから」

――すると今回の事件は奈生ちゃんにとっては突発的な出来事だったわけですね。

「そうです。最近になって本人がオーラが見えると言いだしたので、『え!?』という気になりまして、どうして急に見え始めたんだろうとけげんな気持になっていた矢先だったんです」

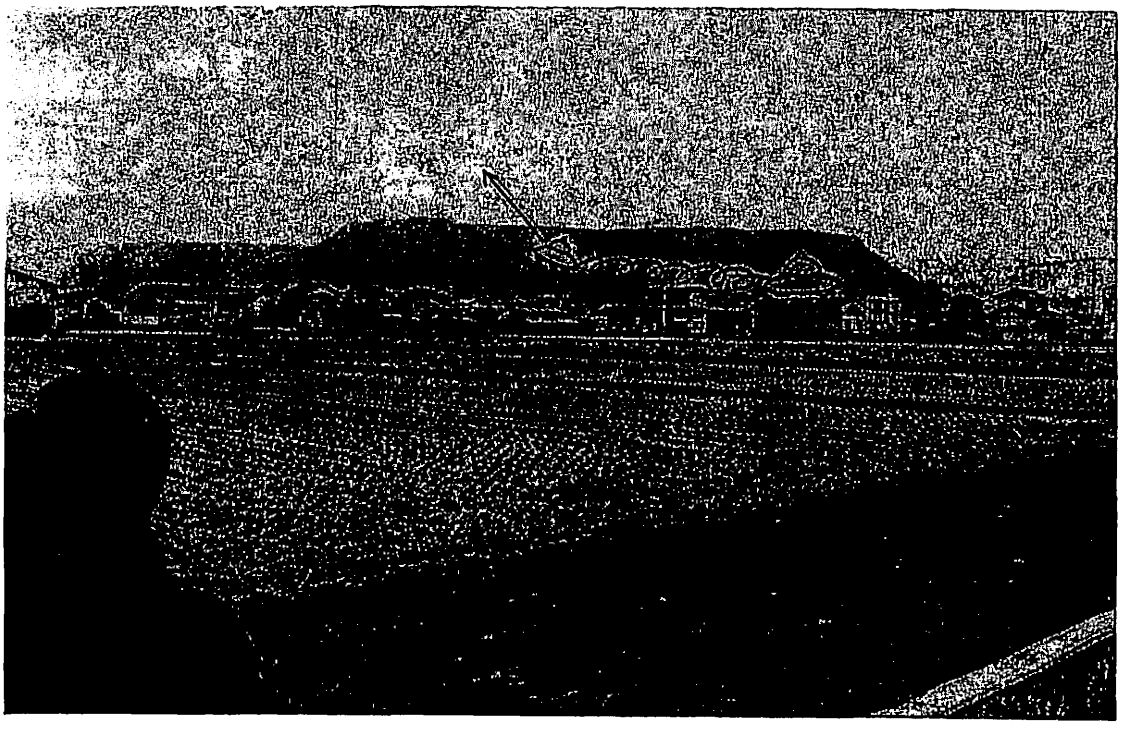
――いつ頃から見え始めたんですか?

「まだ今治にいた頃です。そうですね、六月か七月頃からではないでしょうか。

それからこれは今年の二月の出来事なんです。奈生が妹の佳世(四歳)と面白がってテレパシーごっこをして遊んでいたんです。妹が送信して姉の奈生が受信するんです。手元にゼナーカードが十九枚ありましたが、奈生は全部適中させました。これには驚いたですね。どのカードも二、三秒のうちにパッと答えるんですが、すべて当たりというわけです。またまそのの日はすごく調子がよかったのでしょうね。とても楽しそうな気分で笑いながらやっていたようです。カードの映像がはっきり見えているのではないかと思うほどでした。

ふだんは子供と話していても、日常の雑用の連続のなかに身を置いた目で見ると、何の変哲もない、どこにでもいる普通の女の子なんですね。ところがイザそのようなすごい資質が表面に出てくると、否定しようのないものを感じさせられます」

――日常の習慣化した雑用のはざまに雲の切れ目のような部分があって、そこから日差しがさし込むように、過去世からの蓄積されたパワーがひょいと顔を出すのでしょうね。



▲円盤は飛び去るにつれてスカート部分がゆっくり回転し始め、全体が自転を速めて、屋島南嶺の上空に遠ざかり、オレンジ色の光点になって、やがて消滅した。左は現場に立つ奈生ちゃん。

「たぶんそうだと思います。奈生は生来非常に社交的なところがあったんです。人間が好きでたまらないという一面があるようです。人間とのつながりを大事にするというか、人の輪の中に入ってゆくのが好きでしたね。

最近やや一人になって自分の内面を見つめる傾向が出てきましたが、やはり基本的にはすごく人が好きですね。人と人とのコミュニケーションの中で成長してゆくタイプのようです」

西本有水子さんと奈生ちゃんとは親子であると同時に、お母さんは日本GAP松山支部が設立されて以来ずっと今日に至るまで支部会員として活躍してこられた。支部月例会をはじめ松山支部大会などのほとんどに、西本さんが幼い二人の娘さんをつれて出席しておられたことは参会者がみな知っているとおりである。

奈生ちゃんがもっと小さかった頃からお母さんに手を引かれて月例会に顔を出し、録音テープから流れる久保田先生の宇宙哲学の解説講義に耳をかたむけていた。内容を理解できないはずの幼女が真剣な顔つきでおとなしくして聴いている姿は一種不思議でさえあった。彼女はいわば生え抜きのジュニア会員だと昔っても過言ではない。物心ついた頃から常にGAPの宇宙的な雰囲気の中で育ってきたのである。

ほんの先日まで松山支部で私たちと共に学んでいた奈生ちゃんが、引越し早々の高松でこのような素晴らしい体験をしたことは日本GAPにとって重大な意味をもつものであろう。

最後に有水子さんの言葉。

「私は奈生の母親として、娘の体験があまりにもすごい内容なので、これをどのように受けとめればよいのか、いまだに戸惑いを感じていますが、一方ではこうしたスペース・ピープルの活動はやはり日本GAPに新しい時代が始まっていることの確証を与えるものだと理解しています。そして、これから自分は日本GAP会員としてどうあるべきかについて、絶えず内部の意識に問いかけながら生きてゆきたいと思っています」

掲載した写真類は（表紙写真共）リポーター・伊藤達夫氏撮影。イラストは勝又英嗣氏画。

編者付記

この驚異的大事件に関して読者が懸念するのは他に目撃者はいなかったのかという点であろう。これについては本文対談で母親の有水子さんが、引越して間もないので近所づきあいがなく、そのために個別に他人に尋ねるわけにはゆかない旨を述べている。たしかに一般人が容易に信じないようなUFOなるものについて見知らぬ他人には話しかけにくいのに、見たかと聞いて歩くのは難儀なことであろう。おそらく目撃者はいたのだろうが恐怖して語らないと思われるものの、いずれ傍証が出ることを期待したい。

なおこの事件に関して西本家へ手紙や電話で照会することは遠慮されたい。六十年三月二十四日の松山支部大会には母娘で出席の予定なので、その際に友誼を深められたい。

――アダムスキー全集完結記念――

盛況のUFO写真展

●十月七日～十月十六日
　午前十時～午後八時
●松山市・丸三書店二階ギャラリー
●入場者　八百五十名

　このたび松山支部ではアダムスキー全集の完結を記念して、松山の丸三書店でUFO写真展を開催しました。これは、ジョージ・アダムスキー氏と地球を援助しておられるスペース・ピープルの業績をたたえ、その事実を広く一般の人々に知らせるために企画されたものです。幸いにして丸三書店の御理解をいただいて実現の運びに至りました。丸三書店の勇気ある決断に厚く御礼を申し上げる次第です。

　十日間の期間中、会場は学校帰りの学生や若い会社員を中心に連日多数の入場者でにぎわいました。休日には特に人出が多く、質問に答える合間をぬって二十分おきに映画を上映するなど、終日フル回転の状態が続きました。期間中の上映回数は軽く百回を突破しています。

　入場者の展示内容への反応はまさに百人百様で、多種多様なものがありました。アダムスキー一本に的を絞った展示会はこれまであまり例がないだけに、UFO写真を目当てに来た人々は勝手が違うのでかなり面くらったようで、その表情には驚きと当惑の色がうかがわれました。

　入場者からのどんな反応や質問にも相手の理解力に応じてできるだけ丁寧に、分かりやすく答えたつもりです。まじめな関心を示す人々にはアダムスキー問題の真実性を語り続けました。数え切れないほどの人々に「真実」を語り、啓発の努力を傾けました。その数はあまりに多くて正確な人数を覚えていません。不特定多数の人々への応対には忍耐強さと謙虚さ、入場者への感謝の気持ちが必要でした。終始楽しいことばかりではありませんでした。否定的な人々の言動に接して不快な思いをしたこともしばしばですが、その都度、スペース・ピープルとの一体性を思い、アダムスキー氏や久保田先生が歩んだ苦難の道のりに思いを寄せては自分を勇気づけました。

　その一方でオープンマインドな人に出会った時の喜びは格別で、友人に出会ったかのように話がはずんだものでした。金星のシンボルマークの前で謙虚な態度で耳を傾ける二人の女子高校生に、シンボルマークを指さして、父母性原理が金星だけでなく地球でも応用されている普遍的な原理だということ、教室で学ぶ生徒の態度や電話の応対を引用して説明した体験は忘れることの出来ない思い出です。「生命の科学」の「良き生活を望む十代の少年少女を激励しなければなりません」という言葉の持つ意味をかみしめました。

　アダムスキー全集も好評を博して予想外の売れ行きでした。七十冊中五十冊が売れています。特に第一巻（『宇宙からの訪問者』）と第6巻（『生命の科学』）がよく出たようです。書店側は多年の経験から「この種の特殊な本は一セット、（七冊）売れればいい方ではないか」と予想していたようで、予想外の売れ行きに驚いていました。アンケートによれば、全体の五八パーセントの人が「ぜひ全集を読んでみたい」と答えています。

　なお、期間中は地元の新聞二社からの取材があり、そのいずれもが写真入りで新聞に掲載されました。その客観的かつ正しい報道内容に心から感謝している次第です。そのほか地元の民放ラジオも会場から女性アナウンサーによるナマ中継が行われました。

　こうして十日間にわたる「アダムスキー全集完結記念UFO写真展」は松山のオープンマインドな土地柄と関心を持つ多くの人々に支えられて立派に実を結び、予想外の大盛況のうちにその幕を閉じることが出来ました。会場に足を運ばれたすべての皆様に心からお礼を申し上げます。

展示会は重要な意味を持つ

　「知らせる運動」の一環として開催したこの写真展が多くの人々の温かい支持をいただく中で、スペース・プログラムの遂行に協力できた喜びはひとしおです。アンケートによれば、回答を寄せた二百二十人の中で、実に九五パーセントもの人がこの展示会の開催を望んでいることや、これからも開催を願っていたことが明らかになりました。これを今後の活動に役立てたいと思います。

　この種の展示会がアダムスキー全集の存在と「宇宙空間の真実」を知らせる上で非常に建設的な方法であることがわかりました。今後は「真実」に関心を持つ多くの人々を正しい情報によって「啓発」することが、私達に与えられた課題ではないかと思います。

　開催に際してはGAPの皆様からは様々な御援助をいただきました。会場に掲げる「あいさつ文」を起草されたほか温かいアドバイスをいただいた久保田先生を始め、他の惑星の兄弟の方々に深い感謝の想念をお送り致します。

伊藤達夫

「ムーンゲート」 ●ウィリアム・L・ブライアン

■翻訳連載権独占■

MOONGATE By William L. Brian

久保田八郎訳

〈連載第6回〉 第9章

人工衛星による写真と地球上の異様な発見物

信じがたいことかもしれないが、一九六七年にさかのぼるむかしに一般へ公開された人工衛星撮影の地球の写真類の多くは、北極地帯に大地深くめり込んだ陥没地のように見える跡を示しているのだ。陥没地というものは球体にできると、ある角度から見た場合、球体の輪郭に必ず平らな面ができるのである。

このような陥没地があるとすれば、正しい位置から人工衛星が撮った写真は、地球を驚くほどいびつに写すだろう。また輪郭の立体的な奥行きを示す写真もあるだろう。

地球は空洞の天体？

ドッジ（国防引力実験部）衛星が地球の赤道から二八・九六〇㎞の地点で撮った地球の写真が、『ライフ』誌の一九六七年十一月十日号に掲載されたが、それによると北極地帯に、約二、五〇〇㎞にわたる平坦地が地球の輪郭中にできている跡を明瞭に示している。まるで地球の大きな一部分が薄く切り取られたかのように見えるのだ。これは写真を切り取ったのではなく、太陽の角度で生じたものでもない。

このドッジ写真は興味深いが、細部を写すにはもっとよい角度から地球を見る必要がある。一九六七年に応用技術衛星3号がブラジルの赤道上空の静止位置から撮影した類似の写真が（原書の）写真17である。

これは三五、七〇〇㎞の位置から撮ったもので、やはり北極地帯に大きな陥没地または大穴があるような輪郭を示している。この陥没地または穴が存在するとすれば、衛星の距離を大にして軌道角度を変えるならば、立体的な効果が出るかもしれない。平坦面の縁が急に落ち込んでいるのではなく、なだらかになっているのだ。

信じない人はこうした写真類を疑ってかかり、陥没地のように見える状態を、写真の修整、雲の形成、太陽の角度、北極の氷原、氷原間の水路などでそのように見えるのだと言うだろう。そこで筆者が強調したいのは、写真によらないで莫大な証拠があることを本章で述べたいという点である。したがって写真による証拠はこの情報の裏付けにすぎない。

読者は次のことを心にとどめるのが大切である。つまり地球その他の惑星は、極地の陥没がなくてもやはり空洞であるかもしれないということだ。ここで伝える情報や証拠はきわめて信じがたいものなので、筆者は読者がこの考え方を容易に受け入れるとは思っていない。地球が空洞であるという考え方がたやすく認められるようになる前に、もっと莫大な証拠を持ち出す必要があるのだ。

よって、ここに伝えるささやかな情報を、読者はこの問題についてより多くを学ぼうという目的で、広い探究的精神をもって読まれたい。そして新しい証拠を――それが未来に浮上するとすれば――評価することができるようになられたい。

NASAは写真類を隠している

NASA（米航空宇宙局）の隠蔽ぶりを考えてみると、一九六七年以後に一般に公開された地球の写真類が、この〝入口〟すなわち陥没地帯の証拠を示していないことや、極地上空で撮られた衛星の写真類が容易に大衆に入手できないのは偶然の一致とは思えない、という事実は驚くに足りないことである。筆者はNASAの各種機構に照会してみたが、こうした極地の写真を全く入手できなかった。NASAの技術応用センターから来た筆者の質問にたいする回答は次のとおりである。

「当センターには極地を撮影した衛星写真はありません」

重要なのは、NASAのこの機構は、どこで入手できるかを全然知らせてくれなかったことである。極付近の軌道に乗っている衛星が存在するというのは常識であり、したがって写真類は容易に入手できるはずである。NASAや軍部が大衆から隠すものがないのなら、なにも写真の配布を制限したり機密扱いにする理由はなさそうなものだ。

地球の大穴

重要なのは、先に述べたドッジ写真や応用技術衛星3号の写真は、地球上空の異なる距離で、異なる時間に、わずかに異なる角度から撮られたという点である。前者は約二、五六〇㎞にわたる平坦地を示しているし、後者は陥没地自体が径約一、二八〇㎞に及びそうな状態を示しているので、地殻の厚さはそれが穴である

と仮定することによって大ざっぱに計ることができるだろう。

空洞の地球の断面は図4に描かれた状態を示すと考えられる。写真類に見られる陥没地すなわち入口はなだらかになっているので、約六四〇㎞の半径をもつ半円形を形成すると思われるのである。そうなると地殻の厚さは約一、三〇〇㎞になり、地球内部の面積は外部の表面積の六三パーセント以上になるだろう！

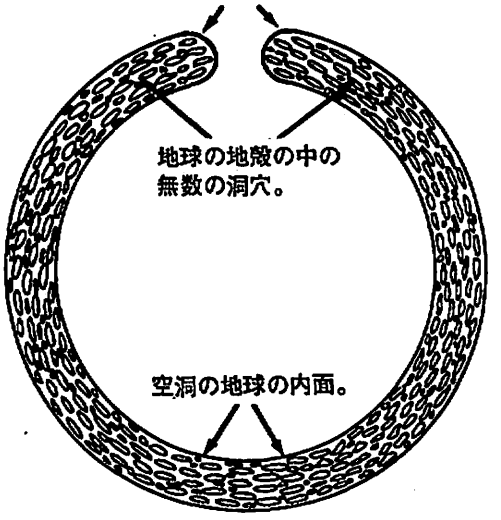
地球の内面上の引力は、引力放射線の限られた貫通力のために内面の方向に向かうだろう。その上、内面上の力はおそらく外面上の力とほぼ同じであろう。北極の入口を通って地球の内部へ入って行く飛行機または船は外部から内面へ通過するときに大きな引力の変化を感じないだろう。

しかし地球の弯曲はもっと大きいように思われるだろう。これは地球の外面と内面とのあいだのある距離になると引力がゼロになるためである。地殻のこの地域における物体は、内面よりも外面の方向へ落ちるという傾向もなく無重量状態になる。

これを実際的見地から言えば、こんなふうに作られた惑星は機械工学的な天才的離れ業を見せているのである。それは内部がぎっしりとつまった固型の惑星ほどの質量を必要とすることなしに、はるかに大きな表面積を作り出しているのだ。たしかに空洞の地球の質量は、地球全体が地殻の密度をもっと仮定すれば、ニュートンの万有引力の法則によって予測される質量の四分の一以下になるだろう。

図4　地球の断面図

矢印は磁針が90度を示し、北極にいるという錯覚を起こさせる場所。



驚くべき月の質量

月の質量について推測すると、まさに驚くべき結果が出る。地球と月のあいだの質量の中心はかなり正確なので、地球の質量は月のそれの八一・五六倍になる。これは、月も本来言われていた質量の四分の一以下になることを意味するのであるが、その平均密度がその地殻と同じだと仮定すると、月はわずかに一五㎞の厚さしかない地殻を持つことになる！　このために月面上のアポロ地震計が示したように、ほとんど誘発することなしに月が鐘のように響いたのだろう。もし地球と月が地殻の中に同じ比率の空洞を持っているとすれば、二つの天体に与えられた右の厚さは妥当なものになるだろう。

右の計算では、各天体の地殻の厚さ全体が地殻と同じ密度を持つと仮定してある。地球と月が全体にわたってほぼ同じ密度を持つというのがもっと妥当なように思われるので、そうだとすれば月の地殻の厚さは一九二㎞となる。いずれにしても地球が一、二八〇㎞の厚さの地殻を持つとすれば、月は七～八倍も薄い地殻を持つことになる。したがって惑星というのはかなりもろい構造なのかもしれない。このことは超兵器を用いれば惑星をこなごなにする恐ろしい可能性を示唆している。

大陸は移動する

これには地球の諸大陸は別々に移動しているという圧倒的な証拠がある。現在、大陸移動説はオーソドックス科学によって広く認められている。しかし熱い、溶けたコアなしに、なぜ大陸が移動するかに関して説明はないように思われる。この現象を新たに見直そうとすれば、引力の性質や、裂け目・地滑り・地層の積み重なりなどを引き起こす、地殻中に生ずるすさまじい圧力や張力などについて考えねばならない。

大陸の移動は地球が無限の時間を通じてゆっくりと膨張していることを示すのかもしれない。この論点にたいする大きな証拠は、一九七一年に書かれた『膨張する地球』という書物の中で有名な科学者パスカル・ジョーダンが与えている。

しかしジョーダンは、なぜ固体の惑星が元の直径の二倍以上もふくらんで、しかも依然として固体の球体であり続けるかという点を説明しなかった。もし地球の元の直径が二倍になれば、その質量は8という係数で増大することになる。地球は限られた量の質量しか持たないので、質量の増大を埋め合わせるための空洞の発生がなければ直径が二倍にはならない。直径が二倍になれば、容積は八倍に増大する。したがって現在の地球が直径六、三三六㎞の固い球体として始まったものならば、わずか二七二㎞の厚さの地殻しか持たないことになる。空洞の球体の地

球は大きな陥没地または穴（複数）がなければ無限に膨張するとは考えられない。こうした穴は両極間をつらぬく自転軸付近の地殻中にできるだろう。これが地球内部に通じる陥没地または穴が極付近に存在する理由を説明するのである。

地球は膨張する？

地球が膨張しつつある理由の簡単な説明があるとみてよい。一例として、グラスの中の水をぐるぐる回すと水は中心から外側へ投げ出されて中心部に渦巻きの空間ができる。地球も同じ状況下で伸びたりゆがんだりする物質でできている。赤道上の物体は地球の自転のために時速一、六〇〇㎞で回転している。無限の時間を通じて地球はこの力のためにゆっくりと伸びているのかもしれない。その結果、もとは固体の球として始まったにしても中空の球体になるのだろう。このゆっくりと進行する膨張が諸大陸を互いに引き離して移動させるのかもしれない。

火山については科学者が熟くて溶けた物質の存在説をとなえてきた。しかし考えられるのは、引力と大陸移動の原因となる同じ力やエネルギーが、地球内部の圧力の加えられる位置で溶岩が発生することに関係があるという点である。溶けた内部物質は、火山や大陸移動のような地球上の現象を説明するのに必要とは思えない。

極地の陥没地または穴の存在にたいする別な証拠は、この地域における地球の磁場によって与えられるのである。磁極が地理上の極とひどく離れている理由を科学は全く説明していない。

現在、北磁極は北緯約七六度、西径一〇〇度の所に位置するとされている。一方、南磁極は南緯約六六度、東径一三九度にある。磁極は磁針の傾き、すなわちコンパスの針が下方を指す角度が九〇度である地点と考えられている。この各磁極は、もし地球の形や構造に関するオーソドックスの考え方が正しいとすれば、地理上の磁極と一致するはずである。

磁極の存在はたぶん誤解を招きやすいだろう。磁極というのは実際には磁針の傾きがほとんど九〇度になるような急カーブのまわりの広い地域であるらしいからだ。南磁極は南緯七二度、東径一五五度からずれてきたと思われている。この数字は一九〇九年にシャクルトンによって最初に決定されたが、現在の位置は南緯六六度、東径一三九度である。

しかし現在、磁極の根本的な変化は全くなかった可能性もある。もっと可能性があると思われるのは、九〇度の傾きというのは、南極の陥没地付近と思われる地域と一致する多くの場所で計測されてきたらしいという点である。

バード少将の奇妙な体験

地磁気の地図は南北磁極の位置と思われる部分のまわりに集中した磁力線の傾きを示している。重要なのは、先に示された応用技術衛星3号による地球の写真は、北極の陥没地帯の位置が、地磁気の地図に見られる磁北極の大体の位置に相当するかもしれないことを示している点である。どうやら磁北極として決められた位置は、この北極の陥没地帯の端近くで行われた各種の測定を平均することによって導き出されたのかもしれないのだ。また、オーロラは磁力線の傾きとほぼ同心であるというのも重要である。最大のオーロラの出現は地理上の極のまわりに集中するのではなくて、磁極のまわりに現れるのだ。

『ナショナル・ジェオグラフィック』誌一九四七年十月号で、故バード少将が書いた『わが海軍、南極大陸を探険す』と題する記事によると、バレニー諸島付近から吹いてきた温かい風のことを述べている（訳注＝リチャード・バード少将はアメリカの海軍軍人で極地探険家。一九五七年没）。

バレニー諸島は磁針の傾きが九〇度に近い磁力線のカーブ付近にある。磁南極の位置から見ると、南極の陥没地帯は地理上の極から約一、六〇〇㎞の所になければならない。バードが語った温かい風というのは、この内部地域から来た気流であったかもしれない。ひどく温かいと仮定すればだ。

またバードは茶褐色の不毛の岩山地帯のドまん中にある淡水湖（複数）と共に見られる多くの無氷地域のことも述べている。ウィルクス島のクィーン・メリー沿岸付近の一地域は少なくとも四八〇平方マイルにわたって完全に無氷だった！赤・青・緑の藻が南氷洋よりも温かい水の湖中に発見されたのだ。その記事によると、火山または温泉活動の跡は発見されなかったという。したがって、この温かい地域は夏の数カ月の間、雪や氷を寄せつけなかった温かい風または太陽熱のせいだったとされた。この特殊な地域で発生する温かい風の原因については述べてなかった。

極地探険家たちの奇怪な証言

バード提督が北極と南極の探険を始めるずっと前に、いろいろな探険家が北極に到達しようとして、頭を悩ますような現象に遭遇している。

ウィリアム・リードは『極地の怪奇現象』と題して自分の体験を一九〇六年に書物を書いた。それによると高緯度の地域にいる多くの鳥は、南のかわりに北へ移住する傾向があることや、北極探険家がしばしば温かい風を体験したことがわかったという。しかしこの探険家たちは地球の空洞説に関する書物を読んだ形跡はない。地球に関するこうした論争はまじめに取り上げられなかった。この考え方は（空洞説は）基本的な物理学の基礎と相いれないからだ。

北極探険家たちが極地に到達しようとして、急速に曲がっている陥没地帯へ入って行った証拠は、彼らの進行度で割り出されている。フレデリック・クックの主張によると、彼は一九〇八年四月二十一日に極へ達し、ロバート・ピアリーは一九〇九年四月六日に達したという。ところがこのいずれも相手は極へ絶対に達していないと断言している。しかし両者には食い違いがある。クックには正当な

証人がいなかったし、ピアリーにもいなかった。クックは一日二四km進行したと公表したときに疑われた。一方ピアリーは一日に三二km進行したと称している。

ピアリーは北緯八八度線に近づいた後、初日に四〇km、二日目に三二km、三日目に三二km、四日目に四〇km、五日目に六四km進行した。この旅行の状態はピアリーが平均わずか一日に三二kmしか進行できなかったもっと南の状態よりも困難であったと思われている。たしかにピアリーすらもひどい条件のために犬ゾリによる徒歩速度を保つときの困難さについて述べている。

不思議な〝水空〟現象

ピアリーが北緯八七度四七分の位置から極地まで四三二kmを旅して七日間で帰って来たとは信じがたいことである。彼が発見にたいして手柄を認められた後に、国家の調査委員会は後に彼の業績は〝証明されなかった〟ということに決めた。ピアリーとクックがこのような驚くべき距離を踏破したと思われる理由は、北極地域の湾曲が考えられるならば理解できることである。もし彼らがなおも六、四〇〇kmの湾曲の半径をもつ表面を歩いていると信じていたならば、実際に進行していたよりもはるかに前方を歩いているのだということが星や太陽に関する位置測定の結果わかるだろう。

他の探険家たちは自分たちが予測したよりも地平線がもっと急速に変わるように思われたと言っている。たとえば『極地の怪奇現象』の中でリードは、この現象に関して探険家のグリーリーの言葉を次のように引用している。

「高い岬の各突出部に我々が近づくにつれて、その先に存在するものを見ようという我々の欲求はときとして苦痛なほどに高まってきた。新しい地点に到達し、新たな風景が見えるたびに、我々は心から喜べなかった。というのはいつも前もって地平線の一部を切り取った地点があり、そのために失望したからである」

また探険家たちは〝水空〟と名付けた現象のことを述べている。これは地表で彼らの前方の風景を空中に正確に反射したものである。彼らはただ空中を見るだけでよく、それを旅の進路を計画するための地図として用いた。この奇妙な状態は、地球がかなりするどく湾曲しているとすれば、たぶん発生するだろう。さもなければ空中の反射水蒸気があまりに遠すぎて、探険家たちが反射を見ることはできなかっただろう。

ナンセンの航行の謎

ナンセンは北極の陥没地帯までかなりの距離を進行した初期の探険家の一人であった。彼の航海のある地点でナンセンは一五日間絶えず北へ航海し、極地を一、九〇〇km以上も過ぎたはずの地点で、ただ一個の星が見えて、一定の期間中、それが頭上にそのままとどまっていた。たぶんナンセンとそのグループは他の星のほとんどが見えなくなるほどに内部へ入り込んだのだろう。『最も遠い北』の中でナンセンはこれについて次のように述べている。

「太陽は海の背後に沈んでから長くたった。そして夢のような夕方の空は黄色で金色であった……。一個の星だけが見えていた。それはチェリュースキン岬の上空にとどまって、薄い空中にはっきりと悲しそうに輝いていた。我々が航行を続けて岬を右手にするにつれて、星も一緒に移動した。それはいつも真上にいたので、それを見るために座らないわけにはゆかなかった。憂うつな夜をフラム号が骨折って前進し、旧世界の北端地点を通過するにつれて、多くの思いが私の内部にわき起こってきた」

北極地域の大規模な航海の多くを通じてナンセンは自分が混乱し、根本的に我を忘れている。彼は次のように述べている。

「我々は北方への前進をしていなかったということが、私にとってますます謎になってきた。私は計算をし続けて、進行するにつれて進路を加算していったが、結果はいつも同じだった。つまり、依然として氷だけが見えるなかを、我々は北緯八六度線よりもはるかに北にいるにちがいないのだ」

探険者たちはその後、温かい泥水に遭遇したが、これをナンセンはシベリアのレナ川から来たものと考えた。しかし彼らはなおも北西の方向に向かっていたのである。

一行はきれいな水の中をかなりのスピードで北へ航行したが、極地へは近づかず、二週間前と同じ状態だった。甲板を洗うために水を汲み上げてみると、水は燐光で輝いており、甲殻類の生物が捕らえられて、燃えさしの薪のように光っているのにナンセンは気づいた。彼はある出来事を次のように述べている。

「調理室でランプの明かりで私が網の中味をあけたところ、燃えさしの薪のように見える強烈な燐光で輝く小甲殻類や他の小さな動物などが……」

またナンセン探険隊は絶えず船の甲板を覆う大量のチリに見舞われた。リードの結論によると、このチリは地球内部の火山から来たという。炭素と鉄からできていることがわかったからだ。

加うるにフラム号は絶えず南へ流れる海流にさからって航行したが、これは乗組員たちを悩ませた。彼らは北へ流れる海流があるものと思っていたからである。

ナンセンは北緯八一度の北方で十二月の中旬に体験した信じられないほどの暖かさについて述べているし、八五度では温血動物を発見したとさえ言っている。こうした発見事は、ナンセンが北極地帯には存在しない地域へ踏み込んだことを示唆しているようだ。ただし地球の形に関する従来の説が正しいとすればだ。

みずからの体験の結果、ナンセンは、北極は非常に深い無氷の窪地または陥没地にあるのだと確信したのである。

地球の内部から川が流出？

他の北極探険家で同じような現象を観測した人々がいたけれども彼らには理解

できなかった。グリーリーは、北極海との境をなすある北の海岸で大きな針葉樹を部下が発見したときには混乱してしまった。あたり全体に流木が見られたのだ。リードの結論によれば、この流木は地球の内部から流れ出る川（複数）から北極海へ送り出されるものだという。

極北の海洋に氷がないということになれば氷山というものが別な謎の原因となる。一つの結論は次のとおりである。つまり海洋の水は北端付近で体験される広範囲な寒気を避けるために、地球の内部にまで伸びているのだと。リードも北極の氷山は地球内部から流れ出る川のためだと主張している。この川（複数）が地球の外部表面付近の寒冷地帯に到達すると、それが凍って氷山になるのだという。夏の数カ月間、氷山は解けて海洋に流れ込むのである。

近代のバード少将の極地探険は壮大なスケールの軍事行動であり、莫大な努力が払われた。バードはもともと無制限の財力と、彼を助けるための近代的な技術を持っていた。飛行機は短期間に遠距離をカバーできたし、初期の探険で体験した困難な条件を避けることもできた。

レイモンド・バーナード博士は一九六九年に出版された『中空の地球』と題する本を書いているが、その中で彼は『空飛ぶ円盤』誌の編集者であった故レイ・バーマーの記事を次のように引用している。

「バード少将の南北両極への二回にわたる飛行によって、両極地帯における地球の形に〝奇妙なもの〟があることを証している。バードは北極地点へ飛んだが、そこへ着陸したり引き返したりしないで、なおもそこを越えて二、七二〇kmも飛んだ。それからもと来たコースをたどって北極の基地へ帰ってきた。これは燃料が少なくなったからである。

北極地点を越えて前進するにつれて、氷のない土地や湖、樹木で覆われた山々、ヤブの中を動く太古のマンモスに似た巨大な動物などが見られた。そしてこの光景のすべては飛行機の乗員によって無線で報告された。二、七二〇kmのほとんどすべてを飛行機は陸地、山々、樹木、湖（複数）、川（複数）などの上空を飛んだのである」

右の記事が事実であるとすれば、バード少将とその部下たちは、大衆の全く知らない場所を探険したことになる。

どうやら海軍は一九五八年の探険中に〝北極〟に到達しようとして〝氷〟の下で、地球の内部を探険したらしい。しかし何かの謎の理由により、この探険は極秘にされて、原子力潜水艦ノーティラス号が帰る途中にアイスランドの沿岸沖で浮上するまでは、大衆はそれについて何も知らされなかったのである。

こうした極地の陥没地帯の存在について指摘する別な情報もある。たとえば、一九六〇年にトロントの新聞『ザ・グローブ・アンド・メイル』に一枚の写真が掲載された。これは北極地帯で一飛行士が撮ったもので、起伏する丘のある緑の谷を写している。

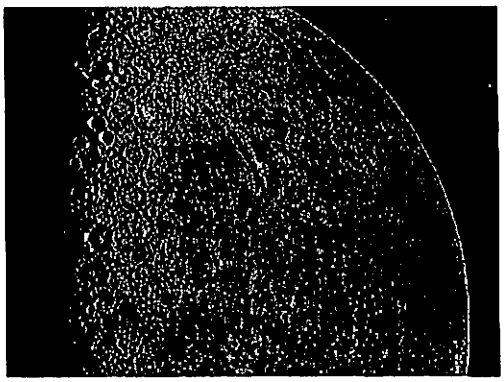
ソ連は明らかに極地の状況に気づいていた。なぜならソ連のスプートニク衛星と人工ロケットのすべては、かなりな距離で両極を見失うような軌道を飛んで、ついに、極の上空を飛ぶ多くの初期の衛星は、北極地帯の上空で謎の失跡をとげたという噂が流れた。当然のことながら、たとえ衛星が地球上空数千マイルを飛んでいたとしても、引力の食い違いは恐ろしいものとなる。高度一六〇kmの軌道で衛星は陥没地帯へ入り込んだか、またはその一方の側に落ち込んだのかもしれない。

月は薄い地殻の空洞の天体か

この章を要約すると、北極と南極の陥没地または穴のある中空の地球にたいする証拠は出てきたのである。人工衛星が撮った写真は北極の大きな陥没地または穴と思われるものを示している。しかし筆者は南極の陥没地の写真の保管場所をつきとめることはできなかった。たしかにすぐれた極地写真を入手するのは困難である。

筆者が手に入れた北極の写真類は、赤道面付近の軌道に乗っている人工衛星または他の宇宙船によって絶えず撮影されたものだが、いずれも大写しの細部を写してはいない。

過去百年にわたる探険家たちの記事は、北極の陥没地存在の証拠を提供してきた。NASAが行った月面の地震実験の結果、月はかなり薄い地殻を持つ中空の天体かもしれないという証拠が出ている。かわってこのことは地震擾乱や北極地帯を撮影した人工衛星の写真類が示すかもしれないように、地球も空洞だということを意味するのである。地磁気による根拠すらもこのことを裏付けている。



最後に言うと、本章であげた証拠は、月の強い引力と充分な大気に関するもとの論点を裏付けるものである。しかし、これまでに得られた証拠類はまだ決定的でないので、極地の穴や陥没地は存在しないかもしれない。もし存在しないとすればオーソドックス科学で説明できなかった多くの謎が残ることになる。月の強い引力や充分な大気の存在は、極地の穴や陥没地と関係はないとまたも強調して間違いはない。これまでにあげた他の根拠は、月の本当の性質に関してNASAと軍部が隠蔽しているという論点の裏付けに独自な役割を果たしている。

（第九章完。以下次号）

米政府はUFO問題の真相を公開せよ

米カリフォルニア州ウォールナットクリーク
パブリック・インタレスト・スペース・サイエンセズ・センター主宰

ダニエル・ロス / 久保田八郎 訳

この記事は読者にたいして、現在と近い過去におけるUFO問題に関する少数の書物について知らせるためのものである。

書物や少数の敏感な雑誌類は証拠をうまく大衆に伝える唯一の伝達手段であると言える。事実の完全な暴露と適切な考え方の発達は研究家たちによって行われるのであって、新聞記者による自己防衛的な論調などを必要としない。もっと悪いのは保守陣営による直接の検閲である。

米空軍ブルーブック調査部（第二次大戦後に組織されたUFO調査機関）の部長であったエドワード・ルッペルト大尉が書いた『未確認物体に関する報告』に述べてあるように、一九五二年度の六カ月間だけで百四十八種の主な新聞が、UFOに関する一万六千項目の記事を掲載したのである。

そして七月には二夜にわたってワシントン市上空に壮観きわまりないUFO出現事件が発生した。このため政府高官、科学者、国防省、さらにトルーマン大統領までを加えたトップクラスの会議が行われることになった。

この謎はまさに洩れようとしたのだが、その可能性を防ぐために突然強力なグループによって押しまくられ、真実のUFO存在の証拠や納得させるような情報類の流出を経済界側が抑えたのである。CIA的なスパイ団を使って厳密な防衛線が敷かれ、大衆と無知な権威者にたいして、UFOは物体ではあるが別な惑星から来る宇宙船のごときものではないと確信させたのである。

米政府の政策は沈黙と隠蔽に変わった。この方法がうまくゆかないときは、必要に応じて目撃報告や目撃者を嘲笑することにした。これは不幸にして本当の混乱を引き起こし、UFOは急速に空想科学小説とあくどいインチキの分野に落とされてしまった。少数の信頼に足る目撃報告があちこちで問題にされたけれども、バカらしいイカサマ報告や奇妙な物語が実際には唯一の解明源となり、広く流布することになった。

新聞が新奇なセンセーショナリズムに飽きると、こんどはバカげた記事ではめをはずしてしまった。その間ずっと本物のデータの検閲が数年間強化され、信頼すべき情報は大衆に届かなくなってしまった。加うるに我々は現在の新聞のニュースは、武力増強論、核武装、政治上のナンセンス事件、戦争の脅威論などの絶えまのないわめき声であることが容易にわかるのである。

現代の地球にひどくはびこっている恐るべき狂気と、大気圏外の文明の出現とのあいだに直接の相互関係があるのを見るには、ちょっとした科学的洞察力と常識がありさえすればよい。少なくとも我々はだれかが地球の最後の消滅を記録することができるだろう、そして地球の破片を拾うだろうと考え得るのである。

我々は全く危険な人種である。何が起ころうとも、それは人間自身がもたらすものにすぎない。宇宙から来る訪問者たちは、地球人の態度が敵意と貪欲から国家間の平和的な協力に変わらない限り、彼らの距離を保ちたがるだろう。

しかし人間は自己の内部により高度な理解へ進歩する力を秘めているので、地球が本当の平和な宇宙文明惑星になり、太陽系の中の正しい位置を占めることができるようになるという望みはまだある。

ゴードン・クーパーの偉大な勇気

読者の多くは、「UFOは自分たちの存在を我々に気づかせるために、定期的に地球を訪れているのだ」という宇宙飛行士ゴードン・クーパーの言明をすでに知っているだろう。

モーリス・チャトレインはその著『我らの祖先は大気圏外から来た』の中で、ジェミニとアポロの宇宙飛行によるUFO遭遇事件のすべてを述べており、宇宙飛行士たちが政府の機密保持命令に従ったことや、国家防衛のために彼らのUFO目撃について秘密を守ったことに言及している。

しかしチャトレインはさらに洩らしている。つまりゴードン・クーパーは疑いもなくアメリカの最優秀な宇宙飛行士であり、一九六三年にマーキュリー9号、一九六五年にジェミニ5号に乗ったにもかかわらず、アポロ宇宙船には全然乗らなかったのであると。宇宙開発関係者の中には、NASAは彼がすでに宇宙空間であまりに多くの物を見ており、しかもそのことを話したがる性質なので、月へ行くアポロ飛行から除外したのだと考える人が多かった。他の宇宙飛行士たちは

秘密命令におとなしく従ったのに、クーパーには大気圏外のUFOの目撃についてだれにも話す権利はないということを納得させることができなかったのだ。確信に満ちた強気な人間をかかえているのは政府や軍部にとって不利である。それで彼はひそかに宇宙開発計画から除外されたのだ（ダニエル・ロス氏注＝世の中はこんなふうに展開してゆく。既成権力に従わなければ月へ行くチャンスを失うし、もっと悪いのは仕事さえ失ってしまう。トップクラスの科学者の多くがUFO存在の証拠をおおやけにしないのは当然のことである）。

数年後ゴードン・クーパーは南米考古学探険隊に参加した。そして太古の昔から現代に至るまで宇宙から訪問者たちが来ていたことを確信するようになった。

一九七七年一月にマイク・ダグラス・ショーで、クーパーは一九五〇年代に空軍のテストパイロットであった当時、彼がヨーロッパで体験した初期のUFO目撃について語っている。以下はそのときの対談の一部である。質問者はダグラスで、答えるのはクーパー。

――あなたがテレビ番組でこの問題についてどの程度言えるかは知りませんが、こんなに興奮するような対話に出演したことはまだありません。私はUFOに興味があります。それに関する多くの記事も読みましたし、魅力も感じました。あなたはUFOをごらんになったことがありますか？

「ええ、見ました。私はヨーロッパで戦闘機中隊の一員だったのですが、二日間UFO（複数）が飛来し続けて、大体に東から西へ飛び、我々の戦闘機ではとても到達できないはるかな高空を飛んでいました」

――あなたの戦闘機でどれぐらいの高度に上昇できたのですか。

「約一万五千メートルです」

――UFOはそれよりも高空にいたのですね。何機ぐらいいたのですか。

「二日間にわたって総計数百機だったと思います。それがやって来たときは、私たちのグループのだれもがときどき双眼鏡を持って飛び立ち、できるだけ上昇して双眼鏡で見るようにしました」

――ある日戦闘機中隊全員がそれを追いかけて出かけて行ったのではないんですね。

「まあ、そういう特別な時間があったんです」

――UFO群はどんなふうに見えましたか。説明して下さい。

「そうですね、それらは典型的な二重の皿の形をしたもので、金属製らしく、翼はなかったという以外に説明のしようはないですね」

――それらは自転していましたか？

「いいえ。航跡も残しませんでした」

――何人の人が見たのですか。

「たぶん計百名ぐらいです」

――あなたは追跡しなかったんですか。

「一日はやりました。でもUFOは私たちよりもはるかに高く飛んでいましたから、実際は追跡はできなかったんです」

――あなたがた中隊全員が追跡して出かけたけれども、UFO群は高速で逃げてしまったということですね。あなたが基地へ帰って目撃したことを報告したときに、だれかが調査しましたか。写真を撮ったのですか。

「いいえ。実際問題として写真などは撮れなかったと思います。その理由はわかりません。その瞬間にはだれも撮影のことなどは考えないでしょう。その頃は米空軍がUFOを調査するのに多くの金を使っていた頃で、UFOの正体やその発進地をつきとめようとして、UFO情報にたいして発生することを厳重にコントロールすることにきめていました」

続いて一九七八年に、マーヴ・グリフィン・ショーのインタビューで、ゴードン・クーパーはUFOとの近接目撃について質問されたが、それにたいしてクーパーは、信頼し得るあらゆる報告からして、「UFOのパイロットは我々地球人と同じように見える人間だ」と述べている。

以下は一九七六年八月十五日のロサンジェルス・ヘラルド・エグザミナー紙にたいする彼の声明である。

「他の惑星から来る知的生命体は、地球人とコンタクトしようとして定期的に地球を訪れている。私は宇宙飛行中にさまざまのUFOに遭遇した。NASAやアメリカ政府はこのことを知っており、莫大な証拠を持っている。それにもかかわらず彼らは沈黙を守って大衆に知らせないようにしているのだ」

右のテレビ出演に関して視聴者から多くの手紙が送られた。このことはタブロイド版新聞のトップに出るUFO誘拐事件のようなくだらぬ記事でなくて真実のUFO事件を大衆が聞くならば、心からそれに反応を示すというトピックである。

映画『ザ・ライト・スタッフ』には微妙な点が織り込まれていた。オーストラリアの追跡ステーションへやらされた二人の宇宙飛行士が、一人の原住民に、人間が宇宙を旅しているのだと（これは現在可能である）説明し始めたところ、その男は年長の原住民を指さして言った。

「彼は知っているよ」

この意味は、人間が宇宙を旅していることを彼は知っているというのだ（地球から人間が最初に軌道飛行に出る以前のことである）。この筋書きは全く時宜を得たものだった。その原住民はこのことをゴードン・クーパーに扮した俳優に話したのだ！

インディアンの大地と空

多くの人はアメリカ・インディアンが宇宙人（スペース・ピープル）と公然とコンタクトしているという話を詳細に知りたがっている。伝承や伝説などは、各種のシンボルでもって慎重に守られた状態でこの知識を伝えている。白人の到来と搾取（さくしゅ）以来は特にそうである。このことはインディアンが神聖なものとあがめたあらゆる物にたいして白人が極端に不敬な態度を示したために、必要なことだった。白人は略奪をするだけで、土地を取り、インディアンに自分たちの宗教を厚かましく押しつけた。この宗教が征服者たちの生活にほとんど精

神的な意義をもたないことがはっきりしているというのに、こんなものを原住民が受け入れるわけがない。

宇宙船（円盤）はしばしば彼らの土地に着陸した。大気圏外へ連れ去るためではなく、寛容な友情や指導など、高度に価値あることを伝えるためである。

しかし〝文明人〟の白人の侵入後、円盤の訪問の度合は落ちた。とはいうものインディアンはこれを当然のことと考えて、聖なる予言類と共に円盤来訪の知識を部族の中に隠してしまったのである。我々はUFOに関する報告に満ちたインディアンの書物をけっして読むことはできない。なぜなら彼らは自分たちの高度な教えや生命の哲学、または大自然の理解などを、円盤来訪から切り離していないからだ（訳注＝アメリカ・インディアンの民芸品や絵画には宇宙の法則、特に愛の法則をあらわしたものが多い）。彼らの聖なる価値あるものは、傲慢な信じない人間たちによって犯されることはない。だから西洋の大学の人類学者や歴史の学者は、この問題について教えはしないのだ。大学ではせいぜい征服者の記録が教えられるにすぎない。

しかしインディアンは、人間の真実の友愛精神を理解する熱心な探究者には多くの手がかりを与えてきた。パイウテ族とナヴァジョ族インディアンは、他の惑星を生命の基点として述べており、空を飛ぶ船に乗って地球へやって来た「ハヴムスヴス」すなわち〝小さな人々〟について語っている。

米南西部のプエブロ・インディアンの聖杯や漆装陶器には、火星から来たスペース・ピープルとのコンタクトが美しいモチーフで記録されている。

ホピ・インディアンは過去の宇宙からの来訪者の出現に言及している。いつかまたやって来るという美しく賢明な〝星の人々〟のことだ。

空を飛ぶ船（円盤や母船）の出現は、カナダから南米にかけて住むほとんどあらゆるインディアンの伝説の中に残っている。

惑星の軌道運行のために、天空に見える各惑星の位置は絶えず変化する。一年のある時期のあいだ、金星は夜明けにキラキラと輝き、明けの明星として知られている。金星はアメリカ・インディアンによって高く崇拝されており、この明けの明星が輝いているあいだはインディアンはけっして戦争をやらないという事実もよく知られている。米陸軍はインディアンとの長期戦中にこの事実を知ったのである。

この金星崇拝を世界各地の古代文化の伝説と結びつけるのも容易である。すなわち地球の黄金時代の指導者は金星から来たという伝説だ。以下はジョン・ナイハルト著『ブラック・エルクは語る』からの引用である。

スー族の聖者ブラック・エルクは、東に昇る明けの明星を見たとき、自分の見たまぼろしについて語っている。ある声が語った。

「その星はおまえたちの親族となる。それを見る者はさらに多くを見る。そこから知恵が来るからだ。それを見ない者は暗愚になる」

他の惑星から来た人間と会った記録で初めて広く認められたのは、一九五二年に金星の円盤やそのパイロットとモハーヴェ砂漠におけるジョージ・アダムスキーの会見であった。

ホピ族の宇宙人予言

アメリカ南西部のホピ族インディアンは、この大陸に住むインディアンのなかで最も平和な部族である。たしかにホピという言葉は〝平和〟を意味する。

彼らは非常に古い聖石板に記録された一つの予言を持っている。それは〝空の人々〟が地球へ帰って来るとき、これは二つのシルシによって知られるだろうというのだ。

宇宙から来る訪問者たちは、太陽円板のシルシをもつ真実の白人の兄弟と合流するために、太古の宇宙的なシンボルであるまんじ十字型（卍）をもたらすだろうという（これ以上の説明は必要あるまい）。

しかもアメリカ国民の大多数が空中に発生している出来事やUFOの真相について知らず、無関心であるのに、ホピ族の宗教指導者たちはこのことを知っていて、予言はすでに実現したというメッセージをたずさえて米政府へ出頭したのである。

だが政府の反応はいつもと同じだった。政府はUFO情報や別な惑星から来る訪問者に関して関心も示さず行動も起こさないのだ。

しかし政府がアダムスキーや過去の他のコンタクティーたちを認め得ないとすれば、ホピはこれ以上にどんな証拠を提示できるだろう。このホピの情報は米議会の記録に入れられたという。

NASAの宇宙開発計画が月着陸後に終わったとき、数千名の科学者は別な場所で仕事を見つける必要にせまられた。そして具合のわるいことに彼らは軍部の諸計画に引っぱられたのである。これは国防省が、選択の余地を排除したときに政府から多額の金を受けたからである。

アメリカの国防予算はいま二千八百億ドルで、ベトナム戦争のときは八百億ドルにすぎなかった。レーガンの未来のビジョンは今後五年間で国防費に一兆八千億ドルを支出するという。こんな金は存在しないが、政府は赤字支出をやり、このために世界の経済にひどいひずみを起こすだろうから、政府の金には新たな定義をくだす必要があるだろう。

しかしもっと大きな問題は金ではなくて生活の問題である。これについてアダムスキーは、宇宙開発用の資金の支出を怒り、破壊目的で巨額の金を好む者は、知ってか知らずか、この惑星上の全生命の破壊に貢献しているのであると言っている。

その日、東京ディズニーランドは祝福されていた!

UFOは私たちを注目している!

伊藤 達夫

総会翌日の都内観光で、今年もまたUFOが出現して私達を励まして下さいました。

ほぼ全員が見た!

東京ディズニーランドに到着し、全員がバスから降りて正面玄関の前にいた時フト海の見える上空を見上げると、ポツンと白い光点が紺碧の中に見えました。UFOだと直感したのですぐに久保田先生にお知らせしました。その物体は左右に揺れながらゆっくりと右方向から左方向へ移動してゆきます。揺れるたびに白く輝いていました。持参していた七倍の双眼鏡で確認すると、それは蚕のまゆのような形をした物体で、ジュラルミンのように輝いている部分とそうでない黒っぽい部分とがあり、全体にやや青味がかったフォースフィールドらしいものを伴っていました。居合わせたほぼ全員が目撃しました。そのままゆっくり左方向へ移動を続けましたが、そのうちに飛行機が一機近づいてくると突然パッと上空に移動して、また何事もなかったようにそのまま同じ方向に行ってしまうのを二、三人の女性会員が目撃しています。飛行機が近づいた頃に下方に別な物体が浮かんでいるのを見たという人もありますが、確認するまでには至っていません。

この物体を「気球ではないか」と疑問視する人が少なからず存在しているようですが日頃目撃の達人であるA氏は「決して気球ではなく、気球に似せた本物のUFOだと思います」と語っていました。

急降下してきたUFO

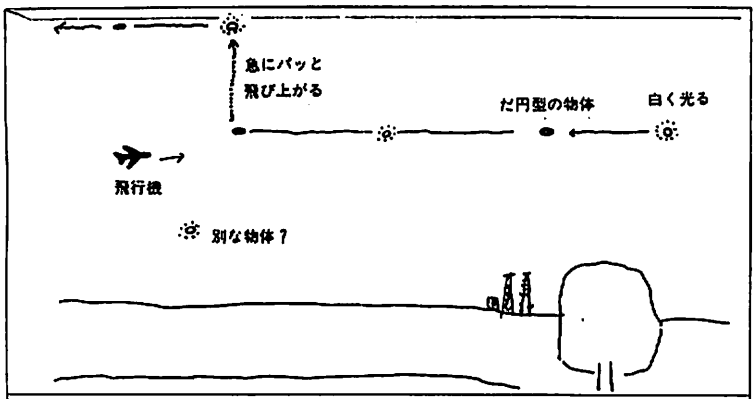
それから札幌の高野省志氏、広島の佐々木朋子さんと一緒に正門入口から入場しようとしたのですが、混雑していたので左側の入口から入ってワールドバザールに向かって歩いていたところ、またまた正門間近の上空にUFOが現れました。まん丸い物体が急降下してくるのを佐々木さんが見つけたのです。高野氏と私も同時に目撃しています。この物体は、こちらからの見かけ上、外壁のすぐ上のあたりまで降りてくると急に右にターンしました。その時、真横になった形はフライパンをもう少し分厚くした典型的な円盤の姿を示していました。そのあと外壁の陰に隠れてしまいました。かなり近くに出現したのではっきりと見ることができました。ちょうどその時広場では全員の記念撮影をしていたところだったので、もしかするとスペース・ピープルの方々が久保田先生と会員の皆さんを祝福しに来て下さって、上空から見ておられたのではないかと思いました。本当に素晴らしいことです。

これは意義ある目撃事件

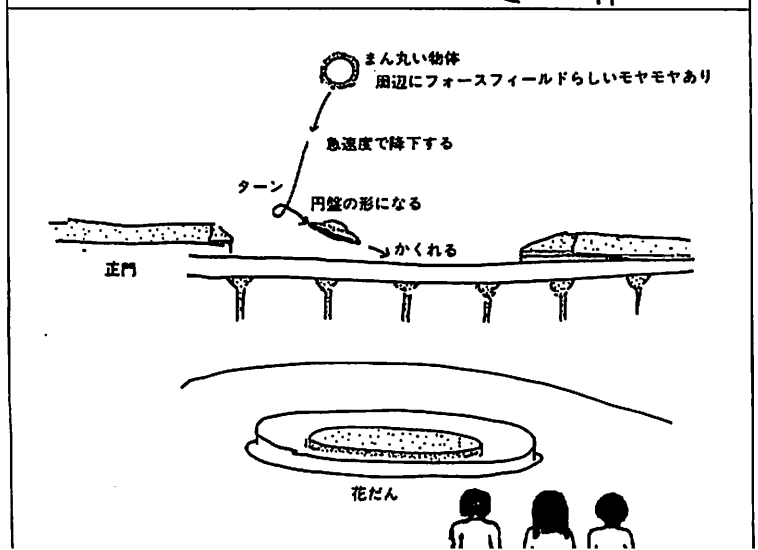
私は最初、都内観光の申し込みをしていませんでしたが、総会の前日になって急に「絶対に都内観光に行かねばならない」という気持ちになったことがこの体験に結びつく結果になりました。そのことを心から喜んでいます。

先生を中心にして同じ宇宙的な目的を持つ各地の会員が一同に集まった場所でUFOを目撃し、その喜びをみんなで分かち合う姿ほど美しいものはありません。私はこうした全体と喜びを共にする一体性のフィーリングを大切にしたいと思います。

素晴らしい体験の機会を与えて下さり、先生と会員一同を祝福して下さったスペース・ピープルの方々に深く感謝致します。



◀正門前の上空に現れたUFO



◀記念撮影のときに現れたUFO

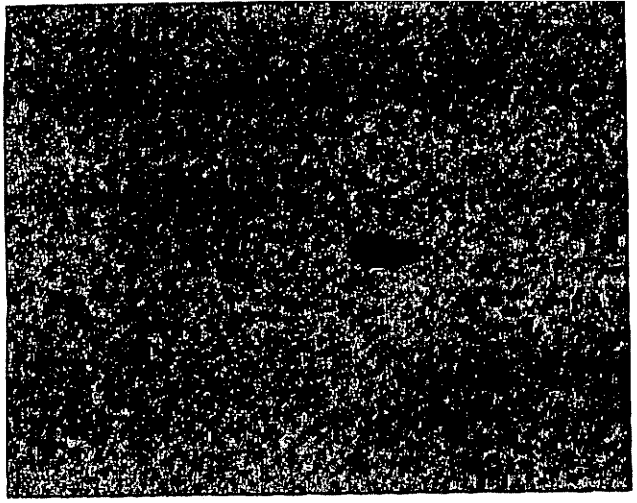
神戸港にUFO出現！

一九八四年度大阪支部大会翌日の七月九日の神戸市内観光は晴天に恵まれて、素晴らしい一日が予感された。

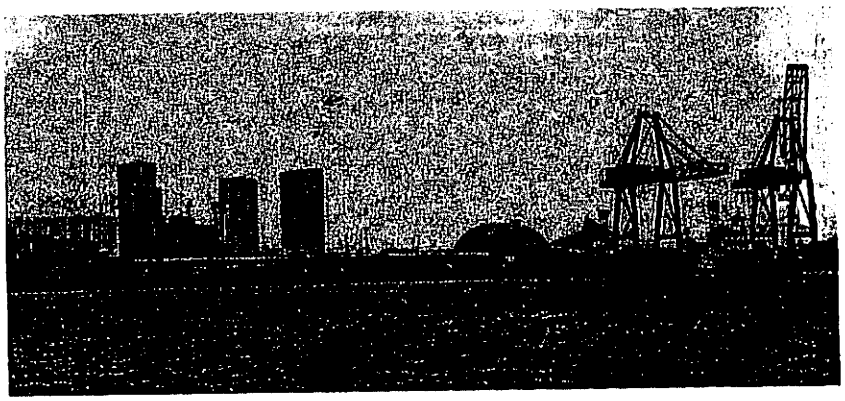
最初に神戸港めぐりの船に乗り、神戸港内を約五十分の間に一周した。

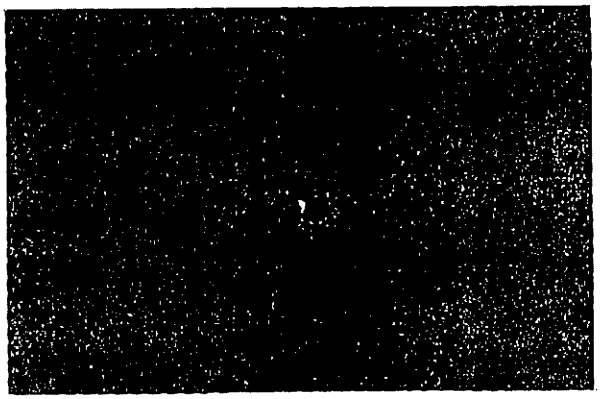
船上、何枚かの写真を撮った。出港後約半分航行した午前十一時三十分頃、ポートピアホテルを西から東に見る位置に来た時、空をバックに同ホテル周辺を写したいと思ってシャッターを切った。この時は気付かなかったのだが、後で、円盤が写っていたので驚いた次第である。引き伸ばすと着陸装置がうっすらと分かり、望遠で撮っていればもっとよく写っていたであろう。他にも何枚かの写真に白い物体が写っており、当日、神戸港上空には二、三機の円盤が飛んでいたものと思われる。

（神戸市　今西行雄）



◀下の写真の拡大。





▶ヒョウタン型UFO。上下共同一物。

遊覧船に乗って周りに停泊している船や自衛隊の潜水艦などを撮影していると、急に頭上に、見たこともない奇妙な形をした物体がフワフワと浮かんでいるのに気がついた。見たところ風船のようであった。私はまず平塚和義氏に上空の物体を知らせた。平塚氏はいつもニコン双眼鏡7×30を持っておられるので確かめてもらったところ、やはり風船だろうということであった。それでも私は「風船が飛んでいる」と一通りみんなに知らせておいた。

その後、私持参のキャノンFTボディー・一三五ミリタムロンズームレンズでのぞいてみたところ、物体が不思議な青い光に包まれたので、急いでシャッターを押した ‖写真1。約十秒後、念のため再びシャッターを切った ‖写真2。さらに私持参のニコン双眼鏡7×50で確認したが、その時は特に形状をはっきりと断定できなかった。その後もその物体は船の上空にピッタリと位置して浮かんでいた。二十分位は肉眼で確認出来る高度に浮かんでいたと思われる。

肉眼で最初に発見した時はヒョウタンのような形に見え、かなり高度は低かったようである。港めぐりが終了するのに呼応してか、物体はだんだんと上空で遠ざかった。

（堺市　南野孝夫）

光体は呼びかけに応えてくれた！

太田市上空に頻出するUFO

久保寺信一
日本GAP群馬支部代表

一九八三年十月から今年にかけて、群馬県太田市周辺の上空に、夕方から夜半にかけて頻繁にオレンジ色の無音飛行物体が出現している。目撃者はUFOの存在を全く信じていない人から毎日UFOの出現を待ちこがれている人まで、広範囲であるが、その中でも特にたびたびUFOを目撃している方をご紹介しよう。

不思議な〝力〟の作用

今井とし子さん、大島国子さん、国子さんのお嬢さんの由美子さんは共に太田市内在住で、ガソリンスタンドに勤務している。そしてもう一人亀井きよみさんを合わせた計四名の女性の方々は、UFOの目撃をきっかけにUFOへの興味が強烈となり、さらに真剣な探求精神から今年二月、四名そろって群馬支部の会員になられ、六月の群馬支部大会にもそろって参加され、ご協力いただいた。

さて、この方々の目撃事件をご紹介する前に、ちょっと一言つけ加えておこうと思う。

この一連の事件には、単なるUFOの目撃例ということ以外の、何か不思議な〝力〟の作用が感じられる。というのも目撃者の中から四名もの女性の方々が共にG・アダムスキー哲学の実践者となり、群馬支部月例会に参加して下さるようになったからである。その上、この方々に出合う数日前（一九八四年一月下旬のある日の夕方）私自身も、オレンジ色に輝いて滞空している大きなUFOを子供と一緒に目撃しているので、ますます偶然でない不思議な〝力〟の作用と尊厳な宇宙のパワーの介入を感じている。

ではなぜUFOがこの太田市上空に度々出現するのかということだが、本当のところはわからないながらも、一つ考えられることは、今井さんや大島さん達を始め、群馬支部の全員も大宇宙へ向けて宇宙的想念を発していたという事である。

瞬間的に移動したUFO

一九八三年十月十七日の夜、今井とし子さんと大島国子さんは、仕事が終わった後、同僚二人と一緒に二台の車に分乗して太田市内のある店へ食事に出かけた。その帰り、店の駐車場で車に乗る前、大島さんは月と星の出ている空を見上げて「今夜はUFOが見られるかな？」と心の中でつぶやいた。そして今井さんの運転する車に乗って十時過ぎに道を走っていた。太田市中心街より西方に位置する県立太田高校際の道の、踏切を渡ってすぐの信号の手前まで来た時、前方やや高めの位置で車のフロントガラス越しに星を大きくしたようなややオレンジがかったものを今井さんが見つけ「UFOがあそこに見える」との声に、二人は真剣に見つめた。一度光って消え、また光ってみせて消えて行った。最初よりも二度目の大きさは少し小さく見えたので、光って消えて光った時間は同じ秒数位なのに二度目のものは一度目より小さく見えたのだからかなり速い移動だったのだと大島さんは思った。二人はいつもUFOの本を読んだり話し合ったりして信じているので見せてくれたのだろうかと思っている。時間は十時十七分位だったという。大島さんは初めてUFOを目撃したが、今井さんは、仕事中今までに二度程、UFOらしいものを目撃している。しかし今度は二人一緒に目撃したのだから間違いなくUFOだったと言っていた。

二つの光体が出現

一九八三年十月二十二日午後七時五分ごろ、今井さんが、ガソリンスタンド裏の方から仕事の途中走って来て大島さんに「UFO、UFOが見える」と声をかけた。一緒にいた仕事関係の人達計四名で地下タンクのある所から東の空を見ると、星を大きくしたようなものが二つ上下にくっつき合い光って南へ動いて行った。この日は曇っていたので星は見えなかった。今井さんは昨夜明るい大きな星が輝いているけれど何だろうと思って見ているうち動きだしたのでUFOとわかったという。

ドライブで見たUFO

一九八三年十一月十三日（日曜日）、大島国子さんはお母さん、由美子さん、今井さんの四人で赤城山南面へドライブに行った。その帰り、午後六時過ぎ上鳥山の幼児園のそばの信号に近くなったころ、上空にUFOが出現した。国子さんが最初に見つけて四人が車の窓を開けて手を振る。UFOは鳥山団地の高層ビルの上の方を通り鶴生田の山の方へ向かって行く。四人は車で追いかける。鶴生田のトウコウジの方まで車で追って行く。そこで降りて手を振り見えなくなるまで立っていた。六時十五分ごろであった。

手を振ると止まった！

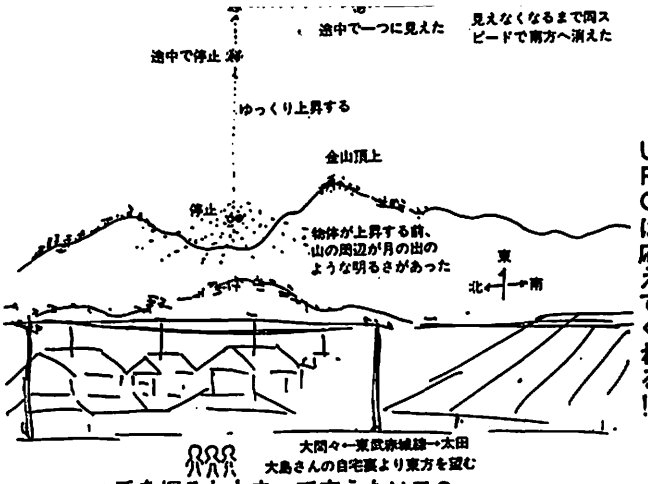
一九八三年十一月十七日午後五時半ごろ、今井さん、大島国子さんと仕事関係の人と計三名が目撃。仕事で今井さんがスタンドの裏の方へ行った時に東の空にUFOが出現。大島さんのところから東方に見える金山と呼ばれている山の頂上の北側の少しへこんでいるあたりから上昇しはじめ、大島さんと、今井さんが手を振ると、しばらく途中で停止し、その後さらに上昇し、金山のはるか上方まで

上がったあたりでまた停止した。そしてその位置から急に直角に向きを変えて、南方へ飛んで行ったという。

今まで見たUFOのうちでは、今度のが一番長くはっきりときれいに近くに見えたという。星を二つ並べたように見え、二つのものの間に空間があったように見えた。そして南へまっすぐ飛び去って行く途中で二つの物体が一つになったように見えたということだ。

あとでわかった事だが、この時、カメラで写真を二、三枚撮っているのだが、その後カメラはシャッターその他の部分が使用不能になってしまったという。中のフィルムももちろん現像してプリントしてみたがまっ黒であったという。

UFOは応えてくれる!?



▲手を振ると止まって応えたUFO。

一九八三年十一月二十二日の夕方六時十五分ごろ、東の空でUFOを見る。大島国子さん、今井さん、大島由美子さんと仕事関係者一名。今日のUFOは今までのと違っていた。形ははっきり分からないが多分回っているように見え、ある部分の所がピカピカ光っているようであった。東から南へ移動して行った。国子さんと今井さんが手を振りながら「近づいて下さい」と心で話しかけてみたら、しばらく同じ所で光りながら上下してみせてくれた。

十一月二十二日以降は空が暗くなる夕方ころからUFOが見られる。続けて毎日のときもあれば二、三日おきのときもあるが、とにかく記録しきれない程見られた。例えば小型だが星のような色や赤っぽいのや、キラキラと赤く二つ輝くUFOが東の金山上空に出たり、スタンドの上空を北東から南西に向かって飛んで行ったりする。大島さん達は、つい東の空の方ばかり見るのでその方へ出てくれるのかも知れないと言っていた。

丸い銀色のUFO

今年（一九八四年）に入ってからも大島さん達はUFOの目撃を数多くしているそうだが、特にその中で午前中に目撃した日があった。

一九八四年一月十七日朝九時二十分ごろ、大島国子さんはスタンドの裏で仕事中、ふと空を見上げると、今度は西の上空に銀色に光る物体を発見した。すぐUFOと思い、仕事を中断して見ていたが、じきに消えてしまった。形はマリのように丸くて、かなり上空だったのだろうか小さかったそうで、ちょうどステンレスをきれいに磨いたように光った銀色であった。大島さんは、いつも昼間のUFOを一度は見たいと前々から思っていたのがついに実現し、大変うれしそうであった。

その後も目撃が続いているそうであるが、記録はしていないということである。今度は是非、UFOに乗って来る異星人の方々と、お会い出来るものならお会いしたいと（秘かに）願っているようであった。

以上で大島さん達の目撃談の報告を終わる。私は彼女達と同じ太田市に住んでいながら、日常の雑多な物事に追われ、あまり上空を見る機会もなかったのだが、先日大きなUFOを目撃したのでご紹介しよう。

オレンジ色の円盤を父子で見る

一九八四年一月下旬の午後七時半ごろ、太田市の西を太田市内へ向けて車を走らせているうちに、助手席に乗っていた子供が、急にフロントガラス越しに目をやり騒ぎ出した。私は不思議に思い、フロントガラス越しに左上方を見ると、月を少し小さくしたような物体がオレンジ色に輝きながら静かに浮いていた。すぐ道路際へ車を寄せて子供二人と車から降りてその物体を三、四分見ていた。子供は「どうして他の車の運転手さんは気が付かないのかね」と言うので、それもそうだと思い、走っている車を見てみるが、確かに何の事もなく走り去って行く。

冬の七時半はまっ暗で、空には星も月も出ていない曇り空だった。その物体のオレンジ色の輝きは、静かな落ち着いた光に見え、あまり高くない位置に帯状しているようだった。その後物体の下まで車を進めようと三人で車に乗り込んでスタートするのと同時に、そのオレンジ色の物体も急に動きだし、東南の方向へ飛び去ってしまった。

支部大会の日にUFOが……

その後群馬支部大会が無事終了した六月十二日の午後八時前後、私は仕事で埼玉県熊谷市からバイパスを車で運転していたときにUFOを発見した。私は支部会員に知らせようと車から降りて電話ボックスを探したが、近くにないので一人で立ち止まって見ていた。数日後大島さん達からの連絡でわかったのだが、この日同時刻ごろに大島さんと今井さんも太田市上空から埼玉県方面（北東から南西にかけて）へゆっくりと音もなくあまり高くなくオレンジ色のUFOが飛び去るのを目撃していたという。

以上で目撃談は終わる。これらの目撃談がGAP会員の方々に何かの参考になればと思う。そして高度に進化したスペース・ピープルから力強い激励の想念を必ず得られるものと信じて、これからも支部会員一同、宇宙的に前進したいと思う次第である。

知事の義務の実践

私は昭和三十八年に建設業ににわか土木屋として勤めるようになって以来、熱海道路工事を皮切りに多くの工事に従事してきましたが、石炭堀りと土木屋とでは、似たような技術屋とは言ってもトンネル工事以外は共通するものがなく、チンプンカンプンでした。ですから簡単な仕事をやりながら、土木の勉強をして、四十三年頃大桑野で日立のコンピュータ工場の敷地造成を独力でやったのがどうやら土木屋らしい仕事の初体験でした。ここでは管理もうまく行って二億位の工事を一年でやって三千万位の黒字を計上し上首尾でした。

苦難の転勤

ところがこの工事をあらかた終わった四月頃支店に呼ばれ、土木部長から札幌転勤を打診され、あっと驚く為五郎の仕儀と相成りました。一、二相談しましたが行くしかあるまいということでした。何より決定的だったのは、その前に提出させられた自主申告に、札幌なら転勤してもよいと記入していたことでした。私はそう書いたことをすっかり忘れていたのですが、そうと気付けばもはや拒否する理由はありません。

札幌に着任したらこれがまた大変で札幌地域暖房の工事をやるから工務主任をやれということになってしまいました。工事は四つ五つ従事してきましたが、まだまるきりの素人土木屋、工務主任が何をやるのかさえわからず、いやわからないことさえわからなくて辞令を出されてしまったのですから大変です。工務主任代理という男は数年前から準備し勉強してきた人で自分が主任と思っていた所へ訳のわからん奴が来て主任ときたからさあ大変です。下請けの状況も知らず資材のことも得意先のことも全く知らないのに意地悪く対抗的な奴に出会ったのが運のつき、たちまちにして転勤ノイローゼとなってしまいました。

不思議な夢

そんな状態の中で、十月のある日東京から何とかいう新興宗教が布教に来たという電柱広告がふと目につきました。溺れる者のわらをもつかむ心境だったと思います。私は早速その会に出向き入会の手続きをしたのですが、教祖の奥様という人が面接して言うには「あなたは入れられない。あなたは心から教祖を信じて信仰の道に入る人ではない」というのです。私は確かにその一面はあると内心思いましたが、是非にとお願いして、ようやく入信を許されました。

今はもう信者として何をやったか大方は忘れてしまいましたが、一つだけ忘れられないことがあります。

この教団では、夜寝る前に飲むようにと言って「せんぶり」をくれます。せんぶりをご存知ない方が多いと思いますが、山野に自生する野菊を細かくしたような小さな黄色い花の咲く薬草で、これを干したものを煎じて飲むとものすごく苦い、真っ黄色の煎じ薬で、胃の薬として昔は有名でした。これと何かもう一種混じっているのを少量たれて飲むのですが、宗教の儀式ですから心を静め邪念雑念を払い、せんぶりで仕上げをするような気持ちで、敬虔な心持ちで床につくようになることが出来たのは確かでした。

せんぶりを飲んで寝るようになって二日目か三日目だったと思います。非常に心が静まり、肉体も精神も充分にリラックスして最上の敬虔さをもって眠ったのですが、その夜夢をみました。その夢は次のようなものです。

まず最初私の正面の左手に石積みの堀か運河のようなものがあります。この中には舟が六そう浮かんでいて、私は源義経の壇の浦八そう飛びのようにこれを足場にしてこの河を何回か飛び渡り、八回目に向こう岸から一気に飛んでこちらの岸へ帰ってきました。運河を飛ぶときは段々右手に移るように斜めに飛び、向こう岸には柳の木など青々と繁っていました。それからしばらく小屋に入ってじっとしていたりしたようですが今は記憶も薄れました。それからそこを出て右手へちょっと歩くと鳥居がありお宮のようなものが奥の植え込みの間に見えました。私はためらうことなしにそこに入って行きましたが、ここでは人を見たような記憶はありません。非常に立派な社殿と庭園がありましたが、何事も起こらず、間もなく出てきて同じ道をさらに右に歩いて行くとまた鳥居がありました。前のに比べると小さくあいまいで、宮や庭もあったようですが、たたずまいも記憶も貧弱です。ここにも入って行きましたが間もなく出てさらに歩いて行きますと河があり、二つほど橋を渡ったようですが、あいまいです。記憶が鮮明なのはこのあとです。

気がつくといつか山に登っていました。山道を歩いているのではなく低い庭木風の松の木の生えている黄色っぽい粘土質の土の急勾配の山肌をかなり苦労して、娘や息子達と一緒に登っていました。松の木や草の葉につかまりながら登っているうちに子供達はだんだん居なくなって自分の道を歩いて行ったなと思い、なおも登ると突然林が切れて頂上らしい所に出ました。家内だけ一緒でした。頂上と思った所は見渡すと大平原でした。草地を少し行くと道に出ました。やれやれといった感じで背負っていた笈を降ろし道の真ん中で開いてみると、こぶしほどの大きさの宝石の原石の赤いのと緑色のと、もう一つ石ころのような色合いのものが、大きな昔風掛け時計形の箱の底に入っていました。きらきら輝いている訳でもなく何となくわびしい気持ちがして、家内と二人で「俺達の人生の成果はこれだけか、でもまあ宝石もあることだし、まあまあだろう」と話し合いました。それから立ち上がって前方を見渡しました。平

らな土地が無限に続き私の立っている道は向こうへ行くに従って大きくなり真っすぐどこまでも続いているように見えました。周囲は草原のようでもあり茨畑のようでもあり農地のようでもあり、はるか遠くには寺院の屋根や森がかすんで小さく望見され、笈箱はその場に忘れ去って、この道を歩いて行くんだなあと、白っぽい青空をながめたところで夢は終わりでした。

さてこの夢が予知夢である所以を説明します。お堀ふうの運河を計八回飛んだのは、転勤赴任と帰郷のために津軽海峡を渡った回数と一致します。導入部のこの部分があってこそ後にこれが予知夢であることに気付くことになった訳です。八回目をこちら側に飛び移って後しばらく小屋にうずくまっていたのはノイローゼ治療のため帰郷後、数週間入院していたことを示しています。鳥居とお宮さん二つは札幌で入信し横浜に帰ってからも数回訪れた神霊教と、そこをやめて後、さらに勧誘されて入信した新興宗教の何とかいうのと二つを示しています。前の方は五、六回、後のは一回か二回訪れましたがいずれも既に覚めた気持ちで分析的でした。そのあと夢の中で二本の橋が出ましたが、これは国道一号線の多摩大橋と東名高速道路の上に架けた綾瀬陸橋のことと考えられます。多摩大橋の修繕工事は十二月から二月までの夜間専門の工事で零下七度位まで下がる夜が多く苦しい工事でしたが、精神の回復と人間関係の意識の修復に役立ったようでした。両橋の工事とも非常に奉仕的意味合いの強い工事という印象が残っています。よい人間関係があったのは幸せでした。

夢の中で山をよじ登る苦労の意味は会社の中で、あるいは社会的なことでの苦労の象徴であろうと思います。札幌転勤前までは本当の土木屋ではなくても充分役に立つ仕事をしており、各工事で大きな黒字の原動力となるようなところもあったのですから、まあ大体順調な勤めぶりだったと言えると思います。しかし札幌支店から横浜支店に出戻りで帰ったとき、部長からどうして一年もたたずに帰ってきたんだねと尋ねられ、そのときの私の返事は「どうもお役に立ちませんで」というものでした。部長は驚いて再度尋ねましたが私は同じ返事をくり返しただけでした。部長はそれで初めて「何だ？帰されてきたのか」と気がついたように言ったのですが、このやり取りが勤め人の運命の岐路を形成することは勤めている人であればおわかりと思います。早い話が私は自ら出世の道を閉鎖してしまったのです。意識がそうさせたのであろうと思います。その後つらい気持ちで思い出すこともありましたが何となく我が道らしくて納得のできる安らかさはありました。

実は札幌から横浜に帰ることになったのは夢をみた日から何日か経った十月末のある日、部長に呼ばれて次のような話を聞いた結果でした。

「私は札幌に単身赴任してきて五年余りになる。子供の学校や家のこと親の事などでどうしても同伴ということが出来ずに過ごしてきたが、こんな生活は自分にも家族にもつらいことばかりだ。つらすぎるよ。君も同じ状況のようだが、私のつらい経験を君は味わわない方がいい。帰る気があるなら横浜に帰れるようにしてやるがどうだね」「お願いします。帰して下さい」ということで即日決定、十一月五日に帰ってしまったのでした。

横浜に帰って後は逆に役職に就くこともなく平社員のままで停年まで来てしまいました。しかしそこの職場で、苦労はありながらも、子供達も大学を終え、今は一人前に世間の役に立つ人間にまでは育ってくれました。横浜支店に帰ってから停年までの十年間は多くの人々に助けられ支えられ、また助け支えながらそう悪くない十年間だったと思っております。ですから夢の中の山登りは象徴として当を得ていると思います。そして頂上にたどりついたときの喜びと楽しみを味わえば苦労の意味も一層意義あるものと思えてくるというものでしょう。

そして夢の中で草地を歩いて自然に大通りに出たのも、笈箱をかついでいたことも、大きい箱に二、三個の宝石や石ころが入っていたこともそれが赤や緑であったことも輝きがなかったことの意味も宇宙哲学を学びはじめて五年目の今、だんだん明らかにその意味を悟りつつあります。末広がりの大通りの意味も、白っぽい青空も周りの茨畑も、アダムスキーに教わった今となっては説明の要もない程明白な事実を示しています。

自分は今、どこにいるのか

もはや前途に登らねばならぬ山もなく、人生の成果などというものにも心をとらわれず、平らな土地を非抵抗の状態で大通りの上を進んで行きさえすればよいのです。

私はいつも自問していることが一つあります。現実の私は夢の中のどこにいるかということです。頂上に出たばかりで草原の中を歩いているのか、笈を降ろしたのか宝石を見て家内と話しているのか、それとも立ち上がって未来を展望しているのか、はたまた大通りを歩きはじめているのか、茨畑に転げ込んではいなかろうか、などと常に自問自答するのです。

夢の中にはムダや偶然はありませんでした。そして夢の実現である現実の現象にも偶然はないように思えます。夢は意識的意識で神の計画でもある訳ですから現実の現象がその通りに実現するのは当然なことです。

ですから私は非個人的な状態、非抵抗の状態になるよう自我の滅却を心がけて心を弛緩させ意識の印象に心眼を澄ませて敏感に反応できるよう心がけたいと思います。

以上の通り十五年前の予知夢はいまだに私の方向を示しており、それは無限につづく道であることも自覚しています。

宇宙の意識は必要とあれば新興宗教であろうと会社であろうと工事でも仕事でも旅行でも不運でも苦労でも何でも利用して覚醒への道を示し人を活動させ表現の一歩一歩を現象化してゆきます。

人は純粋無垢に非個人であればいいのだと夢は啓示してくれたのでしょう。

■宇宙哲学解説講座(6)■

テレパシー開発基礎トレーニング

―宇宙的フィーリングを起こす方法―

〈日本GAP会長〉
久保田八郎

テレパシーや透視力の開発は容易ではないとよく言われています。一般的にはたしかにそのとおりで、この開発は生涯の仕事だといえるでしょうが、しかしこの世をおさらばする頃になってこんな能力が出てきても何にもなりませんので、やはり急務を要することと考えてトレーニングに励むことが大切です。五年や十年はアッというまに過ぎるからです。

このトレーニングについてはアダムスキーの『テレパシー開発法』や『生命の科学』に詳述してありますから、それを反覆熟読して実践すればよいのですが、なかなか思うようにゆかないという人も多いようです。

そこで今回は理論的な記述を避けて、なるべく具体的な方法を平易に述べることにしましょう。

感情の抑制が重要な基礎

アダムスキーの『金星旅行記』(アダムスキー全集第3巻『UFOとアダムスキー』)に「地球人は感情を支配することなく……」という部分があり、この箇所は要するに「地球人は感情を支配できないので、カッとなると何をしでかすかわからない」という意味になるらしいと訳注がつけてあります(同書19頁)。

この感情の抑制または支配が全くといってよいほど地球人には不可能なので、これを抑制して長続きさせる方法を考えるために、現在、地球へ来ているスペース・ピープルの一グループがあります。

「人間は感情の動物だ」と言われるほどに一般地球人は喜怒哀楽の感情に振りまわされて生きており、それを当然のことのように思っています。そしてひどい分裂感情を起こす人のもとでトラブルの渦中に巻き込まれて、互いに悲鳴を上げながら暮らしている例は少なくありません。

このように感情の抑制ができないのは地球人だけの特長だといわれており、そのために家庭、職場その他で軋轢や不和の絶えまがないという現状です。どうやら宇宙哲学的に言えば、感情の抑制のできる人ほど成熟した宇宙的な人で、抑制のできない人ほど未熟であるということになるようです。

感情というものは肉体の属性ですから完全に除去することはできません。ただそれが激烈にならないように抑制すればよいのです。そして常に楽しい感情、愉快な、喜びに満ちた感情を保つようにすることがテレパシー開発の基本条件です。なぜなら怒り、憎悪などの不和を伴う分裂感情は、テレパシックな印象感受の妨げになるからです。したがってテレパシー開発には何といっても感情を支配できるようになることが先決問題です。

そこで感情支配の方法ですが、これにはいろいろあって、各人の理解度に応じて方法を考案すればよいのですけれども、ざっと例をあげますと次のとおりです。

(1)地球儀を見つめて宇宙的なフィーリングを起こすこと。

私たちが自分自身の環境の中にあって、ときに、はなはだしく主観的になり、ある人物の言動、または事物を絶対視して、それに束縛されてもがき苦しむのは、自分の意識(いわゆる普通に言う意識)が、自分の狭い環境から一歩も外へ出ておらず、その環境だけが本人の〝宇宙〟になってしまっているからです。その環境をかりに職場だとしますと、言いかえれば、本人の念頭には職場しかないということになります。つまり職場以外の世界にたいして盲目的になっているのです。しかし本当の宇宙の広大さを知るならば、地球上の自分の職場などはシミの一点ほどの領域でもないことがわかるでしょう。

これにはスペース・シャトルのような宇宙船に乗って大気圏外に飛び出て、遠い宇宙空間から地球をながめるとよいでしょう。すると小さな地球の表面に四十五億の人間がひしめいて、いがみ合いや殺し合いをやっている実状を憐れみの目で見るようになり、急速に気宇広大になって、荒れ狂っていた感情の波は静まり、大宇宙の神秘に限りない畏敬の念が起こるでしょう。初めて月面に降り立ったアポロ宇宙飛行士たちが、帰還後は形而上的な思想の持主になったのも宜なるかなです。

ところで、だれもがスペース・シャトルに乗れるわけではないために、宇宙飛行は不可能だと速断するのは早計です。そこは頭をひねって、地球儀を見つめればよいのです。これを本物の地球にみたてて、自分がいま宇宙空間から遥かなるホーム惑星をながめているのだというフィーリングを起こすことは可能です。このようなフィーリングが起こせるからこそ人間は万物の霊長なのですから、これを応用しないという手はありません。

筆者の机上には径十五センチの地球儀が一個置いてあり、常時これを凝視することによって感情は和らぎ、心の安らぎを覚えて、夢は枯野どころか大宇宙空間を果てしなくかけめぐるのです。

この地球儀はむかし息子が小学生の頃使っていたもので、記入してある国名や地名は現在と異なる部分が多いのですが、それは問題ではありません。球体の表面

に地図が描いてあればよいのです。

地球儀を見つめるとはバカらしいと思う人は、何をやっても宇宙的フィーリングは起こせないでしょう。想像力に欠けるからです。想像力すなわちイメージを描く力は望ましい物事を実現させるための最強力な武器なのです。だからGAPでは物事を実現させるのにミラクル・ワードやイメージ法を応用して素晴らしい効果を上げているのです。

凝視トレーニング用の地球儀は大きいものよりも小さいものがよいようです。

精神的トレーニングが必要

以上の他に感情抑制の手段として、自然界の星空、広大な海、美しい草花などを見つめる方法もあります。対象が何であれ、要は自分と万物や大宇宙とが一体であるというフィーリングが起こればよいのであって、一つの物に限定する必要はありません。

音楽を聴けばよいという人もあります。たしかに音楽は人間の心を高揚させて、リファインされた感覚を起こさせますが、これには限度があって、究極的に大宇宙との一体感に至らないことは私の体験でわかっています。少年時代からの音楽狂としてブルックナーやマーラーの壮大な交響曲を愛好した私ですが、現在はクラシック音楽から離れて、たまに世界の民族音楽やロックなどを聴く程度です。

宇宙的フィーリングを起こすには、やはり何らかの精神的トレーニングを行う必要があります。これをやらないで官感の刺激だけを求めても真に宇宙的に昇華することはあり得ません。ましてテレパシーや透視力のごとき宇宙的能力の開発には四官（視覚、聴覚、嗅覚、味覚）をコントロールして調和させることが重要ですから、音楽どころか、地球儀を見つめることも厳密に言えば初歩的段階です。これは基本的な感情の抑制の手段にすぎません。

(2)自分を客観視すること。

地球儀を見つめるのは宇宙空間の彼方にいる自分を想定して、いわば宇宙の広がりを意識するためですが、さらに自分の惑星を客観視するためのトレーニングでもあります。なぜこれが必要かといいますと、人間は自分自身を客観視する能力がないと、心を使いすぎて、テレパシックな印象の感受がむつかしくなるからです。このことはアダムスキーの『テレパシー開発法』の中でも次のように述べてあります。

「自然な、無我のリラクセーションの状態にある人体はあらゆる波動を感受します」。これは要するに、非個人的な状態になることを意味するものです。この、〝非個人的な状態〟というのが、言葉の上で簡単に表現できても実際は大変むつかしくて、地球に生きている限りこのフィーリングを起こすことは不可能だとさえ思えるほどですが、しかし良い方法があって適切なトレーニングを実行すれば、けっして不可能ではないということが昨年の春すぎ頃からわかってきたのです。そのひとつとして、自分で自分自身を客観視する方法があります。

およそ人間がエゴのかたまりと化している場合、これを仔細に分析すれば本人は外界にたいして盲目になった状態であると同時に、自分自身にたいしても盲目になっているのです。言いかえれば、ワレを忘れた状態で、自分の態度がどのようなものかを考える力を完全に失っています。つまり自分自身を客観視することができなくなったのです。

これはエゴの強い人の特長であって、金銭欲や権力欲の強い人の対他的態度を見ればわかります。もちろん、このような人にテレパシックな宇宙的能力などあろうはずはありません。

そこで自分自身を非個人化する、つまりエゴをなくした状態にするには、何といってもまず自分の態度を自分で知る必要があります。そのために自分自身を客観視するクセをつけて、その技術を高めてゆくのです。言いかえれば、職場で仕事をしている自分の姿を、数メートル離れた位置から〝もう一人の自分〟が見つめているというフィーリングを起こすのです。これはエゴを強めてムキになるのを防ぐ非常に有効な方法です。もっと具体的にはビデオカメラを職場に仕掛けておいて、終日自分の顔に現れる感情をビデオテープに克明に録画しておき、夜それを再生してみるとよいのですが、それは不可能ですから、せめてフィーリングとイメージする力により自分を客観視するだけでも絶大な効果があります。

なぜなら、この自己客観視は自分の内部にわき起こる想念や印象を客観的に観察する能力を高めることになるからです。印象を観察することがテレパシー受信の基本ですから、そのためにはとにかく客観視するクセをつけねばなりません。これに慣れてくると、内部の意識から来る印象に的確に気づくようになり、いわゆるテレパシックな受信能力が出てくるのです。

以上を要約しますと、まず地球（実際は地球儀）を客観視し、次に日本を、次に自分の環境を、次に自分自身を、次に自分の内部の想念をというふうに、微視的になってゆくのです。

自分で自分の想念の観察などできるはずはないとか、想念観察をやれば気違いになるだの、いろいろなことが言われましたが、これはすべて誤りです。心理学の初期におけるヴントらの内観法は、何のことはない一種の想念観察です。また気違い説も間違っています。あまりに自分の想念にこだわる人が軽度の精神分裂症になるだけで、これは一般人によく見られる現象です。思いつめて気が狂ったというのがそれです。

私たちが行う想念観察はもっと宇宙的なもので、しかもリラックスすることの重要性を『テレパシー開発法』で知っていますから、思いつめるようなことはしません。またそういうやり方は誤りです。要は自分の内部にわき起こる想念や印象を、あたかもメーター上の針の動きを見るかのように気楽に客観的に見るのです。この技術を身につけないとテレパシー能力の開発は無理でしょう。

(3)大宇宙との一体感を高揚させること。

以上がテレパシー開発の基礎的段階のトレーニングですが、宇宙的フィーリングを高めるのに最重要なのは、大宇宙との一体感の高揚です。つまり、「私とは宇宙であり、宇宙とは私である。私が歩くときは宇宙も歩き、私が考えるときは宇宙も考える」というほどの深遠雄大な思想とフィーリングを持つことが大切です。

こうしたフィーリングを起こすのに観念的、抽象的言辞による思考だけではだめで、とにかく文句なしに全身でもって「そのように感じる」という状態になるまで意識を高め拡張する必要があります。そうすれば大宇宙に遍満する宇宙の意識との一体感が起こり、万物と自分を生かしている宇宙の意識を実感できるようになるのです。宇宙の意識なるものについて詳細を知りたい方は、アダムスキー全集第6巻の『生命の科学』をお読み下さい。徹底的に詳しく書いてあります。またテレパシーと透視の開発に関する具体的なトレーニングの方法も同書に詳述してありますが、第5巻『テレパシー開発法』はその専門書です。この道でこれ以上にすぐれた本は他にありません。

この記事は、まだアダムスキーの宇宙的哲学にさほどくわしくなく、右の二書の内容に充分親しんでいない人のために、宇宙的フィーリングを起こす基礎的なトレーニング法として、去る十二月八日の東京月例会で受けた質問の回答をもとに書いたものです。紙数の都合で詳細に説明できませんが、根本的にはアダムスキーの名著『宇宙哲学』『テレパシー開発法』『生命の科学』を反覆熟読することが大切です。この三冊をお読みになれば過去の歴史において、いかなる哲学者や宗教家も説き得なかった宇宙の真理と法則が判然とするでしょう。

アダムスキー哲学は人生の最強力な武器

アダムスキーの宇宙的哲学は単なるキレイ事であって、現実の生活には何の役にも立たないものだと言う人もありますが、これはアダムスキー哲学を百パーセント理解していないどころか、テレパシーや透視力開発の意義を全く知らない人の批判です。現実の生活で人間が苦しむのは、まさにこれらの能力を持たないからなのであって、心だけで判断し思考するために苦しむのです。

悪質な人にニセ手形をつかまされ、事業が破綻して一家心中したり、他人の仕掛けたワナにはめられたりするのは、他人の心が読み取れないからです。その他、家族、職場などの対人関係で摩擦が生じてトラブルの絶えまがないのも、他人が理解できないからで、これは他人の想念が感知できない結果です。アダムスキー哲学は現実の生活に関係ないどころか、これを生かせば素晴らしい人生が展開するのであって、そのように実践している人が日本GAP会員中に少なからずいます。

したがって地球の難儀な社会を生き続けるのに最有力な武器は知力よりも内部の宇宙の意識から伝えられるテレパシックな印象の感受力なのであり、これが人間を安全に生かす最後的な力です。

しかし現段階の地球社会で、まだこのことに気づいている人はほとんどいません。それどころかテレパシーや透視力のごとき〝超能力〟はごく少数の特殊な人だけが持つ能力だと思い、自分にそんな能力はないと思い込んでいます。そう思い込んでいる限り、そのような力は出てきません。こうして人間社会には疑心や不信が渦巻いています。偉大な文明を持つ他の惑星のように、あらゆる人間がテレパシックになれば、不信という状態は消滅しますから、天国のような社会が出現するでしょうが、これはまだ当分先のことです。せめて私たちは苦難に満ちたこの世界を生き抜き、さらに困っている人を助けるためにも、テレパシックな宇宙的人間になることが必要です。

二十一世紀はテレパシー時代か

テレパシーや透視の能力はあらゆる人間に内在しているのに、一般人はそのことに気づかず、眠らせているのだとアダムスキーは言っています。したがって適当なトレーニングを実践すれば、だれでも大なり小なり開発できますから、関心のある方はまじめに考えて、意欲を大にして研さんしてみて下さい。一人で研究や練習をするのもよいのですが、できれば同好の士か気心の合った人同士で、テレパシーによる送受信の簡単な練習を始めるとよいでしょう。樹木を見つめたり水面を見つめたりして対象物が放つ波動を感じる練習法も『テレパシー開発法』に述べてあります。

テレパシーの開発は人間の発達の程度に応じて差があるでしょうが、私見ながら一般人が考えているほどに困難なものではなく、あるちょっとしたコツをつかめば、それが糸口となって、あとは比較的楽に能力が上昇するもののようです。このコツというのは言葉で表現するのがむつかしく、各自が肌で体得するよりほか仕方がありませんが、そのコツをつかむまでがホネでしょう。説教じみて恐縮ですが、とにかく忍耐強く練習を続けるに限ります。中断すると元に戻ります。

以上でおわかりのように、アダムスキーの宇宙的哲学は西洋哲学のように思惟的なものではなく、人間を超高感度な受信機に仕立て上げるフィーリング主体の哲学です。哲学というよりは波動感知法といってよいでしょう。したがって学問の世界ではまだ認められていませんが、米ソでは電波通信に限界を認めて、軍事目的でテレパシーを応用していると伝えられていますから、一部の科学者が研究していることは確かです。

地球の二十一世紀後半はおそらくテレパシー時代に入るでしょう。人間や物質の意識の問題が浮上してくる可能性があるからです。私たちは一世紀先行しているのかもしれません。したがって障壁もありますが、ひとたびテレパシー能力を開発すれば、その利点は図り知れないものがあります。そしてスペース・ピープルとコンタクトを望む人もテレパシー能力を持つことが必須です。

イスラエル＝スイスの旅の思い出

（原稿到着順）

(2)

イエスが歩いた石段に感動

神戸市　今西正子

オリーブ山に着き、谷を隔てて、まず城壁・岩のドーム・聖墳墓教会が目に映りました。次に、あの鶏鳴教会はどこだろうと見回すと、左へ離れた所にそれらしい教会が見えました。去年も参加した弟に聞くと、やはりそれでした。景色を一望しながら、ああ、ここはエルサレムなんだ。今私はエルサレムの地に居るのだという実感を噛みしめました。今から始まるんだ。どんな所だろう。そこで何かを感じ取れるだろうかという思いで心が高ぶりました。

小学校六年の時、図書室で初めて聖書に関する本を読んで以来、何故イエス・キリストが現れたのだろうか、生まれ、そして活動した土地はどんな所だろうかと、気にかかるようになりました。そこに本当に来れるとは夢にも思いませんでした。

心に残る事ばかりでしたが、特に弟子達と共に、また、両手を縛られたまま昇られたという鶏鳴教会の石段は、イエス・キリストが直接足を触れられた所だけに、印象の強いものでした。イエス・キリストの足跡に自分の足を重ねられるかもしれないという気持ちで、一歩一歩踏みしめました。きっとどこかで交差するにちがいないという思いで、幾度か上り下りしました。

また、ペテロの召命教会のあるガリラヤ湖畔での眺めはなつかしく思われてしかたがありませんでした。その場を離れがたい思いで去りました。

死海での海水浴やスイスの山々も楽しい思い出になりました。

今回の旅行に参加できる機会に恵まれたことを心から感謝しています。もう一度エルサレムに行けたらと思っています。

進歩への新たなる決意

神戸市　今西行雄

昨年テルアビブを去る時「必ず戻って来る」と呟きました。そして今年再びこの旅行に参加させて頂きましたことに感謝します。また、この旅行を企画された久保田先生、田中氏、ガイドをして下さった榊原先生、運転手の方、参加された方々に心よりお礼を申し上げます。

今年も大変貴重な経験をしましたが、特に良かったのは鶏鳴教会の横にある石段で長い時間を過ごせた事です。この石段を二千年前にイエスが歩かれたそうで、私はこの石段を五、六回上り下りしました。私のそばをイエスが歩いておられる姿を想い浮かべた時は、歴史の断片に触れる思いでした。

もう一つ忘れられないのは、エルサレムで誕生日を迎えた事です。エルサレム最後の晩餐で誕生日を祝福して頂ける栄誉を与えられたのはGAP会員の中でも私一人でしょう。

イスラエルを去ってスイスのグリンデンヴァルトに到着したのは夕方の五時頃でした。ホテルの窓から見上げた山が映画「十戒」のシナイ山に似ている様に思われました。

その夜、私の部屋で十三名の方々が集まり、二次会を開きました。久保田先生のお話の際中に、円盤が輝く光体として出現しました。それは丁度夕方シナイ山を連想した山麓あたりでした。私は感激の余り手を振っていました。

この夜の久保田先生のお話で深く印象に残っているのは、「イエスは確かに偉大な方であり、金星は太陽系で一番進歩した惑星だ。だが、これらを絶対視してはいけない。太陽系の外には、もっともっと進歩した方々が住んでいるかもしれないような惑星の在る事を認識しなければいけない」という様な主旨の話でした。宇宙的進歩の道ははるかに遠い。あせらず地道に進んで行く事を強く心に誓いました。

参加することに意義がある

東京　橋本由紀子

この度は素晴らしい旅行に参加させていただきありがとうございました。背後に働くパワーのおかげで、地球に偉大な足跡を残したスペース・ブラザー、イエスが活動した地を自分の足で踏み締めることができました。今、エルサレムやガリラヤ湖畔で目にした遺跡や風景などを思い返すと、懐かしく愛しいような感じがします。この様な気持ちは、たとえ過去にこの地にかかわりを持っていなくともアダムスキー哲学に共鳴しイエスの真の意志を引きつごうとしている人ならば誰でも感じるのではないかと思います。

私はピア・ドロローサを歩いたイエスの姿を想像する度に、偉大な犠牲を払ってくれた彼の愛に応えられる力が微力な自分にもしあるならば精一杯やりたいと思っていたものでしたが、実際のその場所ではスペース・ブラザーとしての彼を、ついに感じることはできませんでした。私の眼には彼を祭り上げるため建てたものばかりが映りました。それぞれの思いを抱き世界の各地から巡礼にやって来る人々、一体このうちの何人が彼の真意を受けとめているでしょうか？

イスラエル、スイスと様々な印象や感銘を受けることができましたが、私にとり最も貴重だったのは〝GAPの人々と旅をした〟という体験だと思います。皆さんとの旅は調和のとれた美しいメロディーの中にいる様でした。出会う事のできた人々の真剣さ・純粋さ・力強さなどは、しっかりと心に刻まれ、大きな糧となりました。

久保田先生、田中さん、榊原先生、GAPの23人の皆さん、素晴らしい十日間をありがとうございました。

美しいエルサレムの町

沖縄市　宮城　裕

昨年の第一次エルサレムの旅行の記事を見たとき、行きたいという強い衝動が起きたのだが、様々なことで参加する機会をのがしてしまいましたが、今回は何

かに後押しされるように旅行の準備もスムーズにいき参加することができ喜んでいました。

エルサレムでは石造りの美しい新旧市街地やオリーブ並木などはすばらしい眺めでした。また特に印象深かったゲッセマネの庭園・オリーブ山上の主の祈り教会などイエスの深い思いが伝わってくるような気持ちでした。当時のままの遺跡が少なく、後世の様々な建造物やまた雑踏の中でイエスの時代に意識の焦点を合わせてくれるかのようにガイドの榊原先生の聖書からの言葉の引用または歴史的な説明などはとても心に残っております。さらに静かなガリラヤ湖・山上の垂訓教会・ナザレの町など見て回り、イエスが宇宙の創造主の意志を表現し宇宙の法則を人々に伝え、それらに従って生きることを示されたことに非常に感動し、わずかなりとも自分もそれができればと思っております。

スイスでは豊かな自然とその雄大さ美しさに感銘してしまいました。これらの旅行から得た体験はゆっくりと、しかも着実に私自身のこれからの考え方・生き方に影響を与えていくと思います。

最後にこのようなよき旅行を企画なされました久保田先生・田中様・榊原先生・同室の安達様・旅行に参加なされた方々に感謝いたします。

宇宙的な旅行であった

山形県　柴田光明

今回もエルサレム宇宙考古学の旅に行くことができるとは思ってもみませんでした。それが実現できて、しかも夫婦で参加できたことは私にとって、とても嬉しいことです。そしてこのことは何か意義のある価値のあることであると思っています。

昨年と同じガイドさんでイスラエルの旧跡に詳しい榊原氏に再会できて、とても宇宙的な旅であったと思いました。昨年よりもエルサレムでの宿泊が一泊少なかったのですが、それでも鶏鳴教会など重要な場所はゆっくりと見ることができて、よかったと思っています。そしてゲッセマネの庭園や鶏鳴教会付近の石段はとても明るく暖かいフィーリングに満ちていたように感じました。とてもこの場所を離れるのが名残りおしかったのですが……。そしてこのことは、進歩という学習の過程の中で意識という実体が転世することを改めて認識させられるような感じでした。エルサレムなど滞在中は本当の実家?に帰ったようなとても懐かしい感じでした。去年と同じ場所を訪れたのですが、昨年とは何か違った感じがしました。何度訪れても素晴らしい所であるという気持ちでした。イエス関係の遺跡を透視しながら歩いたり、また意識の目でもって何か印象を感じたりすることが大切であると思いました。

旅行中はずっと上空のどこからかスペースブラザーズが私達を見守っていたような感じでとても素晴らしい旅行でした。

このような価値ある旅行を企画して下さった田中氏及び久保田会長に心から感謝致します。

ふるさとに帰ったような気持

山形県　柴田文子

エルサレム旅行から帰って来てもう三週間にもなるのですが、その間ずっと私の意識はまだエルサレムにいるような気がしてなりません。

エルサレムに行くことは私にとってイエスを知った子供の頃からの夢でした。その夢を信念とイメージの力で実現させることができました。

エルサレムに着いた時は「ああ、この地はイエスが活動した場所であり、スペース・プログラムが行われた場所なんだ」と思うと胸が熱くなってきましたが、不思議と外国に来たのだという気が全く起こらず、むしろやっと心のふるさとに帰ったような安心感、なつかしさを感じました。

イエスに関する遺跡はそのどれもが素晴らしく、毎日が感動の連続でした。どの遺跡を見てもイエスの高貴な波動を全身に感じることができました。なぜか、振り向くと後ろに、両腕を広げ限りなく深い愛のまなざしをしたイエスが立っているような気がして、旅行中何度も何度も後ろを振り返りました。

ガリラヤ湖に行った時は言い知れぬなつかしさと感動の波が内部から強くわき起こってきて、特にカペナウムでは身体が震え、しばらくはその地を離れることができませんでした。できるならこのままこの地にとどまりたいという衝動があとからあとからわき起こってきてどうすることもできませんでした。

今、こうして振り返ってみると今回の旅行で得たことはあまりにも大きかったような気がします。スイスでは久保田先生や他の皆さんとダビデの星のようなUFOを目撃することができました。それらは今後の私の人生の支えであり、きっと忘れることのできぬ強い記憶となって心に刻まれると思います。

思い出深きイスラエルの旅

東京　大場静子

初めての海外旅行としてイスラエルの地を訪問でき、私にとって大変印象深いものになりました。円盤こそ見ることは出きなかったものの、不思議な感覚体験がありました。

それはベツレヘムの聖降誕教会にやって来た時のことでした。その教会の中にあるキリスト降誕の洞窟に足を踏み入れた後、私はひとり、ガイドの榊原先生の説明する場所から少し離れて薄暗い岩壁にたたずみぼんやりとしていたのでした。すると急に胸のあたりが押さえ込まれたように苦しくなり始めたのです。私は胸のどよめきを抑えようと試みましたが、次の瞬間、涙がボロボロと流れ出てくるので、抑えることが出きませんでした。私は理由がわからず、なぜ涙が出て来るのかを自問自答していました。うまく言葉では言い表すことができませんが、悲しさと懐かしさが混じり合った複雑な気持ちでした。全く子期せぬ出き事に、私の心は深く驚き戸惑ってしまい、その後の説明が一際耳に入りませんでした。

この時の感覚は、何かこういうことに

感激し、涙が流れたというものではなく、涙が流れてしまう、さてどうしてなんだろう、なぜなんだろうという感覚でした。もちろん何らかの原因はあるはずですが、それは心の推測でははっきり理解できそうにありませんでした。

イスラエルの旅から早くも一カ月が過ぎ去ろうとしています。今もなお、自分が文化も生活様式も全く異なる異国の地に行って来たという感じが起こりません。古きを訪ね、新しきを訪ねたイスラエルとスイスの旅、すばらしい出合い、旅を共にできたすべての方に深く感謝致します。ありがとうございました。

充実したGAPの旅行

埼玉県　高橋和英

六年前のエジプト宇宙考古学の旅に参加して以来、二度目のGAPの旅行でしたが、今回は体調のすぐれなかった分、皆さんの温かい心づかいをいただき、感謝の気持ちで一杯になり、お蔭様で楽しく旅することができました。

健康回復後のチャレンジとして旅行をしたいと思い、スイス観光や死海で浮かぶ企画が入っていたことと、それに何より、GAPの人達と行動を共にできるというのが魅力で参加しました。去年イスラエルに行った方々が大変感激されていましたが、私も行ってみて初めてその理由を肌で感じることができました。

イエスの足跡を訪ね、二千年前の様子をイメージ(透視)しながら、土地のフィーリングに触れると、榊原先生が言われたように「すべてが懐かしく」感じます。

ガリラヤ湖や山上の垂訓教会は、去り難い素晴しい雰囲気があり、壮大なスペースプログラムの流れを思い、自分の使命を再認識する場でもありました。

スイスでは、久保田先生の宇宙的な高揚感あふれるお話があり、その直後の円盤出現という感動的な体験をさせて頂き、すべてが有意義で思い出深い旅でした。

そして帰路のこと。上野から車で迎えに来てもらう予定が都合が悪くなり、疲れていたのでタクシーに乗りました。

運転手さんが話しかけてきて「イスラエルなんて珍しいですね」から始まり、私がアダムスキー問題を話すと大変な関心を示すので、川口迄の四十分間は疲れも忘れて、宇宙の真相などを話しました。

家に着いたのに、その人は立ち去ろうとせず名残惜しそうに見ています。それで、自宅にあったGAPの案内書を渡し「『宇宙からの訪問者』を読むと詳しく分かりますよ」と言うと「ぜひ子供に読ませたいが、悪影響はないか」と聞くので「とても素晴しい内容です。お子さんと一緒に読んでみて下さい」と答えました。

たったそれだけですが、こちらが恐縮する位「ありがとうございました」と頭を下げて、見えなくなる迄見送って下さいました。旅行の締め括りも、これからのGAP活動への励みとなるものでした。ありがとうございました。

UFOの出現に感動

神奈川県　石田義雄

すばらしいイスラエル・スイスへの海外旅行に参加させていただきまして有難うございました。

二千年前偉大なる方が金星より来られ活躍した地イスラエルへ行き、改めてその偉大さを実感しました。千分の一でもその偉大さに近づく事ができればうれしい事であろうと思いました。

イスラエルではガイドをして下さった榊原先生のすばらしい案内で旅行が一段とすばらしいものになった事を心から感謝します。

スイスでは夜十一時ごろホテルの一室に十三名の人が集まり、久保田先生が、「生命の科学」が大切である事やイスラエルに来た意義を話されている最中にスペース・シップを窓ごしに目撃できました。

アイガー北壁を背景にして出現したこのスペース・シップをほぼ全員で見る事ができました。色は寄色で時おり強く輝くようでした。高揚した雰囲気の中で出現したスペース・シップに皆興奮ぎみでした。またこの出現はなにか意味があるように思えます。

またスイスに行く飛行機の中から右下の方向で雲の上を飛行機と反対方向に飛ぶ黒い物体を個人的に目撃できました。すばらしい体験をさせていただきうれしく思いました。心から感謝しております。そして現在でもスペースプログラムにもとづいて援助が行われており、スペースプログラムに協力する人はこの援助が受けられる事を実感しました。また機会があったらぜひもう一度イスラエルに行ってみたいと思っています。

今回の旅行では私の不注意で皆様に心配をおかけし、田中さんやワールドセブントラベル社の皆様にお手数をおかけしました事、心からお詫びします。

ガリラヤ湖畔に故郷を見た

千葉県　安藤澄雄・博子

私たちの出会いは〝旅〟だった。結婚前に三年連続で二人ともGAPの旅行に参加し、結ばれた。

新婚（？）十五カ月目、私たちは四回目の海外研修旅行として、エルサレム・スイスを選んだ。特に「行きたい！」と思っていたわけではなく、単に今年は旅行するのに条件が良かっただけだった。

ところで、私たちは結婚前に、個々に同じ光景を感受したことがある。詳細は省くが「不思議だね。もしかして同じ所で暮らしていたのかしら」と話し合った。

旅行の話に戻るが、イスラエル見学の最終日、私たちはガリラヤ湖を渡った。上陸してバスの中から外を見ていると、博子が「似ている」と言う。私はピンと来た。そうだ、確かにオリーブの木や下草の生え方や光のやさしさが、いつか感受した光景とよく似ている。そして聖ペテロ教会に向かう歩道を包む並木を見たときには「ここだわ」と博子が懐かしそうに見回した。湖畔に寄せる白い波を見たときには私も目頭が熱くなるような懐かしさと安らぎを覚えた。「ああ、ここだったのか……」

旅行前、田中正氏が「イスラエルの旅行は今までと違って〝楽しい〟だけではない〝何か〟がありますよ」とおっしゃっていたが、全くその通りであった。宇宙は、何て深遠なのだろう！

投稿欄

ユーコン広場

ミラクルワードでガンが治った！

兵庫県　森井俊文

先日は突然の電話にお忙しい時間をお借り致しまして、その上私共の相談に親身にお応え頂きまして誠に有難うございました。心よりお礼を申し上げます。お陰さまで父は無事十月二十日に退院の運びとなりまして、お礼と共にご報告させて頂きたくお便りさせて頂いたしだいです。

電話をさせて頂いた時点では間違いなくガン細胞であるということで入院手術となった訳ですが、もう一度検査をするとのことで、出来物の部分だけの摘出手術となり、一時間半ほどですみ、検査結果を一週間ほど待つことになったのであります。その結果、なんとガン細胞は存在せず、単なる出来物であるという結果が出たのです。間違いなくガンであると結果が出ていたのですから、全員嬉しい驚きで、もう一度医師に聞き直しましたが、やはり単なる出来物であるとの答えでした。ガン細胞が消えてしまったのです。

ここで少し今迄の経過をお話しさせて頂きますと、今から二年程前に出来物が出来ていたらしいのですが、場所が場所だけに自分で薬を買って来てぬっていた様です。ところが今年の春頃から症状が悪くなってまいり仕方なく病院へ行ったのですが良くならず、逆にこのままではガンになる恐れがあるので、大きな病院で検査をしてもらいなさいと何とも無責任なことを言われ、遠う病院で検査してもらった結果が電話させて頂いた通りの皮膚ガンであったのです。検査結果の後、すぐ入院手術するよう言われ、本人は今生の最後と覚悟したのか身の周りの整理に走り回って、私が「治る、治る」とミラクルワードを唱えれば、どんな病気でも必ず治ると話しましても信じようとしません。信じないのが普通なのでしょうが、特に私共の場合は、私自身が八年頃前に病気になり、いろんなことをやった末、ミラクルワードと直道会が絶対であると悟り、昨年の三月から半年ほど直道会へ購義を聞きに参ったのですが、以前よりは確かに良くなったのですが、まだ完全に健康になっていない事実がありまして、そのために父も半信半疑で、私の言うことが信じられなかったのです。

そこで、私のような者がとやかく言うより、直接巽直道先生の購義を聞き、又治った人の話を聞けば少しは信じるだろうと思い、九月十五日にむりやり連れて行き、その後十六日、十七日と三日間だけですが購義を受けました。本当は十回は購義を聞かないとダメだといつも直道先生がお話ししていましたので、たった三日では完全に信じられないのも無理はありませんが、それでも自分なりに一生懸命ミラクルワードを唱えていたらしいです。私達も、回りの者が同じようにミラクルワードを唱えれば少しは効果があるに違いないと思い、母や兄弟皆で必死に唱えました。

私がミラクルワードを唱えだして四日目の夜、床に入ってすぐ、まるでビッグバーンのような細胞がきれいな色と共に飛び散る光景が見えたのです。ひょっとしたら父のガン細胞が消えた光景ではないのかとさっそく翌日父に様子を聞いたのですが、症状は悪くなってきたとのことで、やっぱり私達の力では無理なのかと思いましたが、手術日迄あきらめず出来るだけ唱え続け、手術をせずに治るよう祈りもしましたが、結局十月一日の入院迄には出来物は治りませんでした。そしてむしょうに久保田先生にご相談したくなり、お忙しい所を承知の上電話させて頂いた次第です。

半信半疑でありましたが、皆のミラクルワードでガン細胞が消えたのです。もし私共がミラクルワードを知らなかったら、今頃父は本当に今生の別れであったことでしょう。この偉大なミラクルワード、宇宙の法則を教えて頂いた久保田先生に心からお礼を申し上げると共に、今後私達が宇宙の仲間入り出来る人間になるために、なお一層努力し、心と意識を一体にして頑張らねばと意を新たに致しました。どうか今後共、私達のためにご指導頂きたく、又地球全体のため、宇宙全体のために少しでも役に立つ人間になれるようによろしくお願い致します。今度は本当に有難うございました。どうか、お体を無理なさらず、私共にお手伝い出来ることがございましたら、お申し付け頂ければ幸いと存じます。

スペース・ピープルに見守られている？

横浜　熊沢田鶴子

先日は日本GAP総会に参加させていただき、貴重なお話を聞くことが出来、大変感謝致しております。遅くなりましたが、ジョージ・アダムスキー全集の完結、お目出とうございます。心からお祝い申し上げます。

ずっとご無沙汰致しておりますがこのGAPのことは忘れたことはありません。なぜかというと、私には誰か、どこにいるのかはわかりませんが、買物やその他のことで横浜や東京へ出て行ったとき、必ずといってよい程スペース・ピープルがどこかから見守ってくれているような、あたたかい気持ちになるからです。そういう時に限ってバスや電車が都合良く来て、さほど待たなくても乗ることが出来るのです。これには大変感謝致しております。

先日、九月二十二日のことでしたが、私にはスペース・ピープルが知らせて下さったとしか思えない事がありました。その日、私は感違いをして、その日が二十三日でGAPの総会の日だと確信してしまい、唯一の私の理解者である母に、「宇宙人に会ってくる」と言って、出かけてしまいました。家の近くのバス停から鶴見駅迄は約十五分位かかります。が、三分の一位迄来た頃から気分が悪くなりだしました。鶴見駅へ着き、東京へ行かれない程ではなかったのですが、行きたい気持ちは本当にあったのですが、やはりあきらめてタクシーで家へ帰りました。母は私がすぐ帰って来たので驚いていました。少しして気分が良くなってくる中で、一時の時計を見て総会が始まってしまったなと、がっかりしていました。でも、ふと置いてあった新聞を見て二十二日と知り、あれと思いました。急いで案内書を開いてみると二十三日とあり、大喜びしました。それにしても自分のそそっかしさには、あきれてしまいました。しかし、いつもの私なら物事を判断しながら行動を取るタイプなのですが、今度の総会は案内書が来た時点から行かなければならないという強い印象にひかれていたものですから、気が浮いていたのだと思います。「宇宙人が教えてくれたんじゃないの？」という母の一言は当たっていると思います。私に気づかせて下さったスペース・ピープルの方々に感謝致したいと思います。そのおかげで、次の日は気分も良く、総会に参加することができました。そして、行かなければならないという印象の通り、購演の内容には私が求めていた事の解答がありました。

久保田先生のお話には体験したすべてがこめられており、私にはその真実が心に響いて確信しました。参加出来て良かったと思います。そしてこの日も、いつもに違わず会場迄スムーズに行くことができ、帰りも楽に座って帰ることができました。

この総会を実現させて下さったスペース・ピープル、久保田先生、役員の方々に心からの感謝とお礼を申し上げます。そして、いつも心から応援しています。これからも御身体を大切にしてお元気でご活躍下さい。

楽しい献本運動

名古屋　高原登茂子

この間は二十冊も機関誌のバックナンバーをお送り下さいましてありがとうございました。その後の反応がとても楽しみでしたが、ウーン、イマイチ！　といった感じでした。しかし献本したところにまめに頒を出してアフターサービスの方も完璧にしようと思います。「おもしろそうな内容だけど難解だ」が大半の意見でした。難しいことなんかちっともありませんよね。みなおいしそうな、ものすごい記事ばかりですもの。私なんかどきどきしながら読んでいます。

ところで87号の後記にまだ余りがあると書いてあるのが目にとまりました。友人夫婦といとこ夫婦、また彼らの友人たちが私が話す宇宙哲学の内容が気に入ってくれてバックナンバーを心待ちにしております。今度はアフターサービスがじっくりできると思います。大勢の方の目にふれるためにという目的からは少々ずれると思いますが。

素晴らしいアダムスキー哲学

東京都　佐藤　幹

私はこの度「宇宙からの訪問者」を読みまして、アダムスキーの体験を信じましたからこそ、日本GAPに入会させていただいた訳です。前回の手紙はアダムスキーを知る以前の私に立ち戻って、今日までの遍歴を申し上げると共に、正直に所信を述べさせて頂いたものです。恥ずかしいことですが私には科学的な知識はほとんどありません。これまで私は意識的に科学文明に背を向けて生きて来た人間です（その恩恵は多分に受けているのですが）。

その私がアダムスキーの貴重な体験を信じました（現在のところ二、三の疑問点もありますが）。理由は、先日の手紙をお読み下すればお分かりかと存じます。「宇宙哲学」「生命の科学」は今後の課題でありますが、まず宇宙船、異星人の存在を信じるには、体験もしくは論理的な裏づけがあってこそ可能となるのではないでしょうか。

現在、お送りいただいた機関誌を暇を見て拝読いたしていますが、アダムスキーの宇宙哲学を講義される会長の文章に接しましたとき、私は仏法の教えと非常によく似ている、言葉や表現は違っていても、究極の真理は同じではなかろうかと感じる瞬間がございます。

アダムスキーの宇宙哲学は、表現方法や語業が仏法とは異なっており、またキリスト教徒の多い欧米人に分かりよくするためか、バイブルの引用が多分に見られますが、根本は同じではないかと愚考致します。いかがなものでしょう？　両者を比較いたしますことは、現在の私には無理といえます。ただアダムスキーの哲学について言えることは、彼のそれは直接的であるがため、自己対宇宙への信念として実践できること、またこの哲学を現代人が理解できるよう科学的に分析し、道理に照らして説明せんと努力していること等、以上の点から見ても大へんすぐれていると考えられます。

右の感想は私の短絡的な直観によるものでして、正しいか否かはこの道の専門家であられる会長にお任せいたしますと共に、今後のご指導を期待いたす次第です。アダムスキーのすべてをこれから学ぼうとするに当たりまして、現時点での私の思考を記録として留め置くことも決して無意味なことではないと考えます。何とぞご海容下さい。

次にテレパシーについてですが、私は少年時代よりこれには関心を抱いておりました。最初にテレパシーなるものを知りましたのは心霊関係の本を読みました時で、また三十年程むかし物の本で、原始的な生活を送るニューギニアの原住民には、テレパシーで遠距離の仲間と交信している種族が存在すると書かれていたのを読みましたのが理由です。

人間以外の生物は自然と調和し、生命の上で一体となって共存している訳ですから、我々が超能力を受け取るテレパシーも、彼ら動・植物にはごく自然に備わった必定ともいうべき能力ではないでしょうか。私は植物も動物同様、意識というか心があると信じています。

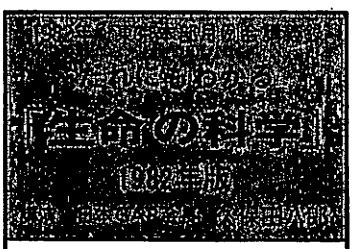
最後にUFO問題でありますが、私の長女は十年程前、二度、それも都心の低空に停止したUFOを見ております。どちらも日中の目撃で、一回は目黒駅そばの歩道橋の上から三井銀行ビルの真上にいたそれを。一回は山の手線内回りで帰る途中、原宿と渋谷の中間あたりで、電車の中から都心方向に浮いたそれを目撃したそうです。二つのUFOは形態の異なった物で、いずれの場合も周りの人たちに気づいた様子は認められなかったそうですが、長女は二度にわたる異常な体験にいたく感激したと述懐していました。

私にも少年の頃、田舎で不可解な光体に遭遇した体験があります。それは昭和十八年、一九四三年の戦時中で、中学に進学しました春の夜の出来事ですが、何しろ四十一年も昔の体験なので明確な月日は覚えていません。当時私は学校で不注意のため、右足の第二指を突き指し、歩行困難になるほど腫れた患部の治療に、同部落の揉み療治の上手な老人の元に通っていました。

その夜、夕食を済ませた私は自転車に乗り、家の前より一本に続く県道を目的の家に向かってペダルを踏んでいました。当時は農村の常で、また戦争のさ中でもあり、民家からもれてくる光はなく、私の自転車も無燈火でした。夜空に月や星が見えていたか、それとも曇り空であったのかそれは覚えていません。とにかく全く人通りのない道路だけがほの白く浮き上がって見える、うす暗い闇夜であったことは確かです。

老人の家までは西へ約四百メートルあまり、その間、手前の半分以上は右側の山裾に民家が連なり、左側はかなり広い田んぼで、空が拡がっています。私の家からこの道を百五十メートルほど行くと、道路はゆるやかな「く」の字に右折し、そのまま進むと今度は百二十メートル位先から右側の民家は途絶え、変わって山や断ち切られた崖となり、道を挟んだ左側に民家が一列となって続きます。

私が奇妙な光体に気づいたのは、ちょうど「く」の字のカーブを曲がったときです。行手の左十メートルほど先、高度は十五メートル位でしょうか、田んぼの道寄りの上空に張ってある電線より、いくらか沖合でやや高く斜めの方向に、その光体が見えました。「あれは一体なんだろう？」と私は自転車をゆっくり漕ぎながら注視していますと、その光体はそのまますっと道に沿って水平に逆戻りして来て、私と並び、再び私のスピードに合わせ、同じ高度と距離を保ちながら同じ方向に進行し始めたのです。動きは全くスムースで音も出しません。大きさは月くらいで、月のような立体感はなく、月よりも大分白っぽく……（後略）……。



第1部（第1～3課）売り切れ
第2部（第4～6課）　500円
第3部（第7～9課）　500円
第4部（第10～12課・会長特別寄稿文）　500円
（B6版　活字タイプオフセット印刷）
送料　1冊 170円　2～3冊 200円　4冊 250円

発行者・申し先／安藤澄雄
〒274 千葉県船橋市松が丘 5－3－15
ルミハウス　A－2
振替／東京2－156115

福岡支部大会

●十月二十八日(日)
●福岡市民会館(福岡市)
●出席者　二十五名

前々日からの降雨で大会当日の天気が危ぶまれたが昨年と同様、久保田先生が空港に到着されるや否や盛天の空に青空がのぞき始めたのには驚かされた。

当日は快晴のもと午前十二時より受付開始。東は神奈川県、南は沖縄県から熱心な会員の方々が集まられ、宇宙哲学にかけられる皆様方の熱意に胸を打たれた。予定を少々遅れてスタートしたが支部代表挨拶に続いて、支部会員の講演として吉岡裕人氏が「環境問題と宇宙哲学」と題して発表。氏は「万象の世界には不要な物はひとつとして存在せず、現在、人類をおびやかしている環境汚染の問題は物質の循環サイクル（創造→生長・発達→崩壊）を理解しない人間のエゴの結果である。現象の世界を人間のマインドによる狭い価値基準によって判断するのでなしにもっと原因と結果の法則を熟知する必要がある」と説明された。

続いて今大会のメインである久保田先生の御講演「日本GAPの将来」と題するお話が始まる。内容は大別して①地球人はマインドを使いすぎるのでまずそれをやめ、万物一体感のフィーリングを高めることが最重要である。②地球は浮世ではなく一大聖地であるから、我々は地球人としてのレッスンをここで全うすること。③絶対的な信念をもって「知らせる運動」を推進すること、等をすさまじい迫力で述べられた。

その後、活発な質疑応答が続き、午後五時に大会は大成功裡に終わった。夜は天神の中国料理店で家庭的な雰囲気のもとで会員同士の交歓がなされた。二次会では先生を囲んで質疑応答の続きが深夜まで行われ、非常に有意義な一日を過ごした。翌二十九日は約十名で市内観光バスに乗り、太宰府天満宮や博多織り工場、柳田神社などの名所旧跡を訪れ、愉快な一日であった。

先生と出席者の皆様方、それと大会を支えてくれたスタッフに厚く御礼を申し上げます。

島津紳二郎

第一回神奈川支部大会

●十一月二十四日(土)
●川崎市立労働会館
●出席者　三十九名

神奈川支部は基礎が固まるまでは大会を開催しない方針だったが、機が熟したとみて、ついに挙行にこぎつけた。

会場は労働会館の国際会議に使われる豪華な特別会議室を利用し、落ち着いた高次元な雰囲気と華やかさの点描の調和を主題とし、数枚のパネルと盛花を飾りつけた。アダムスキーが案内された宇宙船の休憩室と較べようはないが、偲ぶよすがぐらいにはしたいと思った。

プログラムは石川さんの淡々とした司会で大崎代表が挨拶し、私が基調報告を行い、松山宏子さんの「私のテレパシー体験」という題の講演が行われた。基調報告は講演ではないため難しいことを圧縮したが、松山さんの話は落ち着いてわかりよく、コンタクトの話も二人の子供の誕生による生まれかわりの実証もスゴイ、立派、進んでいるという評判であった。その後、野口静岡支部代表の挨拶と激励があり、有難いことだった。

続いて大会の主眼目である久保田先生の講演と質疑応答が行われた。その内容はこれまで二回ほど本部月例会で示唆されながら内容は洩らされなかったある少女の円盤実見談であった。第一回の神奈川支部大会を祝い、GAP会員を奮い立たせ、進化の糧となるお話を聞かせて頂いて、出席者一同深く感じ入り、スペース・ピープルの援助を現実のものと受けとめ、全ては一つであるとの認識を高揚させた。質疑も先生の真剣な回答でめでたく幕となった。

夜の夕食会は二十九人が参加し、大会の高次元な雰囲気が非常にリラックスした祝宴の形となって現れ、その後の二次会三次会的集いに至るまで高貴な波動を保ち続けることができた。

翌日は十五名でマイクロバスにて三浦半島一周のツアーを実施。あいにくの曇天ながらも城下島、マリンパークその他を周遊して楽しい一日を過ごした。先生と出席者の皆様に厚く感謝します。有難うございました。

内藤重雄

〈予告〉60年度地方支部大会 ―その1―

	第6回 松山支部大会	第7回 静岡支部大会	第1回 茨城支部大会
日時	3月24日(日) 午後 1：00→ 5：00	4月28日(日)〈2日連休の初日〉 午後 1：00→ 5：00	5月5日(日)〈2日連休の初日〉 午後 1：00→ 5：00
会場と交通	「松山市民会館」2F会議室。 ☎(0899) 31―8181 松山市堀の内(お堀に囲まれた堀の内公園内)。 国鉄「松山駅」から市電「松山市駅」行きか「道後温泉」行きに乗車。「堀の内」で下車、徒歩1分、NHK四国本部の横。 松山港、空港からいずれもタクシーで20分、バスなら30分。	「ホテル サンライズフジ」3Fホール。 ☎(0545) 64―2355 静岡県富士市本町1―1、国鉄富士駅前。 東京方面からは新幹線こだま号にて三島駅下車、下り東海道本線に乗り換えて富士駅へ。東京より所要時間約1時間半。大阪方面からは新幹線こだま号にて静岡駅で下車、上り東海道本線に乗り換えて富士駅へ。静岡駅より所要時間30分。	「サンレイク土浦」2F会議室。 ☎(0298) 22―2001 常磐線土浦駅東口下車。 徒歩15分(タクシーなら東口から基本料金内約¥500)。 東京方面からは上野駅より常磐線に乗り、土浦駅まで各停で所要時間約1時間、急行なら55分。
会費	¥2000(希望者のみ全員記念写真代¥800を別納。グランドキャビネ判・送料共)	左に同じ	左に同じ
プログラム	司会 (未定) 1：00 支部代表挨拶 伊藤達夫 1：05 会員講演「GAP活動こそ私の生きがい」西本有水子 1：35 講演「GAP活動とアダムスキー哲学」日本GAP会長 久保田八郎先生 2：50 休憩、記念撮影 3：15 全員自己紹介、質疑応答 5：00 閉会	司会 高梨和明 1：00. 支部代表挨拶 野口敏治 1：10 講演「宇宙哲学の学び方」日本GAP会長 久保田八郎先生 2：15 休憩、記念撮影 2：35 全員自己紹介、質疑応答 5：00 閉会	1：20 支部代表挨拶 清水勝一 1：30 講演「アダムスキー問題と世界の未来」日本GAP会長 久保田八郎先生 2：45 休憩、記念撮影 3：15 全員自己紹介、質疑応答 5：00 閉会
夕食会	大会終了後6：00から8：00まで「全日空ホテル」6F「雲海」大広間で、希望者による夕食会を開催(着座形式)。市民会館から夕食会場までは電車通りに沿って徒歩10分。愛媛県庁のすじ向かい。 会費 ¥5000	大会終了後6：00から8：00まで大会会場と同じホテルで希望者による夕食会を開催。今回は「久保田先生4分の1世紀の活躍」と題して、本邦初公開の先生の若かりし頃の貴重な写真、その他珍しい写真類をスライドで公開します。ご期待下さい。 会費 ¥5000	大会終了後6：00から8：00まで大会会場と同じ保養所内で希望者による夕食会を開催。 会費 ¥5000
宿舎	「ホテル シャトーテル松山」をお世話します。松山市三番町4丁目9～6 ☎(0899) 46―2111 市電「国鉄松山駅」行きに乗車、「市役所前」下車、徒歩1分。 シングル 1泊 ¥5000(税サ込) ツイン 〃 ¥8000 〃	「ホテル サンライズフジ」をお世話します。 1泊 お1人様 ¥5000(シングル・ツイン) (大会会場と同じホテル)	「サンレイク土浦」をお世話します。霞ケ浦を一望、筑波山も絶景。 1泊 ¥3740(税サ込) (大会会場と同じ保養所)
申込	夕食会、宿舎、観光の申込はハガキで3月10日までに下記へお申込下さい。 〒794 愛媛県今治市黄金町1丁目4―4 伊藤達夫 ☎(0898)22―3060	夕食会、宿舎、観光の申込はハガキで4月15日までに下記へお申込下さい。 〒422 静岡市西島304―9 野口敏治 ☎(0542) 86―7729	夕食会、宿舎、科学万博見学の申込はハガキで4月15日までに下記へお申込下さい。 〒312 茨城県勝田市津田片岡1946―2 清水勝一 ☎(0292) 73―1903
観光	大会翌日は朝9：00出発。四国の軽井沢と呼ばれる久万(くま)高原へマイクロバスでドライブ(26名まで可)。費用は¥1000(昼食代別)。3：00頃空港、港へお送りし、15：30頃ホテルシャトーテルにて解散。 ※雨天の場合は山岳地帯のため観光は中止。	大会翌日は希望者で富士山周辺の雄大な素晴らしい景色を見ながらバスで周遊します。ホテル出発10：00→田貫湖・朝霧高原で昼食。3：00に新幹線三島駅着。	大会翌日は日本が世界に誇る筑波科学万博を見学します。当日は振替休日のため団体割引がきかないので、割引入場券はなるべく各自でお求め下さい。旅行会社、プレイガイド、デパート、書店、タバコ店で販売中。1月16日まで割引料金¥2430、当日会場入口で買えば¥2700。
備考	支部大会には高松円盤の目撃者・西本奈生ちゃんも出席の予定。 3月の月例会は大会のため中止。	5月の月例会は大会のため中止。	5月の月例会は大会のため中止。 質疑応答の質問はなるべく紙片に記して当日受付に提出して下さい。

※以上の他に60年度は5月26日に新潟支部大会、9月22日に東京総会、10月6日に大阪支部大会、10月20日に山形・仙台合同支部大会、11月3日に群馬支部大会を開催の予定です。詳細は次号以下掲載。

第7回　日本GAP海外研修旅行

エジプト・エルサレム宇宙考古学の旅

■日本ＧＡＰは国際的視野を開くために毎年海外研修旅行を実施して多大の成果をあげてまいりましたが、昭和60年度は先号に予告した「イギリス・フランス宇宙考古学の旅」を事情により変更して、標題のとおり、エジプトとイスラエル訪問を行うことにしました。

■ご承知のとおりエジプトは5000年昔からの雄大な巨石文化の跡をとどめており、謎に満ちた遺跡の国で、アトランティス大陸文化の名残りと思われるギザの３大ピラミッドをはじめ、驚異的な石造文明の建築物の充満した大地です。またイスラエルは2000年前に地上最高の栄光と悲運に生きた金星人イエスの土地であり、特にエルサレムにはその最期を物語る遺跡がていねいに保存されています。日本ＧＡＰ会員が一生に一度は見るべき地上最大最高の遺跡として、この２カ国にまさるものはありません。万障お繰り合わせの上、多数ご参加下さい。大体のコースは次のとおりです。

■８月10日(土)午後成田空港を出発して一路エジプトのカイロに向かい、11日午前カイロ着、専用バスにてまずエルサレムに向かい、夕方同市着、ホテルへ。12日は終日エルサレム市に滞在、バスにてオリーブ山、エレオナ教会、昇天教会、ゲッセマネ庭園、イスラエル博物館その他を見学。13日にベツレヘム、ビアドロローサ、聖墳墓教会、鶏鳴教会、シオン山の２階座敷、歎きの壁、旧城壁内、岩のドームその他を見学。14日はバスで南下し、クムラン洞窟、マッツァダの遺跡、死海での海水浴、１万年前の最古の都市跡エリコを見学後ティベリアへ行き同市に宿泊。15日はガリラヤ地方を周遊し、山上の垂訓教会、ナザレの町、聖告知教会、ガリラヤ湖上遊覧、ヤッフォの町などを見てテルアビブに宿泊。16日午前テルアビブを飛行機で出発、カイロ着後ただちにギザの３大ピラミッドとスフィンクスを時間をたっぷりかけて見学、サッカラの階段状ピラミッドその他をまわり、同夜カイロ泊。17日カイロ発、飛行機でアブシンベルへ行き、アブシンベル大神殿と小神殿を見学後空路アスワンへ。アスワンハイダムや古代の石切り場などを見学してアスワン泊。翌18日アスワンより飛行機でルクソールへ飛び、メムノンの巨像、ハトシェプスト女王葬祭殿、王家の谷（ツタンカーメン、セティ１世の古墳等）を周遊、壮大なカルナック神殿、ルクソール神殿等を視察後寝台列車でカイロまで車中泊。19日、カイロ市内と世界屈指のエジプト考古学博物館その他を見学。20日午前カイロ発、空路帰国の途につき、21日午後成田着。

■以上を要約しますと、最初にイスラエルのイエスや旧約関係の遺跡を視察後、次にエジプトへ入り、巨石文化遺跡を見学という順序になります。両国とも過去に数度日本ＧＡＰの海外研修旅行で訪問した実績がありますが、今回はエジプトの未見学地アブシンベルとアスワンが加えられているのが特長で、エジプトの寝台列車で北上するのも楽しい旅となります。

■両国を数度訪問した経験のあるベテラン添乗員の田中正（ワールドセブントラベル社幹部・日本ＧＡＰ東京本部役員）と、海外団体旅行引率の経験豊富な日本ＧＡＰ会長・久保田八郎によるＧＡＰ独特の家族的雰囲気に満ちた素晴らしい旅を満喫して下さい。現地では優秀な日本人ガイドが案内します。（ＧＡＰ会員でない方も参加できます）

● 期　間　昭和60年８月10～21日（12日間）

● 費　用　¥498,000（60年度は航空運賃・ホテル代等で若干の変動があるかもしれません。24回払いローン利用可能。詳細は案内書をご参照下さい）

● 案内書　下記へハガキでお申し込み下さい。

ワールドセブントラベル株式会社　田中 正（宛）
〒150 東京都渋谷区東3-24-9、サンイーストビル２Ｆ　☎（03）499-2461 / 夜間と休祭日は（0462）63-0615

日本ＧＡＰ創立25周年記念特別企画

UFO写真展開催！

同時開催　天文宇宙図書フェアー

会　場　書泉グランデ（三省堂の並び西100m）
〒101　東京都千代田区神田神保町１－３－２
☎ 03-295-0011(代)　平日10:30～18:50　日祝18:20まで。
国電お茶の水駅下車、大通を左へまっすぐ行くと広い十字路の右角に三省堂が見えるので横断して右へスグ。

期　間　１月５日（土）～27日（日）期間中無休
天文宇宙図書フェアーは31日まで。

主　催　日本ＧＡＰ／協賛　書泉グランデ・書泉ブックマート・文久書林

絶賛発売中！

ジョージ・アダムスキー全集

B6判・本文上質紙・厚手表紙箱入豪華本

久保田八郎訳　全７巻
徹底的全面改訳決定版

偉大な進化をとげた惑星の人々とコンタクトしたアダムスキーの驚くべき体験と、深遠な宇宙的思想を伝えたこの全集は、人類に宇宙的覚醒と真の生き方を示す最高の指針。UFOと宇宙哲学の研究者必携の名著です。

1. 宇宙からの訪問者
338頁　￥2500

ジョージ・アダムスキーのあまりにも有名な体験記。1952年11月20日に米カリフォルニア州の砂漠で金星人と会見した体験「空飛ぶ円盤は排除した」を本書の第Ⅰ部とし、円盤や母船に乗り、多数の異星人と会見した実録を第Ⅱ部とした驚異的な書物。本全集の中心をなす最重要なもの。

2. UFO問題の真相
262頁　￥2500

第1巻の補遺的なUFOと異星人問題の真相を詳述。特に円盤の推進理論や、聖書とUFOとの関係を述べた箇所は重要である。第Ⅱ部はアダムスキーの世界講演旅行記。各国のGAPグループの活動と反応や、サイレンス・グループの卑劣な妨害が克明に描写されている。

3. UFOとアダムスキー
350頁　￥2500

アダムスキーが実際に体験した母船による宇宙旅行を詳細に述べた「金星旅行記」と「土星旅行記」から成る本書第Ⅰ部「死と空間を超えて」が圧巻。またアダムスキーが存命中に日本GAP会長・久保田八郎に送り続けたぼう大な情報と書簡類を収録して第Ⅱ部とした。

4. 宇宙哲学
148頁　￥1300

人間のセンス・マインド（肉体の心）と宇宙の意識との一体化を中心思想として、人間を進化させる方法を明快に理路整然と説く。この哲学は、人間の意識と物質との関係の解明と応用とをめざす21世紀の科学の最先端をゆくもので、アダムスキーの哲学関係三著作の中心となるもの。

5. テレパシー開発法
190頁　￥1800

人間に内在する宇宙的な能力のうち、テレパシー能力の開発法を説明したもの。特に目・耳・鼻・口の4官をコントロールして、内部の意識から来るテレパシックな印象を感受する方法を詳しく解説し、他人と無言の会話を行う技術を述べた、類書の全く存在しないガイドブック。

6. 生命の科学
205頁　￥1800

アダムスキーが他界する数年前に出したScience of Lifeと題する12分冊の講座を和訳して一書にまとめたもの。アダムスキーの宇宙的哲学の総まとめ的な一大金字塔で、真実のテレパシーと心霊的な霊界通信の相違を明確にし、心霊現象への接近を警告する画期的な書。

7. アダムスキー論説集
370頁　￥2500

日本GAP機関誌に掲載されたのみで、単行本化されていなかったアダムスキーの論説や講演録等を網羅編さんしたもの。特に死去する直前の最後の講演が圧巻。第Ⅱ部にはアダムスキー研究家として名高い久保田八郎が数度渡米してアダムスキーの高弟たちとインタビューした記事を収録。アダムスキーの偉大な面が描写されている。

※送料は各巻￥250。但し発行所宛直接注文の場合に限り、下記のように定価・送料をサービス。

☆１冊注文＝送料は出版社負担。書籍代のみご送金下さい。
☆第１巻より第３巻まで一括注文＝特別セット価格　￥7000（送料共）
☆第４巻より第７巻まで一括注文＝特別セット価格　￥6500（送料共）
☆第１巻より第７巻まで一括注文＝全巻セット価格　￥13000（送料共）

郵便振替または現金書留でご注文下さい。

文久書林　〒162. 東京都新宿区榎町33　Tel. 03(267)6920　振替 東京4-2521

新刊〈ポケット・ムー〉シリーズ　絶賛発売中
●久保田八郎著／学研発行

ルールドの奇跡

■1858年２月、フランス南部の寒村ルールドで発生した世にも不思議な事件は、奇跡的な難病治癒の続発とともに世界的に有名になり、苦難の生涯を終えた聖女ベルナデットは全世界カトリック信者の崇敬の的になる。現地取材とぼう大な資料によるベルナデット伝記の決定版。

アトランティス大陸の謎

■古代ギリシアの偉大な哲人プラトンが書き残した太西洋に沈んだ大陸の謎を追って世界のミステリー探究者が活躍した跡を詳細に調査し、著者独自の推理を加えて、ここに意外な結果が浮上。面白いこと無類のノンフィクション・ミステリー最高の書。これまた莫大な資料を駆使してアトランティスをあらゆる面から浮彫りにした。

各新書判　定価 480円／送料250円
全国の書店で発売中。品切れの節は書店に注文するかまたは下記へ直接ご送金下さい（切手代用可）。
〒145 東京都大田区上池台４－40－５　学研販売部

日本GAP全国月例研究会案内

支部名	日　　時	会　　場	会費	携行品・行事
東京本部	毎月第2土曜日 午後2：00→6：30 ※1月は月例会終了後新年会を開催。会費2800円。	上野公園内「東京文化会館」4階会議室。 ☎03－828－2111。国電「上野駅」の「公園口」下車。改札口の真向かいスグ。 連絡先＝日本GAP　☎03－651－0958	¥500	2：00→3：00会員による体験講演。 3：00→4：30久保田会長の「テレパシー開発法」講義と近況報告、テレパシー練習、休憩。 4：30→6：00自己紹介、意見発表、質疑応答。
大阪支部	毎月第3日曜日 午後1：00→5：00 ※60年1月13日に豊岡市で移動月例会開催。詳細は平塚まで。	大阪府吹田市出口町4丁目「吹田市民会館」☎（388）7351。 国鉄または阪急電車「吹田駅」下車。連絡先＝平塚和義　☎06－436－3478	¥200	テキストとして「テレパシー開発法」（文久書林刊）を持参。東京例会における久保田会長の講演テープを公開。テレパシー練習・研究発表・座談会。
新潟支部	毎月第3日曜日 午後1：30→4：00 ※60年1月より会場を変更。 初参加の方は事前にご一報を。	長岡駅前「パークホテル」2F、ローズルーム　☎（0258）36－2331 連絡先＝風富治夫　☎02579－2－5562 足立豆宏　☎0252－62－0968	¥200	テキストとして「テレパシー開発法」持参。東京本部例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習、座談会。
福岡支部	毎月第3日曜日 午後1：00→5：00	福岡市天神町5丁目1－23「福岡市民会館」3F　国際会議控室 連絡先＝島津紳二郎　☎092-672-6784	¥300	テキストとして「テレパシー開発法」を持参。久保田会長の東京例会における講義録音テープ公開座談と研究発表。テレパシー練習。
名古屋支部	毎月第2日曜日 午後1：00→4：30	名古屋市中区古沢町7－1「名古屋市民会館」特別会議室。☎（052）331－2141 国鉄・名鉄・地下鉄「金山橋駅」下車。徒歩5分。 連絡先＝林　国宜　☎0586－45－6468	¥300	テキストとして「テレパシー開発法」を持参。久保田会長の講演録音テープ公開。研究発表・テレパシー練習、座談会。
仙台支部	毎月第4日曜日 午後1：10→4：20	仙台市「市民会館」会議室（西公園内） 連絡先＝笠原弘可　☎0222－95－0725	¥300	東京本部月例会における久保田会長の講義録音テープ公開、テレパシー練習、座談会。
山形支部	毎月第1日曜日 午後1：00→5：00	山形市小白川町「社会福祉センター」 山形駅よりバスで貯金局前下車・徒歩3分。☎0236－42－5181 連絡先＝清水　正　☎0238－37－5635	¥200	テキストとして「テレパシー開発法」を持参。東京本部月例会における久保田会長の講演録音テープ公開、テレパシー練習、研究発表、座談会。
札幌支部	毎月第1日曜日 午後1：00→4：30	中央区北一条西一丁目「札幌市民会館」会議室　☎011－241－9171 連絡先＝高野晶司　☎011－822－8260	¥500	テキストとして「テレパシー開発法」を持参。久保田会長の講演録音テープを公開、テレパシー練習、座談会。
静岡支部	毎月第1日曜日 午後1：00→5：00 ※4月は支部大会のため月例会は中止。	静岡市駿府町「静岡県婦人会館」会議室 ☎0542－54－5221 連絡先＝野口敏治　☎0542－86－7729	¥200	テキストとして「テレパシー開発法」を持参。東京本部例会における久保田会長の講演録音テープ公開。テレパシー練習、研究発表。
旭川支部	毎月第4日曜日 午後1：00→5：00	旭川市6条通4丁目「勤労者福祉会館」2F小会議室　☎0166－26－1304 連絡先＝阿部　発 ☎01658－2－1585	¥500	東京月例会における久保田会長の講演録音テープを公開。研究発表、アダムスキー著「テレパシー開発法」「生命の科学」を持参。質疑応答、テレパシー練習、研究発表。
松山支部	毎月第4日曜日 午後1：00→5：00 ※奇数月は広島市広島駅ビル内「ステーションホテル」5F会議室。 ※偶数月は松山市民会館会議室。 ※3月は支部大会のため月例会は中止。	松山市民会館会議室 連絡先＝伊藤建夫 ☎0898－22－3060	¥200	テキストとして「テレパシー開発法」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープ公開。質疑応答、座談会。
群馬支部	毎月第2日曜日 午後1：00→5：00	群馬県太田市「社会教育総合センター」3F。連絡先＝久保寺信一 店　＝☎0276－25－5958 自宅＝☎0276－45－3544	¥200	テキストとして「テレパシー開発法」を持参。東京本部月例会における久保田会長の講義録音テープ公開、座談会。
青森支部	毎月第3日曜日 午後1：00→5：00 ※1月より会場と連絡先を変更。	青森市堤町1丁目4－1、「青森市文化会館」会議室　☎0177－73－7300 連絡先＝田村嘉彦　☎0177－38－0416	¥300	テキストとして「テレパシー開発法」を持参。東京月例会における久保田会長の講演録音テープを公開。テレパシー練習、研究発表、座談会。
沖縄支部	毎月第3日曜日 午後1：00→6：00	〒901-22　宜野湾市野嵩1547　マキシアパート　新里方 連絡先＝新里義雄 ☎09889－3－3695	¥500	テキストとして「テレパシー開発法」を持参。久保田先生による講演録音解説テープ公開。質疑応答。想念観察とテレパシーの研究報告。自己紹介座談会等。
秋田支部	毎月第2日曜日 午後1：00→5：00	秋田市八橋運動公園1－2「中央公民館」趣味の間。☎0188－24－5377 連絡先＝伊藤正治　☎0188－62－2831	¥200	テキストとして「テレパシー開発法」を持参。東京本部月例会における久保田会長の講義録音テープ公開。テレパシー練習。座談会。
神奈川支部	毎月第3日曜日 午後1：00→5：00	神奈川県川崎市川崎区宮士見2－5－2「川崎市立労働会館」第1研修室 ☎044－222－4416。国鉄京浜急行「川崎駅」下車。市バス・ふ頭線・労働会館前。 連絡先＝大崎孝典　☎0492－65－0389	¥400	テキストとして「テレパシー開発法」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープ公開。研究発表、座談会等。
茨城支部	毎月第3日曜日 午後2：00→5：00 ※5月は支部大会のため月例会は中止。	水戸市梅香1－2「水戸市中央公民館」4F小集会室　☎0292－24－6600 水戸駅北口より徒歩10分。 連絡先＝清水勝一　☎0292－73－1903	¥300	テキストとして「テレパシー開発法」を持参。東京本部月例会における久保田会長の講演録音テープ公開。テレパシー練習、座談会、研究発表等。
長野支部	毎月第4日曜日 午後1：00→5：30 ※59年11月より発足。乞御支援。	塩尻市大門7番町「塩尻市総合文化センター」第1会議室。☎0263－54－1253 塩尻駅下車、徒歩10分。 連絡先＝大野　仁　☎02657－2－4217（宰）	¥300	テキストとして「テレパシー開発法」を持参。東京本部月例会における久保田先生の講演録音テープ公開。テレパシー練習、座談会、研究発表等。

★本誌バックナンバー(旧号)★

わが国でアダムスキー問題を正しく伝える唯一の文献である本誌は後世に残る貴重な資料となるものです。ぜひおそろえ下さい。下記以外の旧号も残っています。お問合せ下さい。

No.85 主要記事「宇宙飛行士の月面の演技!?」ウィリアム・ブライアン／「沖縄のUFO事件」新里義雄／「テレパシー送信と奇跡的治癒」鈴木雄次郎／「ある不思議な一夜」十菱 駿／「テレパシーと透視」久保田八郎 その他。

No.86 主要記事「月には濃密な大気と強い引力がある」ウィリアム・ブライアン／「超低空で接近したアダムスキー型円盤！」遠藤昭則／「山腹に着陸した巨大な円盤!?」清水南／「アダムスキー型円盤、超低空で出現！」清水正／「テレパシーと透視(2)」久保田八郎／その他。

No.87 主要記事「月と地球は空洞のコアをもつ天体か」ウィリアム・ブライアン／「宇宙から来る訪問者たちは地球人を指導しようとする」ジェニー・アベ／「絶対に真実であったアダムスキーの体験」遠藤昭則／「丸窓の並んだ母船が出現！」後藤澄子／「二十一世紀の地球」松原真弓／「異星人イエスの足跡を訪ねて」久保田八郎

各￥700。※バックナンバーに限り送料は不要

「テレパシー開発法」解説講義録音テープ

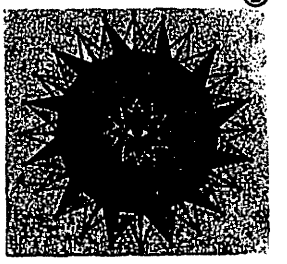
昭和60年1月より1年間にわたって東京月例研究会で毎月1～2章ずつ日本GAP会長・久保田八郎先生が解説される録音テープです。アダムスキーの宇宙的哲学の中心をなすテレパシー開発は、宇宙的人間になるための最要な条件。平易な解説と深遠な内容をぜひお聴き下さい。各支部月例会用の必須のテープ

テープ1本(90分)　￥1000　〒200

※このテープは日本GAPでは取扱いませんので、××月分と記して必ず下記へご注文下さい(第1章より在庫)。

〒430 静岡県浜松市寺島町221、小島国弘
TEL. 0534-52-8502／振替名古屋7-51065

①



②

①オーソン肖像写真　②シンボルマーク

①1952年11月20日、カリフォルニアの砂漠でアダムスキーが劇的な最初のコンタクトをした金星人は「宇宙からの訪問者」第二部でオーソンという名で出てくるが、これをアダムスキーの記録やアリス・ウェルズのスケッチにもとづいて女流画家ゲイ・ベッツが描いた名画の写真。(キャビネ判・カラー写真)

②この金星のシンボル・マークの中央にある眼は"すべてを見透す眼"で、宇宙の意識をあらわし、周囲の四層の星は人間のマインド(心)の発達状態をあらわしている。(サービス判・カラー)

上記2点共、重要な資料となるものです。他所では入手できません。ご注文は必ず日本GAP宛直接に振替でどうぞ。

①￥600〒120　②￥300〒60一括注文の場合〒120

③テレパシー練習用 ゼナーカード

アメリカで開発されて世界的に広まったテレパシー練習用カード。5種1組のカードを1箱に5組、計25枚収納。
英語箱入り。
￥600 〒120

本誌とじ込み用 バインダー

濃紺地に金色の誌名背文字入り豪華版。1個に本誌12冊がとじ込めるので保存用に最適。1個￥600 送料は小包便で4個まで￥600　ご送金は郵便振替で。

日本GAP

会員募集

日本GAPはUFO問題の大衆啓蒙、久保田八郎先生アダムスキー研究を継承して1981年に創立し、地球人類の心のUFOと宇宙哲学の研究と実践を通じ、多くの会員と共に宇宙的人間を目指す。
入会案内書をハガキに記入し日本GAPへ申し込みください。
＝日本GAP＝

編集後記

●年頭に際しては多数の方から年賀状を頂いて厚くお礼を申し上げます。昨年はGAP内部で驚くべき事件が連続発生しましたが、今年は更に飛躍向上の年になりそうです。よろしくご支援の程をお願いします。

●巻頭のショッキングな「驚異の高松市円盤降下事件」には驚かれたでしょう。世界でも珍しいこの大事件については海外のUFO研究団体にも英文記事を配布する予定で、大センセーションを起こす可能性があります。

●その他本号には盛り沢山の記事を載せましたが、UFO問題が主体になっているのは、UFOの出現が頻発する傾向にあるからで、何かの理由がありそうです。

●宇宙哲学解説講座は紙数の都合で意を尽くせませんが、要点は押さえてありますので、実践してみて下さい。今年一月八日の東京月例会よりテレパシー開発トレーニングを強化実施しますから多数ご出席下さい。なお一月の月例会終了後は恒例の新年会を開催します(会費二八〇〇円)。

●昨年十一月より長野支部が発足しました。代表はかつて名古屋支部で活躍した大野仁氏、月例会会場は塩尻市です。右頁の案内をご参照の上、県内の方はふるってご出席下さい。

●先号で発表しました今年度海外研修旅行のイギリス・フランスの旅は事情により行先を変更して「エジプト・エルサレム宇宙考古学の旅」にしました。詳細は38頁に。

●今年も三月二十四日の松山支部大会を皮切りに全国各地で地方支部の活動が活発に展開します。最寄りの大会になるべくご参加下さい。すぐれた会員の方々との接触交流は一段と宇宙的フィーリングを高揚させますし、貴重な情報に接することもできます。

●今年度日本GAP総会は清新な雰囲気と新機軸を打ち出すために、九月二十二日(日曜日。二日連休の初日)に東京銀座七丁目の銀座ガスホールで開催します。詳細は七月発行の本誌90号に掲載の予定です。

●本誌保存用のバインダーが出来ました。上段の広告をご参照の上、早目にお求め下さい。品切れになると追加製作までにかなりの期間を要します。

●本誌は約百名の有志の方々により都内と地方の主要書店に直接卸されています。これにより宇宙的カルマを持つ人が次第に発掘されてゆき、なかには書店で本誌を見つけて驚喜したという方もあります。スペース・プログラムに協力する意味で書店卸しに奉仕される方はご一報下さい。説明書をお送りします。

●また書店で売れ残ったキズもの返品も保存してありますから、献本用に活用される方には無料で差し上げますので、送料として六十円切手十枚を同封してお申し込み下さい。お送りする号数や冊数は当方におまかせ下さい。病院の待合室、理髪店その他人の集まる場所や関心のありそうな人に無料で配布して下されば幸いです。キズものですから売るのはご遠慮下さい。

●松山支部のUFO写真展に続いて東京でも一月五日(土)より二十七日(日)まで神田の書泉グランデでアダムスキー撮影のUFO写真展を盛大に挙行することになりました。画期的な催しでありアダムスキー問題PRの絶好のチャンスなので総力をあげて取り組みます(38頁に予告)。多数ご来場を。(K)

日本GAP機関誌・季刊 春季号
UFO contactee 86号
編集発行人　久保田八郎
発行所　日本GAP
〒133 東京都江戸川区本一色町365-818
TEL(03)651-0958
振替東京4-35912
一九八五年一月二十日発行
定価七〇〇円・送料二〇〇円

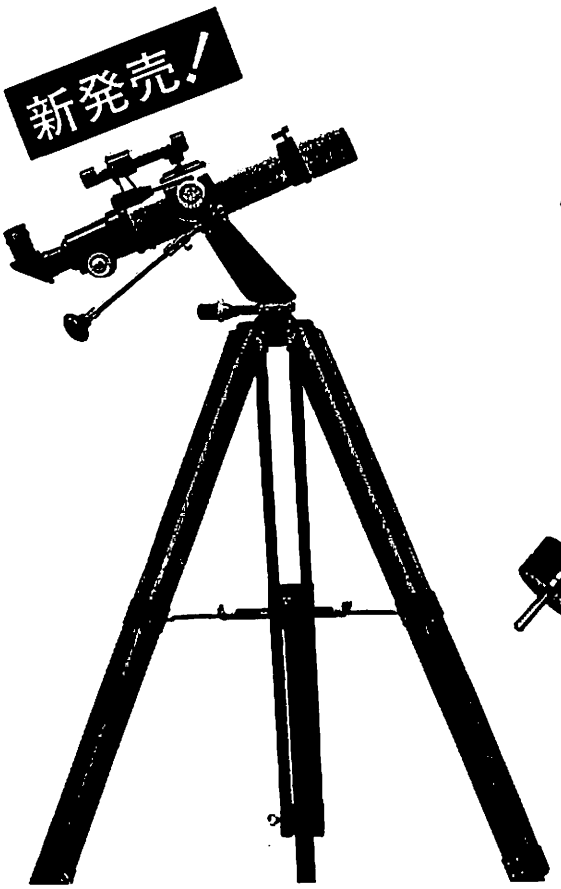
UFO contactee 88号 昭和60年1月20日発行 発行所 日本GAP 〒133東京都江戸川区本一色町365－818

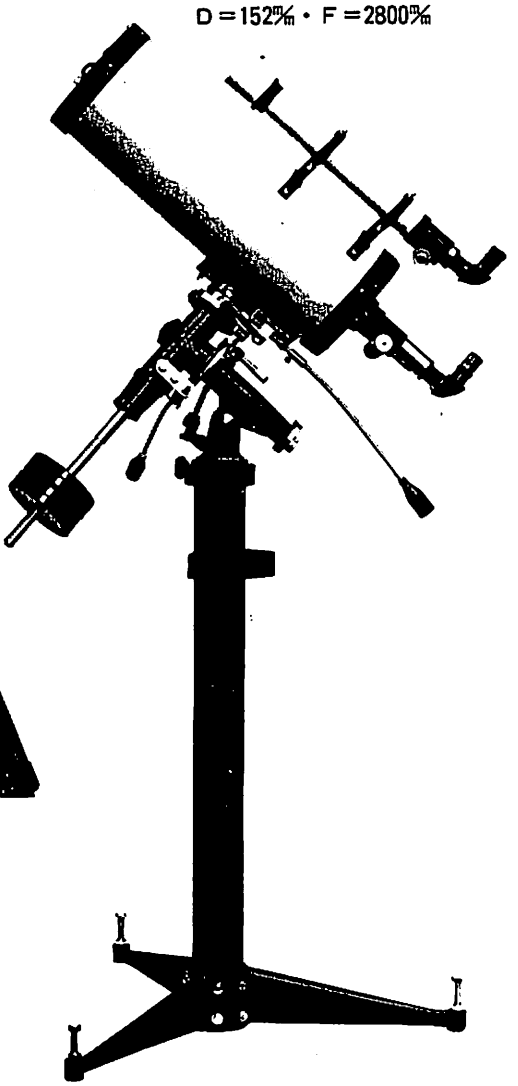
光学性能に優れた サテライト天体望遠鏡。

新発売！

R-6 定価 ¥320,000

D＝152㎜・F＝2800㎜





短焦点屈折経緯台

A-63F 定価 ¥38,500 送料 ¥ 1,500

D＝60㎜ F＝400㎜

〈付属品〉
SR-5㎜・HM-12.5㎜
ダイヤゴナル、ムーングラス
5倍17㎜ファインダー
木製三脚付

■特約店 群馬：前橋至誠堂
TEL. (0272)65－2718

東京：アトム
TEL. (03) 866－5255

SYW 株式会社 山本製作所
〒174 東京都板橋区大原町5－3
TEL. 03 (966) 2408

定価七〇〇円・送料二〇〇円